

21st 三遠南信サミット 2013in南信州

新しい連携体制の実現に向けて
～三遠南信連携の発展と越境連携地域交流～



事業報告書

第21回 三遠南信サミット
2013in南信州

平成25年10月30日(水)

会場 飯田文化会館
シルクホテル

目 次

1 第 21 回 三遠南信サミット 2013 in 南信州 プログラム	2
2 全体会　主催者等あいさつ・来賓祝辞	4
3 全体会　全国越境地域政策シンポジウム	12
4 「道」分科会　要旨	32
5 「技」分科会　要旨	52
6 「風土」分科会　要旨	74
7 「山・住」合同分科会　要旨	96
8 三遠南信地域住民セッション　要旨	121
9 報告会　要旨	131
10 交流会	139



1 第21回 三遠南信サミット2013 in 南信州 プログラム

San-En-Nanshin Summit 2013 in Minamishinsyu

- 日 時 平成25年10月30日(水)
- 会 場 飯田文化会館(飯田市高羽町5-5-1)
シルクホテル(飯田市錦町1-10)
- 主 催 三遠南信地域連携ビジョン推進会議(SENA)
- 共 催 三遠南信地域交流ネットワーク会議
三遠南信地域経済開発協議会
三遠南信地域整備連絡会議
- 後 援 国土交通省、経済産業省、農林水産省、長野県、静岡県、愛知県
- 参加者 600名
- 日 程
 - 1 全体会(13:00~15:00) [場所:飯田文化会館]
 - あいさつ
 - ・主催者あいさつ
三遠南信地域連携ビジョン推進会議会長 浜松市長 鈴木 康友
 - ・開催地域代表あいさつ
三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長 飯田市長 牧野 光朗
三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長 飯田商工会議所会頭 柴田 忠昭
 - ・来賓祝辞
農林水産省関東農政局長 藤本 潔 氏
国土交通省中部地方整備局副局長 渡辺 秀樹 氏
経済産業省関東経済産業局地域経済部長 野口 聰 氏
長野県副知事 和田 恒良 氏
 - 全国越境地域政策シンポジウム
 - テーマ :「県境地域の新たな可能性」
 - パネリスト :八戸市総合政策部長 大坪 秀一 氏
足利工業大学副学長 蟹江 好弘 氏
島根県中山間地域研究センター研究統括監 藤山 浩 氏
延岡市長 首藤 正治 氏

九州経済フォーラム理事 西座 聖樹 氏
コーディネーター：愛知大学三遠南信地域連携研究センター長 戸田 敏行 氏

2 分科会（15:45～17:30）[場所：シルクホテル]

○「道」分科会

テーマ : 「三遠南信自動車道 -次代を拓く交通基盤-」
コーディネーター：飯田市長 牧野 光朗

○「技」分科会

テーマ：「人財育成と持続的産業発展の有機的連携をめざす」
コーディネーター：飯田市工業課 久保田 優典 氏

○「風土」分科会

テーマ：「あるもの探し」で発見！三遠南信の底力！
コーディネーター：一般財団法人阿智開発公社理事長 羽場 瞳美 氏

○「山・住」合同分科会

テーマ：「人口減少時代における地域社会の持続可能性を考える」
コーディネーター：豊橋技術科学大学教授 大貝 彰 氏

3 報告会（18:00～18:30）[場所：シルクホテル]

- ・各分科会の報告 : 各分科会コーディネーター
- ・サミット宣言 : 飯田市長 牧野 光朗
- ・次回開催地域代表あいさつ : 浜松市長 鈴木 康友

4 交流会（18:30～20:00）[場所：シルクホテル]

5 その他

- ・三遠南信地域住民セッション（10:00～12:00）
- ・三遠南信地域経済開発協議会役員会（10:30～12:40）
- ・三遠南信地城市町村議会議長協議会総会（10:00～12:00）

2 全体会　主催者等あいさつ・来賓祝辞

San-En-Nanshin Summit 2013 in Minamishinsyu

○主催者あいさつ

■三遠南信地域連携ビジョン推進会議会長

浜松市長 鈴木康友



皆様、こんにちは。本日は、第21回となります三遠南信サミットに本当に多くの皆様にご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。まずは、牧野市長を初め飯田市の皆様、そして南信州の皆様には、今回は南信州の開催ということで大変ご尽力をいただきましたことに厚く御礼を申し上げます。

また、関係省庁の皆様、関係自治体の皆様、そして経済団体の皆様、大学及び教育界の皆様、そして市民団体の皆様、本当に多くの関係者の皆様にご出席を賜り、こうして盛大に開催できること、大変うれしく存じます。

今回のテーマは「新連携体制の実現に向けて」ということで、このサミットも新しいステップに入らねばならない時期にきているのではないかと思います。このサミットに先立ちまして、先ほど三遠南信地域経済開発協議会の会議に出席をしておりましたけれども、三遠南信自動車道の整備促進のお話が出ておりました。昨年、三遠道路が一部供用開始となりましたが、それと同時に、東西の大動脈であります新東名高速道路が静岡県のほぼ全線供用開始になりました。今、東三河には観光客などの交流人口が大変増えているという

ことでございます。我々遠州の北部の地域も、そうした効果があらわれているわけでございまして、三遠南信自動車道の開通と新東名高速道路の開通、こうした社会資本整備によって地域に大きな波及効果が生まれているということ、大変うれしく思っております。

それからもう一つ、大事な変化がございまして、この三遠南信自動車道全線開通に向けましては、長野県側、愛知県側もほぼ目途がついておりまして、あとは私ども静岡県の中山間地域を通る部分をどうするかが問題となっていました。これまで現道活用という設定をされており、現実的に、その狭隘な道路を整備して高規格な道路として利用できるようにするというのは、至難の業であり、ほぼ無理だということでございます。この現道部分をどうするかということが大きな課題でございました。私もこれを、自分の任期のうちに何とかしたいということで、あの手この手を尽くしました結果、国のはうでもう一度、国直轄と地元の整備と役割分担を見直そうという動きが出てまいりまして、今、水窪北から佐久間までを計画段階評価ということで、その計画の前段階の作業に着手をしていただいております。これは本当に大きなことでございまして、これで国の役割と、私ども浜松市が整備をする区間の役割分担が明確になりますと、完全に飯田から浜松までの全線開通の目途が立ちます。あとは、いかに早くこれを整備するかということになってまいりますので、肃々と期成同盟会や三遠南信サミットなどの枠組みの中で、整備促進に向け取り組みをしていきたいと思います。

また、先日はリニア中央新幹線のルートとリニア飯田駅の位置がJR東海から発表されたということで、いよいよリニア中央新幹線も俄然現実味を帯びてまいります。このリ

ニア中央新幹線の整備に向けましても、一層このサミットの枠組みの中でも推進をして参りたいと思っています。こうした我々、三遠南信地域にとって大変重要な社会資本に最近、大きな動きが出てまいりまして、一層この連携強化に向けたいろいろな好影響が出てくるのではないかと思います。

そうした中で、この三遠南信地域連携ビジョン推進会議、通称「ＳＥＮＡ」と言うこの体制も見直しを図るため、今回、皆様に体制の強化と機能強化を図るためのご議論もいただきたいというように思っております。

それからもう一つ、今回は全国越境地域政策シンポジウムというものが開かれます。県境を越えた広域連携、いろいろな連携をしているのは、この三遠南信地域を含めまして全国に幾つかあります。こうした、それぞれの連携の取り組みの情報交換や、あるいは今後、横の繋がりによるいろいろな交流等の場が求められていたところ、愛知大学の三遠南信地域連携研究センターが文部科学省共同利用・共同研究拠点事業の越境地域政策研究拠点として指定をされたことによりまして、その研究の一環として今回、共催で初めてこのシンポジウムを行うということで、これも大きな意義のあることではないかなというように思います。

今回、この飯田で開催される第21回目のサミットは、いろいろな意味で新しいステップへ向けての大きな第一歩を踏み出す、そういうサミットになるのではないかなどというふうに思います。

それからもう一つ、ご報告を申し上げたいのは、26年7月発足予定の新しい組織に向かまして、新たに自治体が参加をしていただくということで、我々にとって喜ばしいことだと思います。静岡県から掛川市、菊川市、御前崎市、牧之原市という4市が来年の新体制発足に向けまして正式加入をご表明いただいていますし、南信州からは駒ヶ根市、飯島

町、宮田村、中川村、この皆様にご参加をいただくということで、一層この三遠南信地域の連携が強化をされるということでございます。

20回の開催を経て、新しい第一歩とも言える飯田市開催での第21回目のサミットにおきまして、こうした次々と新しい動きがスタートをするということで、我々のこの三遠南信地域連携もいよいよ新しい時代に入ったかなというふうに思います。ぜひ、今日のこのサミットでは、活発なご議論をいただきまして有意義なものとしていただきたいと思います。皆様にとって、この飯田での第21回三遠南信サミットが有意義なものとなりますことを心からご祈念申し上げまして、冒頭の御挨拶にかえさせていただきます。

本日は、誠にありがとうございました。

■三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長

飯田市長 牧野光朗



皆様、こんにちは。

本日は、この三遠南信サミット2013 in 南信州ということで圏域の多くの皆様方、このように一堂にご参集いただきまして盛大に開催できますことを、開催市を代表いたしまして感謝申し上げる次第でございます。本当に、ようこそ飯田にお越しいただきました。

飯田市は、りんご並木と人形劇のまちと言われますが、今年はりんご並木が誕生してからちょうど60周年、また人形劇のまちとしてスタートしてから35周年という、節目の年

になるわけであります。そのようなときに、この三遠南信サミットが飯田で開催されるとこと、誠に意義深く思います。

また、本日は農林水産省、それから国土交通省、経済産業省それぞれの幹部の皆様方、そして長野県からは和田副知事に来賓としてお越しいただきました。本当にありがとうございます。このように多くの皆様方が参加していただいております三遠南信サミットでございますが、発足したのが平成5年度ということで、以来、三遠南信地域における県境を越えた交流連携、発展に向けて、行政のみならず経済界や地域住民、あるいは大学の関係の皆様方、金融機関の関係の皆様方、本当にさまざまな皆様方にご参加をいただきながら、さまざまな議論、取り組みが進んできております。こうした皆様方の一方ならぬご尽力によりまして県境を越えた強い結びつき、これは全国に類まれな取り組みであるというように私自身も自負しております。まさに、圏域におきましてこうした取り組みができますのは、大きな財産と捉えております。こうしたすばらしい連携のもとに、県境を越えてさまざまな分野で今、いろいろな取り組みが進んでおり、これが県境地域の一つのモデルになっているのではないかと思います。

振り返って、我が国の今の状況を鑑みますと、これから少子化、高齢化、そして人口減少がますます進んでいくことが見込まれています。全国的にこうした状況が続く中で、いかにして地域としての持続可能性というものを追求していくか、これはどの地域にとっても大変大きなテーマになっています。そうした中で、やはり私たちが考えなければならないのは、小さな圏域の中で考えていても、行政の枠の中で考えていてもなかなか解決し得ない課題が多くある中で、やはり圏域全体で、それもなるべく生活圏や経済圏、あるいはそれ以上の枠組みというものを念頭に置きながら、その解決策を図っていくということ

が非常に重要になってくると思います。

当南信州では、全国に先駆けて14市町村におきまして定住自立圏協定を結び、地域におきまして人口減少や少子化、高齢化に対応できるような、こうした仕組みづくりを南信州圏域一体となってつくってきているところです。こうした考え方は、さらに広めていけば天竜川、豊川といった流域圏にもかかわってくることと思っておりまして、それがまさにこの三遠南信の圏域全体の将来ビジョンになっていくというように思います。やはり、スケールメリットを生かして市町村事務の共同処理をしっかりと担っていくような、広域連合の枠組みというものを三遠南信地域全体でも検討していくことができればというように思います。

また、古くから歴史的にも、文化的にもつながりの強い三遠南信地域であります。250万流域都市圏の創造ということで、三遠南信地域連携ビジョンもそのテーマを掲げておられます。こうした考え方というものは、圏域全体で共有できるものというように考えております。先ほど、会長からもお話をありましたように私どもの地域は、これからリニア中央新幹線が通るまちとして大きな変化を遂げていく、そういう状況になるかというように思います。先日、JR東海から環境影響評価準備書の公表がなされ、具体的な駅やルートの位置も確定してきているところであります。こうしたリニア中央新幹線の時代に向けて、私どもの地域が三遠南信圏域の北の玄関口としての機能を最大限に発揮していくためには、やはり三遠南信自動車道、そして浜松三ヶ日・豊橋道路を含めまして三遠南信圏域の縦の軸を1日も早く整備していくことが必要であると考えます。こうした縦の軸と、東海道新幹線、あるいは東名高速道路、新東名高速道路、そして新たにリニア中央新幹線を加えた横の軸、こうしたもののがうまく相乗的に機能することにより

まして、三遠南信圏域のより一層の発展が約束されてくるのではないかというように思います。そのためには、やはりハード面の整備のみならず、戦略的に地域づくりを進めていく必要があるというように考えるところであり、そうした中で今回のサミットのテーマが「新しい連携体制の実現に向けて～三遠南信連携の発展と越境連携地域交流～」というものになったということは、非常に時宜を得たものというように思います。来年度には、体制機能をより強化した新ＳＥＮＡも設置されますし、新しい時代に向けて新しい組織を立ち上げ、そして新しい考え方でこれから地域づくりをしていけるよう、このサミットがその契機になればということを期待するところでございます。

本日のサミットには行政のみならず議会、経済界、NPO、住民の皆様など、さまざまな立場の方々にご参加をいただいております。さまざまな角度から活発な意見、提案をしていただき、このサミットが充実したものになりますようよろしくお願ひ申し上げ、今日ご参加いただきました皆様方の益々のご活躍、ご健勝を祈念して私からの挨拶とさせていただきます。

本日は、よろしくお願ひいたします。

**■三遠南信地域連携ビジョン推進会議副会長
飯田商工会議所会頭 柴田忠昭**



皆様、こんにちは。本日、多くのご関係の皆様、そしてまたご来賓の皆様をお迎えい

たしまして、「新しい連携体制の実現に向けて」をテーマに第21回目を迎える「三遠南信サミット2013 in 南信州」を盛大に開催できますことは、大変大きな喜びでございます。また、この飯田の地に遠くからお集まりをいただきました皆様、誠にありがとうございます。心から御礼申し上げたいと思います。経済界を代表いたしまして、多くの皆様のご尽力に対しまして重ねて深く感謝を申し上げるところであります。

三遠南信地域の連携、この長い歴史がある活動の中で、県境を越えた取り組みと申しますのは全国的にも珍しく、先進的な活動と言われております。平成6年に第1回三遠南信サミットが開催され、平成19年には三遠南信地域連携ビジョンに合意をいたしました。平成20年には、三遠南信地域連携ビジョン推進会議、通称「ＳＥＮＡ」と申しておりますが、これが発足し、将来像を「三遠南信地域250万流域都市圏創造」というように名づけまして、3地域を一体的な都市圏として行政、経済、住民活動など、さまざまな分野の交流連携を一層強化することを目的としているところでございます。重点プロジェクトの中では、中部圏の中核となります地域基盤の形成や持続発展的な産業集積の形成などの事業を行っているところでございます。

本日も、この後の対談、あるいは分科会の中で「道」「技」「風土」「山・住」に分かれまして、この地域のインフラ、産業、観光など、熱い討論が交わされるものと期待をしているところでございます。特に、「道」の中での大きなテーマ、この南信州飯田の地に国家プロジェクトでありますリニア中央新幹線の駅が、今から14年後の2027年に実現しようとしております。三遠南信地域の北の玄関口として、三遠南信自動車道の早期開通実現とあわせて大いに期待をしたいものであります。

また、三遠南信地域経済開発協議会では

自動車道の1日も早い開通のため、民意を高めるために「卓上のぼり旗」を今回つくり上げました。そして、本日、ロビーにも飾ってありますので、ぜひともご覧いただきたいと思います。

最後に、三遠南信地域に住み、活躍されておられるそれぞれの地域の住民の皆様、団体、企業の皆様が三遠南信に対する熱い思いと活動のベクトルを一致させることにより相乗効果を發揮いたしまして、地域の振興が発展されますことを期待したいと思います。

本日は皆様、どうぞよろしくお願ひをいたします。

■農林水産省関東農政局長 藤本潔 様



皆様、こんにちは。

本日は、第21回の三遠南信サミットにお招きをいただきまして大変ありがとうございます。また、主催者でいらっしゃいます三遠南信地域連携ビジョン推進会議並びに地元飯田市を初めとする関係者の皆様には、本日、ここに本サミットが盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。また、ご臨席の皆様におかれましては、平素から農林水産行政の推進にご理解、ご尽力いただいていることを、この場をかりまして厚く御礼を申し上げます。

この三遠南信地域は私から言うまでもなく、天竜川、豊川流域を中心に県境を越えて連携して地域の活性化、これに取り組んでおられるということに対して深く敬意を表する

ものでございます。ただいま農林水産省では、首相官邸では「活力創造本部」、省内でも「攻めの農林水産業推進本部」というような検討組織を設けて、政府全体で「農林水産業・地域の活力創造プラン」というものを策定して、これから農林水産業を成長産業とするためにはどうしたらいいかということを検討しているところでございます。ここでは林大臣のもと、「現場の宝」というものを、すなわちこれは優良事例ですが、現場の優良事例を全国に横展開するということを通じて、農林水産業の競争力の確保を図っていきたいというように考えているところでございます。

この三遠南信サミットでございますが、今日は飯田で開催ということでございますので、ご当地の名産品に皆さん、もう御存じの市田柿というものがございますが、これを見てみると、一次産業である農林業、二次産業である工業、そして三次産業であるサービス業、これをインテグレートして価値を高めるという六次産業化がなされており、これを成功させるための条件である、良い原材料のための栽培技術、そして柿もみなどに代表されるような確かな加工技術、さらに天竜川の川霧という豊かな環境と、このように三拍子そろったところに地域団体商標という知的財産の活用というようなことに、既に7年も前から取り組んでおられる全国でも有数の先進地というように考えております。また、この後、分科会では柚餅子の展開を通じた高付加価値化というようなことも検討されるというように聞いております。

もともとこの三遠南信地域というのは、野菜、果樹、花、そしてお茶という多様な農業が営まれる地域でございますけれども、最近は、これに信州大学や豊橋技術科学大学を初めとする地元の大学であるとか、企業との連携によってIT化や植物工場という新しい農業のあり方などにも非常に力を入れておられる地域だというように認識しております。

こうした取り組みによって、まさに我々が今、進めようとしている「攻めの農林水産業」これを本当に地でいっているという地域であろうというように思います。私は、この地域の取組みが全国の農業にとって、農林水産業にとって非常によい刺激になるということを期待しております、私どもとしても、この地域の農業の持続的な発展に向けて全力で応援をしていきたいというように考えております。

最後に、今回のサミットが実りあるものとなり、三遠南信地域のさらなる発展につながるということを祈念いたしまして、簡単ではございますけれども私からのお祝いの御挨拶とさせていただきます。

本日はどうも、おめでとうございます。

■国土交通省中部地方整備局副局長 渡辺秀樹 様



皆様、こんにちは。本日、第21回目の三遠南信サミットがかくも盛大に開催されたことにつきまして、心からお祝いを申し上げたいと思います。

また、日ごろから国土交通行政、また私どもの地方整備局の事業に対しまして格段のご支援、ご協力をいただいていることに厚く御礼を申し上げる次第でございます。

この三遠南信サミットにつきまして、私事になりますが、私は十数年前に静岡県庁のほうに出向しております、そのときこの三遠南信に關係する仕事も担当しておりました。そのとき三遠南信という言葉を初めて聞いた

わけでございますけれども、余り耳なれなかった印象がございます。何かフランス語のような響きの言葉だなと思った覚えがありますけれども、それから21回目ということで、大変多方面にわたって取り組みが格段に進化してきているという感じしております、そのうちの一つがインフラの整備充実ということではないかと思っております。

先ほど来、会長さんを初めとしまして、いろいろお話が出ておりますけれども、昨年の3月に初めて愛知・静岡を結ぶ三遠南信自動車道の鳳来峠インターから、浜松いなさ北インターの約13キロメートルが開通いたしましたし、4月には新東名高速道路の御殿場ジャンクションから三ヶ日ジャンクションまでが開通しまして、非常に広域的なネットワーク化が図られたところでございます。

また、この新東名高速道路につきましては、愛知県側も平成26年度には開通が予定されているということでございますし、三遠南信自動車道につきましては、長野・静岡を結ぶ青崩峠におきましては昨年度に本線工事に着手、また静岡・愛知を結ぶ佐久間・三遠道路の（仮称）佐久間第一トンネル本体についても昨年度に着手しているということで、着実に事業が進んでいるところでございます。水窪北～佐久間間につきましても、昨年度から計画段階評価を実施しているところでございます。また鉄道でも、先ほど来、お話に出ておりますリニア中央新幹線の駅が、こちらの飯田市に設置されるということで位置も決まってきたということでございまして、こういった高速道路、高速鉄道などの社会資本が目に見える形で、当時は夢でしかなかった事業が、まさに目に見える形で進められているという地域であろうというように思っております。

こういったインフラは、私ども国土交通省が非常に力を入れてやっているところでございますけれども、やはり三遠南信サミット

という意味で言えば、それを利用して今後の地域づくりをどうしていくのかということが本当に重要なことであろうかなというように思っております。少子高齢化社会の、いわば先進地域であるような地方部におきまして、こういった三遠南信サミットのような先進的な取り組みを、20年前から取り組んでおられるということに非常に敬意を持って、ずっと眺めてきているところでございますけれども、今後とも、こういったインフラも活用しながら交流、地域づくりについて、ますます進めていっていただくことが、望ましいのではないかと思います。

今後とも、三遠南信地域のますますのご発展、それからご臨席の皆様方の一層のご発展を祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます

本日は、誠におめでとうございました。

■経済産業省関東経済産業局地域経済部長 野口聰 様



皆様、こんにちは。局長の安藤は、別件での所用がございますため、局長から預かりました祝辞を代読させていただきます。

本日は、三遠南信サミット2013 in 南信州が関係各位のご協力により、かくも盛大に開催されることを心よりお喜び申し上げます。また、ご臨席の皆様には日ごろより経済産業行政に多大なるご支援、ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

私ども関東経済産業局は、経済産業省の

地方機関として長野県、静岡県を含む1都10県の広域関東圏において、産業クラスター政策などを通じまして地域経済の活性化、中小企業支援など、経済産業政策を実行してまいりました。最近では、アベノミクスの三本目の矢である「日本再興戦略」と、関東経済産業局で策定しました「関東新産業創出戦略」をいち早く地域で展開するため、具体的なアクションプラン「関東経済産業局行動計画2013」を策定し、現在、取り組みを進めているところでございます。その中では、新産業分野として四つの重点分野を特定しておりますけれども、三遠南信地域でも取り組みが進む健康・医療・福祉分野、航空宇宙分野、地域資源の掘り起こし・発信を行うクリエイティブ産業分野が含まれております。

三遠南信地域では、これまで産業クラスター計画に沿って、三遠南信クラスター推進会議の皆様を中心に地域イノベーションに取り組んできました。最近では、飯田地域における航空宇宙分野の共同受注や海外販路開拓への積極的な活動、浜松地域における医工連携や次世代輸送機器分野への取り組み、豊橋地域における植物工場、農商工連携の動きなど、新産業の創出に取り組んでいただいております。私ども関東経済産業局も、三遠南信地域におけるさらなる新産業の創出に向けて、皆様と協力して成果を上げていきたいと思っております。

三遠南信サミットは、本年で21回目の開催でありますけれども、三遠南信地域が一体的な都市圏として発展するため、県境を隔てた三つの地域の皆様が一堂に会し、文化や歴史、交通、生活環境、産業振興など多岐にわたる議論が行われ、三遠南信の連携の指針として三遠南信地域連携ビジョンが生まれたとお聞きしておりますけれども、長きにわたり取り組みを継続し、成果を蓄積されていることは大変意義深いことであり、関係者皆様のご努力に敬意を表する次第であります。地域

の元気なくして国の元気はないとよく言われますけれども、三遠南信地域連携ビジョンの実践を通じて、三遠南信地域から多くの新産業が創出され、国内経済を牽引していただけることを期待しております。

最後になりますが、本サミットの開催に当たって多大なご尽力をいただきました鈴木会長、牧野副会長をはじめ、関係者の皆様に心から敬意を表しますとともに、三遠南信地域のますますのご発展並びに本日ご参加の皆様方の一層のご活躍を祈念いたしまして、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

本日は、おめでとうございます。

■長野県副知事

和田恭良 様



皆様、こんにちは。阿部知事は今、海外渡航中のため、代わりまして私が御挨拶申し上げます。まずは三遠南信サミット2013がこのように盛大に開催されますことを心からお喜びを申し上げたいと思います。

県境を越える、この三遠南信地域の連携を深めまして、自発的な地域づくりにいち早く取り組んでこられました関係者の皆様、長年のご尽力に本当に心から敬意を表する次第でございます。この連携の大きな象徴とも言える三遠南信自動車道ですが、昨年、新東名高速道路に接続されました。この結果、交通の流れが大変活発になっておりまして、信州への入り込み客も大変増加をしているということでございまして、この整備の効果が非常

に大きく出ているのではないかと思っております。この整備がさらに進みますと、本県の場合でございますが、この南信地域のほとんどの地域が中央道から1時間以内でつながってくるということでございまして、防災面のみならず医療救急面などでも、その効果は大変大きなものがあると思っております。

こうした整備をさらに進めまして、その効果を着実に地域内外の発展に結びつけていくこと、これは県としても重要であるという認識のもと、今年度、策定いたしました「しあわせ信州創造プラン」の中にも、しっかりと明記をさせていただいているところでございます。

また、このプランの中でございますけれども、この地域のように県境を越えて伝えられ、また非常に特徴的な芸能文化のつながりというものも守っていくことを含めまして、県としてもこの文化振興に力を入れていきたいと考えております。これまで厳しい財政状況のもとで、ややもするとこういう文化というものは片側に置かがちでございましたけれども、来年度に向けて、組織改正を検討しておりますが、その一つとして、文化振興や文化面における組織強化というのも図ってまいりたいと考えております。

いずれにしましても国、市町村の皆様を始め、関係各位のご理解、ご協力のもと、この地域を劇的に変えていく可能性を含めましたリニア中央新幹線の駅に伴う関連整備とともに、県としてもしっかり取り組み、地域の発展につなげてまいりたいと考えております。

結びに、本日のサミットを通じて広域的な連携がますます強固なものとなりますこと、そしてご参加の皆様の今後ますますのご活躍を祈念いたしまして、私の御挨拶とさせていただきます。

本日は、誠におめでとうございます。

3 全体会　全国越境地域政策シンポジウム

San-En-Nanshin Summit 2013 in Minamishinsyu

本項の内容は愛知大学作成の「全国越境地域政策シンポジウム議事録」より転載しています。(なお、本原稿は都合により1月末日時点での校正段階のものとなっております。)

全国越境地域政策シンポジウムの開催にあたって

愛知大学三遠南信地域連携研究センターは、2004年に設立され、これまで10年間にわたり三遠南信地域の地域づくりやG I S(地理情報科学)の研究を継続してまいりました。そして、本年の4月からは、文部科学省「共同利用・共同研究拠点」制度において、越境地域の政策研究を研究拠点として進める「越境地域政策研究拠点」として認定され、全国や海外の越境地域を対象とした政策研究をスタートしております。

我が国の市町村を概観しますと、その四割は県境に接しています。これらの地域では、経済活動や自然環境保全、医療、防災などへの対応に県境を跨いだ政策、つまり「越境地域政策」が求められています。しかし、現状では県境地域を統一的に管理する行政機関や政策データの整備も困難な状況です。一方、行政境界を跨いだ地域は、特定の行政機関が存在しないために、寧ろ従来の行政システムを超えた発想を持つことも可能と考えられます。

三遠南信地域は、こうした県境地域のモデルとして、全国的にも注目されていますが、全国県境地域での政策的な経験を共有するために、第1回全国越境地域政策シンポジウム「県境地域の新たな可能性」を開催することとなりました。地域政策研究者や行政関係のパネリストから、県境を越えた医療、防災、都市連携、中山間地域対策、道州制へのアプローチなどの事例や研究を紹介いただき、今後の越境地域政策について皆様とともに考えて参ります。

また、本シンポジウムは、三遠南信地域連携ビジョン推進会議のご理解とご協力により、「第21回三遠南信サミット2013 in 南信州」の全体会の中で実施することとなりました。これを契機として、三遠南信地域連携研究センターでは、引き続き、皆様方との越境地域政策に関する共同研究を進めて参りたいと考えております。今後ともご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

2013年10月30日
愛知大学三遠南信地域連携研究センター
センター長 戸田敏行

パネリスト・コーディネーター



八戸市
総合政策部長
大坪 秀一 氏

青森県八戸市生まれ。東北大学経済学部卒業、1982年、八戸市役所入庁。政策推進課長、市民健康部次長、総合政策部次長を経て、現在、八戸市総合政策部長として、八戸圏域の自治体連携に関する分野で活躍。



足利工業大学
副学長
蟹江 好弘 氏

栃木県桐生市生まれ。桐生工業高校機械科卒業、石川島播磨重工(株)を経て、明治大学で建築を専攻。1971年より足利工業大学で教鞭。「むらづくり」「まちづくり」「農村部での公共施設設計画」を実践。栃木県農業農村活性化塾アドバイザー、群馬県館林市都市計画審議会委員、館林市市勢功労賞、館林市功労賞受賞など県や市から複数の表彰多数。



島根県中山間地域
研究センター
研究統括監
藤山 浩 氏

島根県益田市生まれ。一橋大学経済学部卒業、広島大学大学院社会科学研究科マジメント専攻修了。広島県・県立高校社会科教諭を経て、1998年、島根県中山間地域研究センター地域研究課研究員に着任。2013年より現職。中山間地域政策、地域計画、地域づくり、環境管理、GISが専門。国土交通省国土審議会政策部会長期展望委員会委員等を務める。



延岡市長
首藤 正治 氏

宮崎県延岡市生まれ。宮崎県立延岡西高等学校卒業、京都大学工学部物理工学科卒業。小西六写真工業㈱（現コニカミノルタ）、㈱スドー代表取締役を経て、2006年2月より第24代延岡市長就任、2010年2月より第25代延岡市長。



九州経済
フォーラム
理事
西座 聖樹 氏

福岡県生まれ。医療法人、社会福祉法人、NPO法人、株式会社等役員を歴任。九州経済フォーラム、広域連携研究会座長として九州県際サミット及び（仮想）九州府議会を開催するなど、九州経済フォーラム理事として、道州制や県境地域自治体連携に関する分野で活躍。



愛知大学
地域政策学部教授
三遠南信地域連携
研究センター長
戸田 敏行 氏

兵庫県生まれ。豊橋技術科学大学・同大学院を修了。1985年、社団法人東三河地域研究センター入所。三遠南信地域の計画・地域プロジェクトに携わる。2011年4月より愛知大学地域政策学部教授。2013年4月より三遠南信地域連携研究センター長。文部科学省共同利用・共同研究拠点「越境地域政策研究拠点」代表。

1. 趣旨説明

○司会：平成20年3月に「三遠南信地域連携ビジョン」が策定されまして、三遠南信地域ではこれまで以上に交流・連携事業が推進されています。この交流・連携事業は3県を跨ぐという性質を常に帶びていますが、本日は全国各地の県境地域でさまざまな活動をされている皆様をお招きしまして、それぞれの地域の現状をお話しいただきますとともに、今後、県境地域で目指すべき地域の在り方を皆様と共有することを目的に、愛知大学三遠南信地域連携研究センターとの共催事業として「全国越境地域政策シンポジウム」を開催することになりました。

それでは、「全国越境地域政策シンポジウム」のコーディネーターからご紹介させていただきます。コーディネーターをお務めいただきますのは愛知大学地域政策学部教授で、三遠南信地域連携研究センターのセンター長としてもご活躍の戸田敏行様にお願いいたします。

続きまして、本日のパネリストの皆様方をご紹介させていただきます。パネリストの皆様方は向かって左から、九州経済フォーラム理事の西座聖樹様、宮崎県延岡市長の首藤正治様、島根県中山間地域研究センター研究統括監の藤山浩様、足利工業大学副学長の蟹江好弘様、青森県八戸市総合政策部長の大坪秀一様、以上5名のパネリストの皆様と共にさまざまな意見交換をしていただきます。それでは、よろしくお願ひいたします。

○戸田：皆さん、こんにちは。愛知大学の戸田でございます。先ほど三遠南信地域連携ビジョン推進会議の鈴木康友会長のご挨拶でご紹介いただきました。愛知大学は全国の越境・県境で境界を越えた地域づくりの研究をしようということで、文部科学省

の認定を受け今年から研究を始めております。

三遠南信は全国の県境地域のモデルですが、今回の「第1回越境地域政策のシンポジウム」では、パネリストの皆さんには、北から順次お集まりをいただきました。県境地域の新たな可能性、地図が映っておりますが、北は八戸から南は九州ということで全国からお集まりいただいて政策を語ろうということです。

<資料 県境地域の新たな可能性>

地図で県境を持っている市町村を見ていただいくと、非常に多いことに気が付きます。北海道と九州と沖縄は周りが海ですから、それを除きますと、人口で見ましても5割、53%です。市町村の数では44%になります。そうしますと、広域で地域をつくるいくときに、県境を越えることをやらなければならないことだと思います。ところが、なかなか進んでいません。

そこで全国で取り組んでおられる行政の方々、あるいは研究者の方々にお集まりいただきて、これから越境地域政策をどのように考えていいかを議論していただきたいと思います。進め方としては、最初に各地域のご紹介をいただきて、それからテーマを少し絞り込みまして議論をしたいと思っております。

2. 地域紹介・活動紹介

○戸田：それでは早速、越境地域の活動の紹介をいただきたいと思います。最初は北からと考えております。青森・岩手県境地域、八戸の大坪部長さんからご紹介いただきたいと思います。よろしくお願いします。

○大坪：皆さん、こんにちは。私は本州最北端の青森県の南東部に位置します八戸市から参りました大坪と申します。どうぞよ

ろしくお願ひいたします。私は行政の代表パネリストということで、本日はお話をさせていただきたいと思います。

市の総合政策部というセクションに私はおりますが、昨今のさまざまな情勢をふまえまして、広域行政あるいは広域連携の施策についてかなり力を入れて取り組んでいます。

<資料 青森・岩手県境地域>

本日は県境地域での取り組みということですが、私どもは「三圏域」という呼び方をしております、岩手県北との広域、県境を跨がった取り組みについて、少しご紹介を申し上げたいと思います。

八戸市を含みます三圏域の中で、まず、岩手県の県北にあります久慈市は、NHK の朝の連続ドラマの「あまちゃん」で一躍有名になった市です。久慈市は人口が約 3 万 7,000 人。その内陸部に位置する二戸市という市があります。そちらの人口が約 3 万人。それと、私どもの八戸市の人口は 24 万人ありますが、この 3 市が中心となりまして、青森県の県南地域と岩手県の県北地域との連携を進めているという取り組みです。

古くは藩政時代のころから、南部藩という縁（えにし）を持って結ばれた地域です。南部氏は中世から北東北の地に居を構えて地域を統治してまいりましたが、もともとは山梨県の身延町、南部町の出身です。足利尊氏の時代に北の地を治めよということで、南部藩を北東北の地域につくり、その拠点の 1 つとなりましたのが八戸市です。

県境地域としては、青森・岩手両県の 16 市町村に跨がる地域です。人口は合計約 46 万人、面積は 3,500 平方キロメートルで、こちらの三遠南信地域の約半分という感じです。人口 46 万人というのは、こちらの地

域の 5 分の 1 ぐらいというスケールです。また、経済活動におきましては工業出荷額が約 7,200 億円。この地域とは格差がありまして、17 分の 1 ぐらいの地域だと思っていただければよろしいかと思います。

<資料 三圏域（八戸・久慈・二戸）の概要>

私どもの広域連携の取り組みが始まりましたのは、現小林八戸市長が平成 17 年の選挙でマニフェストに掲げてスタートしたのが発端です。平成 18 年度に、八戸市・久慈市・二戸市の 3 市長、青森県三八地域県民局ならびに岩手県北広域振興局長の 5 者からなる連携の懇談会を設置しまして、さまざまな連携施策を検討・実施しています。

まず初めに、名称とロゴを決めようということで決定しています。画面の右上のところにロゴマークと名称があります。「北緯 40° ナニヤトヤラ連邦」という名称を付けまして、ロゴマークとしては、三圏域のシルエットと、地域産業が水産と農業という特性を持っておりますので、釣りざおと農具を手にしたシルエットとなっています。北緯 40 度ぐらいの圏域に三圏域の市町村が収まっているということで、それをシャープにデザインしたロゴマークを採用しています。

続きまして、今、取り組んでいる施策の内容です。こちらの資料には、防災を中心と/o お話をありましたので、防災関係の連携施策を紹介させていただきました。一昨年、東日本大震災がありました。三陸沿岸地域である当市と当圏域は、常に地震・津波といった災害の危険にさらされています。そのようなことから防災対策は何にもまして重要な行政課題です。多重的に多くの地域・自治体の間で災害時相互応援協定を結んでいます。三圏域におきましても、まずは平成 19 年度に連携施策のトップ

を切って実施したのが、災害時相互応援協定でした。そして、この応援協定に基づきまして、情報伝達訓練を毎年2回ほど実施しています。

また、ハザードマップを各自治体でつくりているのですが、それを共有しまして応援する体制を構築しています。本年度は、三圏域連携懇談会のなかで久慈市長さんからご提案がありました、岩手県主催の久慈広域地域防災訓練に八戸市ならびに二戸市の職員が参加・観覧するという事業も実施しております。災害時には応援を円滑にできるように、三圏域の顔の見える関係づくりに注力をしています。

防災事業につきましては、今、ご紹介申し上げたような内容ですが、その他に専門部会を組織いたしました。防災のほか、4つの専門部会において、産業活性化、広域観光、森林資源活用、そして住民の皆さんとのスポーツ文化交流という事業を実施してきています。

本年度からは、行政面におきましても、それぞれの市の広報紙における各市の紹介を掲載する紙面交換を実施しております。また、ふるさと納税という制度がありますが、それぞれ3市ゆかりの方々がいらっしゃることから、相互ピーアールする事業も本年度からスタートしています。

以上、簡単ですが、私どもの青森県・岩手県北の三圏域地域での連携の取り組みのご紹介とさせていただきます。

○戸田：ありがとうございました。復興を県境を越えてどうするかという、三遠南信にとっても大きな課題だと思いますので、これは後ほどご議論させていただきたいと思います。それでは南に下りまして、栃木・群馬県境地域、足利工業大学の蟹江先生にお願いします。

<資料 栃木・群馬県境地域>

○蟹江：蟹江でございます。それでは、栃木・群馬の県境地域には両毛地域という地域がありますが、ここでの県境を越えた交流についてご紹介させていただきます。

皆さんは、栃木県と群馬県について分かれますか。私はいまだに鳥取県と島根県の位置がよく分かりません。そのぐらい栃木県と群馬県は位置が確認しにくいのです。図の右側が栃木県、左側が群馬県です。ちょっと違うのが群馬県からは総理大臣が4人、栃木県からは1人も出でていません。そのぐらいの差です。明治初期、大泉町・千代田町・明和町・館林町・邑楽町等は栃木県でした。明治の新制度では県の境目がかなりいい加減で、元の幕藩体制の藩を境界として仕切ったのです。これは物理的には川の真ん中や山の尾根です。

今日の主要テーマは「県境を越えた」ということですから、これは大変意義が深いと思いますが、栃木県と群馬県の境目付近には渡良瀬川という川が流れています。これは田中正造で有名な鉱毒の川です。あまりイメージが良くないです。この渡良瀬川を境にして、栃木県側の佐野市と足利市、それから群馬県側の桐生市、太田市、館林市および合併した館林の周辺の町、平成の大合併が終った後、5市12町3村は6市5町に統合されました。私の郷里の桐生市は、ここで分断されています。これは全国的に珍しい現象です。この両毛地域、栃木県と群馬県の現在では6市5町ですが、非常に仲良くやっています。

<資料 両毛地域の位置>

細かい数字はともかく、位置的には、これが首都圏で、首都圏の80キロ圏にあります。群馬県と栃木県のちょうど中間部分です。

これは昔からの言い方をすると、上毛野国・下毛野国、毛野一族が支配していました。上毛野国・下毛野国の両方を取って「両毛」という言い方をします。

これは高崎経済大学のある先生が分けた経済地帯区分図です。東京、隣接県である首都圏第2層、その外側の首都圏第3層。首都圏第3層というと長野県ぐらいまで入ってきます。非常に面白いです。これまでの経済的な発展のトレンドを見ると、それが非常に特徴的です。これは、あとで戸田先生からお話があると思いますので飛ばします。大学院生と一緒に研究した全国の狭域的な地域連携 17 圏域のなかに両毛と、かの有名な三遠南信が出てまいります。

両毛地域はこれまで絹織物で非常に栄えました。ところが、経済がトーンダウンしてしまい、これはちょっとまずいと、何とかしなくてはいけないということで、昭和 44 年に両毛地域開発推進協議会が発足しました。根津さん（当時の会長）の財団法人日本経済研究所（現：一般財団法人日本経済研究所）にお願いして、ここの診断をやってもらいました。その後、両毛地域のなかにあるいろいろな既存の団体が連携を結びました。それが国にも認められて、平成 4 年～平成 5 年には両毛地域整備計画調査が 6 省庁合同で開始され、三遠南信ともども大変注目された地域です。時間になってしましました。詳しくは後半にお話し申し上げます。

＜資料 狹域的地域連携 17 圏域＞

＜資料 両毛地域における組織連携＞

○戸田：ありがとうございました。地方都市の県境を越えた連携については、後ほど補足していただきたいと思います。今度はなかなか場所を認知しにくいと言われた島

根県ですが、藤山さん、お願いします。

○藤山：皆さん、こんにちは。実は「島根は鳥取の左です」という T シャツが売っていますが、島根県は鳥取県の西側にあります。ここは地味な県ですが、全国で唯一の中山間地域研究センターというものが 15 年前にできています。

＜資料 鳥取・島根・岡山・広島・山口県境地域＞

それと同時に、これは島根県のセンターでもあるのですが、中国地方 5 県の知事のもとで中山間だから一緒にやろうということで、非常に珍しいです。唯一だと思います。中山間ということで県が連携した県境横断型の組織になっています。

各県から約 100 万円をいただいて、毎年、共同研究や共同事業をしています。8 年前からは各県からの派遣が始まりました。現在、鳥取県、山口県からもご派遣いただいている。このような取り組みをしています。

どのようなことをしているかというと、もちろんいろいろな総会もするのですが、例えば研修や人材育成を共同で進めております。各県のモデル地区を設定して、極めて実践的なモデルを構築していくと。いろいろなコミュニティの運営の仕方や複合的な事業運営といったことをやっています。

そして、学生たちもどんどん中山間に来て頑張り始めています。学生たちを集めて、「中国地方学生フォーラム」という若い人たちの連携も進めています。

このようななかから、自治会を通して、例えば国土形成計画や広域地方計画にもいろいろな政策提言をさせていただく活動をしている地域です。以上です。

＜資料 全国唯一県境横断型中山間地域振興のブロック連携組織＞

＜資料 実践的なモデル構築＞

○戸田：ありがとうございました。日本の県境をずっと見ますと、やはり中山間は非常に多いわけです。その意味で、どのように地域を維持していくかというのは、県境・越境するなかの非常に大きな課題ですので、これも後ほど補足をしていただきたいと思います。それでは九州に渡りまして、宮崎・大分県境になります。延岡市の首藤市長さん、お願ひします。

＜資料 宮崎・大分県境地域＞

○首藤：こんにちは。宮崎県の延岡から参りました。先ほどから栃木県と群馬県はよく分からぬとか、鳥取県と島根県はよく分からぬという話が出ていますが、九州になるとさらによく分からぬのが実情ではないかと思います。おそらく、こちらの皆さん方からすると、九州はほとんど海外という感じがするのではないかと思います。

そのなかで、こうして延岡市と佐伯市の部分をクローズアップして出しても、「これはいったい九州のどこなの？」という感じがするかもしれません。九州の中央部の一番東側の部分になります。延岡市は合併をして 868 平方キロメートルあるのですが、合併前と比べると 3 倍ぐらいの面積になりました。人口はほとんど変わっておらず 13 万人弱です。

延岡市の紹介を一言申し上げれば、江戸時代には内藤家、7 万石の城下町でした。また、近代においては旭化成の発祥の地と言ったほうが通りがいいと思っております。工業都市ということでやってきましたが、合併して農林水産業も含め幅広い産業構造

になりました。お隣の佐伯市との関係も非常に深まってきておりまます。佐伯市との関係が深まってきたのはごく最近の話ですが、その中で、私が県境（けんざかい）はなかなか簡単ではないと思ったことがありました。

今年、延岡市は市制施行 80 周年を迎えました。この市制施行 80 周年の記念行事の 1 つとして、東京ガールズコレクションというイベントを誘致し開催しました。東京ガールズコレクションをあまりご存じない方もいらっしゃるかと思いますが、女性には非常に大人気のイベントです。当日は、若い女性を中心に、結果として 1 万 5,000 人ぐらい集まってくれましたが、事前に我々は一生懸命にピーアールをしました。宮崎日日新聞や宮崎放送、テレビ宮崎などいろいろなメディアがありますが、そういったところを通して、あるいは隣県の大分県、熊本県、鹿児島県等にもピーアールをしたつもりでした。しかし、なかなか伝わっていなくて、大分のラジオ局の女性と話をしていましたら「そんなのが延岡であるんですか。そんなのがあるんだったら、私、絶対行きたい」という話を聞いたのが開催の 2 週間前でした。メディア関係の若い女性ですら、県境を越えたら情報がなかなか伝わっていないことを痛感しました。

やはり県を代表する新聞も、県境を越えますと相手方の県内では読まれておりません。また、テレビ局やラジオ局も、その意味では県境ではガラッと変わってしまいます。ですから、情報というものがいかに重要かと。情報をしっかりと県境を越えて流通させる、そのことが非常に大事だと思っています。

それでは、内容をさらっとご紹介します。まず「東九州メディカルバレー構想」というものに取り組んでおります。これは延岡市には旭化成グループがありますので、人

工腎臓や医療関連産業がいろいろと立地をしています。旭化成メディカル株式会社もあります。また、大分県佐伯市には川澄化学工業株式会社があります。他にも血液医療や血管医療というジャンルに属する事業所が幾つか立地をしています。既に企業集積があるものですから、さらに強めていこうということで、大分県・宮崎県の両県の合同構想ということで取り組んでいます。この「東九州メディカルバレー構想」は、あとでまたもう少し詳細にお話ししたいと思いますが、そういったことが1つあるということです。

それから、「大分・宮崎県境地域開発促進協議会」という枠組みを大分県の佐伯市と一緒に持っています。これを通して、今まで東九州自動車道という高速道路の建設促進を中心に取り組んできました。先ほどから、他の地域においても同じように交通インフラの整備促進がいかに大事かというお話が出てまいりました。私たちの地域でも事情は同じです。この東九州自動車道をとにかく早くつくっていくことが地域の連携につながり、産業の活性化にもつながっていくということで取り組んできました。

＜資料 大分・宮崎県境地域における連携＞

そのほかにも佐伯市との連携事業として幾つかを挙げております。広報連携もやっています。伊勢えびが両市の特産の1つでもありますので、連携して「東九州伊勢えび海道」というイベントをやっています。それから、災害についても「延岡市・佐伯市災害相互応援協定」を結んで進めてきております。以上です。

○戸田：ありがとうございました。今まで各県境地域でしたが、今度の西座さんはオール九州のなかで県境地域をどうするか

という政策を進めておられますので、よろしくお願ひします。

○西座：皆さん、こんにちは。九州経済フォーラムの理事をしております西座と申します。九州経済フォーラムとはいっていどのような団体かといいますと、「九州はひとつ」、そして中央と九州を結び日本の将来を九州が担っていこう。そのような思いで九州の若手経済を中心とした30年ほど前に設立された団体です。

今日は九州のことを少し話そうということで、首藤市長が言い足りなかった部分を少し話させていただきたいと思います。

おそらく、皆さん方がよく言われるのは、先ほども控室で言われたのですが、「九州は1つになりやすいですよね」「もうほとんど1つになっているんでしょう」とよく言われます。確かに「九州はひとつ」と、いろいろなところでも言っておりまし、1つになりやすいのは事実です。

行政関係では、隣に首藤市長がおりますが、九州市長会は大きな意味では1つになっているのではないでしょうか。しかしながら、一方で道州制議論などを見ましても町村会においては、なかなか1つになっていないのではないかと、そんな思いをしております。

九州は独特的考え方の部分もあります。例えば、「九州で一番高い山はどこですか」と言うと、大分県久住の中岳だと。では、「九州地方で一番高い山はどこですか」と言うと、鹿児島県屋久島の宮之浦岳というのです。これほど九州に対する感覚や思いの違いがあることも確かです。九州で一番高い山は間違いなく鹿児島の屋久島にある宮之浦岳ですが、そういうところは現実的にあるということです。

またもう1つの特徴として、九州は国境の島だという認識もしております。10月26

日に、長崎県の対馬でイベントがありました。そのイベントのなかの1つに、「釜山の花火大会の花火を見よう」というイベントがありました。実際に、26日におこなわれた釜山市の花火大会は、世界的にも大々的にいろいろなメーカーを集めた大きな花火大会です。実は毎年、対馬から肉眼で見ることができるというのです。そのような非常に国境を意識する地域であり、または福岡と釜山両市での事業もさまざまな取り組みがおこなわれているというような国境地域です。

この九州経済フォーラムが道州制を目指した活動をいろいろやっておりますが、これはまた後ほど紹介をさせていただきたいと思います。以上です。

＜資料 九州経済フォーラムとは＞

○戸田：ありがとうございました。県境域をつないでいくと道州制的な感覚に行き着くということです。事例は、後ほどお話しitたいと思います。

3. 県境地域政策の紹介

○戸田：それでは少しテーマを絞りたいと思います。1つは防災、それから医療、そして中山間、都市、そして道州制というテーマを出していただきましたので、少しその点を補足していただきながら議論を進めたいと思います。ただ、時間がだいぶ押しておりますので短めにお願いできればと思います。

最初に防災です。これはどこの地域でも大変大きな問題です。東北地域は3.11を直接の問題として持っておられます。現在、復興の段階にあります。そこで県境を越えて八戸市がどのような活動をされてきたかということについて、大坪部長からご紹介いただきたいと思います。

○大坪：越境と防災というテーマをいただきました。本日はスライドを3枚ほど用意させていただいております。

＜資料 八戸市における広域連携・交流＞

まず、八戸市の広域連携の状況を簡単にご紹介したいと思います。県境地域政策からは少し離れるかもしれません、ここに3つほど、私どもが進めている広域連携の事例をお示ししております。

一番左側の「三陸沿岸都市会議」という組織は、三陸沿岸地域に北は八戸市から南は宮城県の気仙沼市まで7つの市がありますが、その7市において、高規格道路整備や港湾整備、観光政策など、国や県に対する要望活動を連携して取り組む事業を昭和59年からスタートしております。

また、真ん中の団体は、「北奥羽開発促進協議会」という広域連携組織です。青森県・岩手県、さらには秋田県の一部を含みまして、24市町村で組織しております。こちらは昭和43年の発足ですので、かれこれ半世紀近くに及ぶ活動です。

先ほど少しご紹介しました八戸南部藩のエリアの市町村が連携・団結して、共同で東北新幹線の建設や高規格道路の整備などの重点プロジェクトの推進に取り組んでいる団体です。

そして、一番右側は「八戸圏域定住自立圏」の取り組みです。こちらは先ほど飯田市長さんからもお話がありました総務省の制度で、八戸圏域における広域連携です。

主な連携施策としては、広域の8市町村において、ドクターヘリをカバーするためドクターカーを導入し、多重的な救急医療体制を敷いております。また、地域交通の分野では路線バス上限運賃を設定し、8市町村圏域内のどこを乗っても上限500円と

いう制度を構築しております。現在、合計30ほどの連携事業に取り組んでいます。

<資料 東日本大震災と広域連携の取組>

このように広域のつながりがあるなかで、「3.11」が発生しました。八戸市も震度5強、津波も6.2メートルという被災状況でした。被害額も1,200億円という甚大な被害を受けました。市長の思いもありまして、八戸市できることはできる限り被災地支援に動こうということで、これからお話しさせていただきます被災地支援の動きにつながりました。

一番上に書いてありますのが緊急支援物資の提供です。八戸市も被災は大きかつたわけですが、まだ動く体力が残っていましたから、全国市長会、さらには青森県の市長会・町村会、先ほどご紹介いたしました北奥羽開発促進協議会という青森・岩手・秋田に跨がる市町村へお声掛けをしました。八戸市には陸上自衛隊の駐屯地があったものですから、そちらの支援もいただき、八戸市にそういった団体から支援物資を届けていただき、八戸から自衛隊の協力もいただいて支援物資を提供しています。大変ありがたいことに、長野県松本市からも紙おむつや粉ミルク、トイレットペーパー、米などをご支援いただいております。ありがとうございました。

また、その下のなかほどからオレンジ色でお示ししてありますが、八戸市は被災当初から災害廃棄物・災害がれきの受け入れを積極的に実施しています。幸い当市にはリサイクル産業が立地していますので、そこに協力をいただいて災害廃棄物を受け入れております。現在も継続して実施しています。

<資料 支援物資搬送スキーム>

さらには行政職員の派遣・応援として、土木職員・水道・消防、さらに医療支援チームのDMATや給水車の派遣を、三陸沿岸地域に対して実施しています。

これらについても、普段から見える関係づくりやお付き合い、広域連携の積み重ねが生きた事例だと思っています。以上です。

○戸田：ありがとうございました。先ほどハザードマップの共有がありましたが、通常、そういうレベルから県境を越えてやっておられるわけですか。

○大坪：先ほど災害応援協定の提携を、平成19年度に三圏域16市町村で実施したと申し上げましたが、その16市町村において、その共有化を図っている状況です。

○戸田：ありがとうございます。防災は自治体の果たす役割が多いと思いますが、首藤市長さん、ご意見はどうでしょうか。

○首藤：今のお話のなかにもありましたが、東日本大震災は、われわれにとっても非常に大きなインパクトといいますか、防災に対して大きく視点を転換させられる出来事だったと思っています。東日本大震災ほどの巨大災害になると、単独の自治体ではなかなか対応できません。その後の復興支援についても、もちろん国を通じて市長会、あるいは県単位で支援に取り組んできています。

こうした枠組みとは異なる切り口を申し上げますが、福島県いわき市と延岡市は兄弟都市です。「姉妹都市」と同じような意味合いで「兄弟都市」という盟約を結んでおりまます。そのお付き合いが長いものですから、遠くの親戚ぐらいの感覚があります。3月11日が震災日でしたが、ずっと連絡がつかず3月14日にやっと電話がつながりましたので、「今、何が必要ですか」と言ったら、「水が要る」ということですぐ手配を

しました。翌日 3 月 15 日に 10 トン車にペットボトルをいっぱい詰めて送り出したということがありました。そのあともずっと人の派遣などさまざまに、特にいわき市に対しては続けてきております。

その後、日ごろからいろいろな備えを協定というかたちでしておこうということになり、いわき市の親子都市である秋田県由利本荘市も含めて親子兄弟で一緒に災害時の連携協定を結ぼうということで、この 3 市で巨大災害のときの相互応援協定を結びました。また、福井県坂井市が姉妹都市ですので、それとは別に坂井市とも災害時協定を結びました。

先ほど申し上げたようなお隣の県、佐伯市のような隣接しているところともやっていますが、離れたところ、要するに地理的条件が違う、例えば地震が起きたら同時に被災しないだろうと思われるところとの連携協定が非常に重要です。リスクをヘッジするという意味合いからも非常に大事だと思っております。

防災では個人のレベルで「自助・共助・公助」という言い方をします。自分でできるだけ自分の命を助けましょうとか、お互いに地域の皆さんで助け合いましょうとか、あるいはそれができないところは、公が災害対策をしっかりとやりましょうと。「自助・共助・公助」の考え方を敷衍して、自治体についても個別の自治体を 1 つの単位として「自助」、あるいは複数の自治体同士での「共助」、それでカバーできない範囲は国や県という「公助」に相当する備えや制度に置き換えて考えることも必要ではないでしょうか。われわれは、自治体同士の共助の部分が長い間欠落していた、視点として欠けていたという反省も少しあるものですから、そういう協定なども今、結んできています。

○戸田：ありがとうございます。特に三遠南信のようにかなり地域が広いと、南北方向の防災との関連がたぶん大きいことになるのではないかという気がします。

では、防災から生きていく、生活していくというなかで医療が大きな課題ですので、続いて首藤市長さんになってしまいますが、医療について越境と医療ということで、少し先ほどの補足をしていただきましょうか。

<資料 東九州メディカルバレー構想>

○首藤：それでは医療というテーマです。先ほど申し上げました東九州メディカルバレー構想について、もう一度、1 枚のスライドを出させていただきました。

宮崎県と大分県の連携で「東九州メディカルバレー構想」をやっています。延岡市は、ちょうど中心部にあります。両県で取り組んでおります「東九州メディカルバレー構想」のなかで私たちが一番のメインステージになるぞという思いで、「延岡市メディカルタウン構想」を策定し連携しながら進めております。

これは先ほど申し上げましたように、血液医療・血管医療に関連する医療機器産業の振興という取り組みです。医療とは色合いが少し違いますが、関連の取り組みです。そのなかで、最近は特にアジアとの連携を深めていこうということで、これは今もおみえですが、タイから医療従事者を数ヶ月受け入れて研修をしておかえしする。そして、日本の医療機器のハンドリングに慣れていただくことによって、アジアの医療産業、アジアで使っていただく医療機器を日本メーカーのものに親和性を高めていくという取り組みです。

また、これは医療の部分ですが、われわれがお金を出して、宮崎大学医学部に「血液・血管先端医療学講座」という寄付講座

をつくりました。その寄付講座の拠点として、県立延岡病院のなかに講座を新たに開設していただき、そこに大学の先生というかたちでドクターに常駐していただいているので、県立延岡病院の医療レベルの強化にもつながりました。

＜資料 地域医療への取組み＞

今度は純粹に地域医療という部分についての話です。一時期、全国の公立医療機関からドクターがどんどん減って大変だと。もともと日本におけるお医者さんの数は、単位人口当たりで見ると、他の先進国と比べて3分の2ぐらいしかいないと。数が足りない世界の話なので、そのなかで偏在が起こってきて余計に大変だということが、全国で起こっています。

われわれの地域もそのなかにあります。県立延岡病院が私どもの地域の一番最後の命の砦といわれるところでしたが、お医者さんが減ってきて、どうすればこの課題が解決できるかということで、いろいろな取り組みを進めてきました。この県立延岡病院は、もともと熊本大学の関連病院です。歴史的には、熊本大学から相当たくさんのお医者さんに来ていただいています。ところが、1970年代に1県1医科大学制度が進められて、各県に医学部あるいは医科大学ができていきました。その背景があって、後に今度は医者が足りなくなり、国が地域医療を何とかしなければいけないとなったときに、もう3年ぐらい前ですが、地域医療再生計画をそれぞれの県でつくりました。

ところが、私どもで非常におかしいと思ったのは、結局、国としては、各県に地域再生のためのお金をばらまいて、「各県ごとに対策を考えてください」という話になりました。ですから、各県ごとの地域医療再生計画ができました。あくまでもそれは各

県のなかでの再生計画ですから、他県との連携はほとんど考慮されていません。

ところが、われわれの地域における最後の命の砦である県立延岡病院は、以前から熊本からたくさんのドクターに来てもらっています。今でこそ宮崎大学医学部出身者は増えました。地域医療再生計画がどのようなかたちで取り組まれるのかというと、全国でよくあるのは、大学の医学部等に寄付講座をつくり、そこにお金を出すことによって、大学の医局からいろいろな県内の公的医療機関にドクターを派遣してもらおうと。そのことに対してお金を出しましようという仕組です。

それは見方を変えると、私どものように他県の大学からドクターに来てもらっている病院から、その大学が県外のお医者さんを引き揚げて、県内の公的医療機関に派遣するという移し替えをすることによって、お金が大学の医局に入るということになります。これは、逆に医療のブロック化を進めいくだけです。例えば、九州なら九州全体の医療資源の効率化という観点からは、非常に逆行している面があると思っております。ですから、そのようなことをなくすような取り組みを、われわれ基礎自治体としてはしていかなければいけないと思っております。

そういうなかで、このドクターへりの取り組み。これはドクターへりで宮崎大学や熊本大学の医学部にも対応していただき、県境を越えて運用できる仕組みをしっかりとつくっていこうとしております。

右側になりますが、全国の市町村で初めてだそうですが、私どもの地域では「延岡市の地域医療を守る条例」をつくりました。さらには広域的に、医療機関においてドクターに過重な負担がかからないような取り組みを住民啓発活動として進めてきています。以上です。

○戸田：ありがとうございました。県境域にとって医療は非常に大きいです。最近の集中化の問題がありますが、どうやってつくっていけばいいのかということは、どの自治体でも大きな課題だと思います。また、このドクターヘリも、八戸のように県を越えると飛べるようで飛べないというお話を聞きました。やはり全国的に考えなくてはならないことだという感じもいたします。

それでは、中山間について。そういう問題が非常に切迫するのも中山間になろうかと思います。藤山先生、先ほどの発言に補足をいただきたいと思います。

○藤山：こういう県境を横断した組織は、先ほど首藤市長さんがおっしゃった情報の共有や発信が鍵を握っていると思います。中山間の問題もいろいろ共通しているところがあると思います。

＜資料 ①中国5県による中山間地域アンケート調査の共同実施＞

まず、やはり県境地域で、ちょうど今、目の前にあるように共通の情報のスクリーンに、いつも県境地域の、自分たちの地域の姿を映していくことが本当は重要なのではないかと思います。

今、中国地方では、例えば中国5県のような組織があるわけですから、いろいろなアンケートも共通にして、今、本当に現状や課題はどうなのだろうかということを、できるだけ共有化するような取り組みを進めています。例えば、これは各人口規模別エリアに、いろいろな機関・医療機関などがどれだけ残っているのかというデータがそろいます。そうすると、今、それぞれ個別の拠点はなくなりつつあるという非

常に深刻な状況が浮かび上がります。

現状と課題が共有できたら、今度は課題に向けての知恵や手法の共有です。これもいろいろなところで、いろいろなチャレンジをしています。それがばらばらではなく、みんなで知恵を共有できる。言うなれば、山の5合目からチャレンジをするような仕組みが本当は重要なのではないかと。このようななかたちで、昨年度からいろいろな事例のデータベースづくりを進めています。

＜資料 ②中国5県による地域づくり事例データベースの公開＞

次は未来像の共有です。未来がどうなり得るのか。愛知大学でもGISに力を入れていらっしゃいますが、中国地方でも5年前の広域地方計画のときに整備局と中山間地域研究センターと一緒にやったものです。人口分布、大字レベル、町丁名、それからいろいろな分野の拠点配置。こちらは病院の配置です。それから交通ネットワーク。こういうものを全部重ねて落として、二次医療機関、三次医療機関から、どこまでカバーするのか。しかも、それは何人まで、何パーセントまでカバーするのかが全部分かります。そして、こちらでも三遠南信の高速道路の整備が進んでいるようですが、中国地方も尾道松江線という縦軸の高速道路がようやくつながろうとしています。つながった場合、どこにどれだけ効果が出るのか、あるいはそれに合わせて拠点を配置し直したらどうなるのだろうかというのが定量的に分かるような未来像として共有できるようになっています。

このような共通のスクリーンを映し出すような取り組みは、非常に手間暇がかかるところもありますが、必要があるのではないかと。そのようななかで、きちんと中山間の課題を、実感を持って共通意識のな

かで国への政策提言、データに裏打ちされた提言をおこなっていく必要があるのではないかと思っています。以上です。

＜資料 ③中山間地域研究センターによる
広域分析の事例＞

○戸田：ありがとうございました。藤山先生のところでは、地図が出ておりますが、これは小地区に碎いて、小地区ごとで運営できるように。つまり1市ではなくて旧村や小学校区の受け手をつくっていっているということが、私は非常にすごいと思いますが、こういう結果を受ける母体は幾つぐらいの地区でおやりになっているのですか。

○藤山：一番小さくは大字町丁目でやっていますから、いくらでも集計できます。ただ、やはり小学校区、公民館区ぐらいの一次的な生活圏が一番ポイントになるかなと思います。人口予測も、その単位でやっています。

○戸田：ありがとうございました。ちなみに三遠南信ですと、小学校区を全部拾うと388あります。ですから、31市町村という単位もありますが、小地区に碎くと約400で、いろいろと考えることができます。これは県境を越えるうえで1つの見方ではないかと思います。

○戸田：続いて、ちょっと都市部のほうに入りまして、蟹江先生に先ほどの話を補足していただきます。また、中山間の感想も言ってくださればと思います。よろしくお願いします。

○蟹江：それでは、2巡目の話をしたいと思います。時間もだいぶ押していますので、かいつまんでお話をさせてもらいます。

先ほど両毛地域の話を少しさせていただきましたが、昭和44年に「両毛地域開発推進協議会」という組織をつくりました。

そのまま、市長や議会・商工会議所の会頭という既存の団体の組織が両毛地域の組織をつくりました。このなかで特に際立って、幾つかいいことが実現しました。そのいいことをご紹介します。

＜資料 両毛地域の政策協定＞

昭和52年「特殊災害消防対策相互応援協定」。これは両毛地域と伊勢崎市を入れて6つの市で、火事が発生したらすぐに県境を越えていくと。火事が発生したら5分が勝負だそうですから、5分以内にすぐ近くの消防署から駆けつけるという協定です。

昭和58年「両毛5市水道災害相互応援協定」、両毛地域の水源は主に渡良瀬川です。あとは伏流水と地下湧水です。もしある市の水道が枯渇した場合には、水道の本管のバルブを開いて差し上げますと。これが現実に機能しています。実際に太田市と足利市の間がありました。

平成元年「社会教育事業の相互参加公開」、社会教育事業を両毛地域内の自治体がオープンにして、どこから参加してもいいと教育長会議で決めました。あわせて両毛地域の公共施設は全て同じ利用金額で利用しましょうと。さらに、余勢を駆って、例えばケーブルテレビ（CATV）と一緒にやろうとか、地方卸売市場を中央卸売市場にしようとか、いろいろ話が出ました。ただ、いずれも頓挫しました。というのは既存事実があったので実現しませんでした。最後に、現在進めている「両毛広域医療連携調査研究会」です。両毛地域の5市には二次医療拠点が6病院ぐらいあります。そのうちの2つは第三次救急医療拠点です。ドクターへリが飛ぶ病院です。

＜資料 両毛地域の通勤圏＞

ただ、残念ながら、地方の医療機関は幾つか標榜科目が欠けています。特に危ないのは小児医療です。ある病院には産婦人科はあるけれども小児科はない。小児科は、ほかの市にお願いするということでお互いに不足している部分で相互補完関係を保っているのが医療界です。われわれの定住条件として重要な条件ではないかと思います。ご紹介のあった九州の医療システムよりも低いけれども、われわれが日常的に定住するときに一番重要だと思っているのは医療ですから、その点でお互いに補完し合おうということで大変期待をかけています。

＜資料 両毛の工業団地分布・市町村領域＞

＜資料 工業統計調査結果：平成 18 年＞

両毛地域は、栃木県・群馬県の県境を挟んで非常に活発な労働力の交流がおこなわれています。例えば、足利市から太田市、大泉市に毎日 5,000 人以上の通勤者がいます。逆に、この群馬県側から栃木県側に約 3,000 人の通勤者がいます。

モータリゼーションの現在、県境があろうがなかろうが働く場所があれば 30 キロ圏ぐらいは移動するという状況です。都市間の労働力交流に加えて市部から町村部への通勤行動が見られます。これは工業再配置法の関係で、首都圏の工業団地が両毛地域、特に栃木・群馬両県に移転しました。両毛地域のなかには工業団地数が 36、団地面積は 992 ヘクタールあります。

特にビッグネームとしては、トヨタ自動車にはかないませんけれども、富士重工業、東京三洋電機の大泉工場がありましたが、これは現在パナソニックになっています。従来、絹糸で工場基地を形成してきた両毛地域が、現在は時代の流れとともに先端産

業にシフト替えされています。三遠南信にはとても及びませんが、平成 18 年の両毛地域の製造品出荷額は 4 兆 5,800 億円です。これは群馬県の 58%、栃木県の 52% です。両県にとって半分以上のシェアを占めています。

○戸田：ありがとうございました。非常に産業が、これは経過も日にちがずっと続いていますから、企業の立地は連帶しますし、通勤も連帶します。当然、購買やいろいろなところも県境を越えて活動されているということになります。

そのなかで、技術開発などの取り組みはどうなっているのだろうとお伺いしたいですし、なぜ卸売が挫折したのかということも聞きたいと思うのですが、今日はちょっと時間がありませんので、後ほどの分科会でまたお聞かせいただければと思います。

○戸田：それでは、最後に西座さんの道州といいますか。この県境エリアの全体をつくっていく取り組み。最初にご紹介がありました、九州ではどうやっているのかということについてご紹介いただきたいと思います。

○西座：ありがとうございます。道州制に向けての取り組みです。道州制と一言で言っても、その導入までの課題・問題、ハーダルは非常に大きなものがあると感じております。やはり県境の町には過疎地域が多いです。過疎地域の行政の自治体の方は、当然ながら道州制に反対している立場の風潮の皆さんが多いと伺っております。

九州で 7 県、約 230 の小自治体のうち 85 の自治体が県境を抱えております。この県境を抱えている市町村を対象にした「九州県際サミット」を、今年で第 3 回目になりましたが開催しています。

道州制に行くまでには、過疎地域の問題

を何とかしなくてはいけません。どこの省庁だったか忘れましたが、研究の数字が出ていました。人口3万人以上の市町村の県境地域と非県境地域では、人口の減少や過疎化などのいろいろな問題において、ほぼ同じレベルで良くも悪くもなっていると。

<資料 九州県際サミット>

しかし、3万人未満の市町村の県境地域と非県境地域では、明らかに県境地域の衰退が著しいというデータが出ておりました。まさに九州においても、85自治体のうちほとんどの市町村、特に町村においては3万人未満の町です。そこから取り組んでいこうということで、この「九州県際サミット」を開催しております。

このきっかけになったのは、戸田先生を九州にお招きしてご講演いただいたときに出て「三遠南信サミット」のお話です。九州でもこういったサミットができるのではないかだろうかということで、それ以来ご指導をいただきながら「九州県際サミット」をやっています。

そのなかの一環として紹介させていただきたいのは、「バーチャル州議会」というものを開催いたしました。既に九州ではいろいろな団体が道州制の議論をしております。もう10年ほど前から市長会でも取り組んでいただき、報告書も何度も出していただいてやっています。もうそういう議論をする段階ではないと。九州は1つの州になったということを前提に州議会を開催しようということでやりました。州知事には、現職の熊本県蒲島知事にご就任いただきました。それぞれ首長の皆様や経済界等、産学官、皆様方に仮想の州議会議員になっていただきまして、われわれで議案を作成してやりました。それを幾つかご紹介させていただきます。

<資料 バーチャル州会議>

まず、危機管理について専門組織で危機管理庁を設立しようという議案が第1号議案で出ました。特に宮崎市長のところでも、鳥インフルエンザや口蹄（こうてい）疫、または新燃岳の噴火等、災害が数多くありました。

災害は県境を越えますが、行政圏は県境を越えてはならない。そのため、各自治体もずいぶんご苦労されたのではないかと思います。まず1号の議案として出たのが、そういったものをしっかりと一元化して九州全体で取り組んでいこうということでした。そのなかにおいても、やはり下支えをしていただいている地域の消防団の組織化が難しくなっているということも意見に出されました。これは可決された例です。

一方、否決された例があります。これは九州のなかで高速交通体系をつくろうと。あと数年で東九州自動車道は開通しますが、ここに新幹線を通そうということでやりましたら、九州経済フォーラムの会長がJR九州の会長という訳ではないのですが、どうも現実的ではないということで継続審議になりました。このようなことで7号議案のうち2号議案は継続審議で、5号議案が可決されました。これを続けていくことによって、九州が1つの州になったときのシミュレーションの1つになるのではないかと考えています。

○戸田：よろしいですか。「九州県際サミット」が出ておりますが、これは最後のところで、これだけちょっとと言っていただくといいのではないでしょうか。

<資料 サミット宣言>

○西座：時間が押しているなかで申し訳あ

りません。このようにサミット宣言をやっています。九州県際サミットの開催等、道州制に向けた協議ですが、7月の第3回サミット宣言で採択された宣言として「県境地域が連携しておこなう林業振興、定住自立圏等、国の施策についてはその重要性を鑑み、財政措置の割増を実施することを各関係省庁に要請する」ということで、これはしっかりとサミット、各首長さんの連名も含めて関係省庁に提案・要望していくこうということで決まりました。以上です。

○戸田：ありがとうございます。急がせすぎません。このバーチャル州議会は、同時に県際サミットと一緒にやられたのですが、県境市町村の市長さんがお集まりになられて、ちょうどあのとき鳥インフルエンザで首藤市長さんはお越しになれなかつたのですが、そのなかでは非常に具体的な話が出ました。

最初の首藤市長の資料にもありました
が、県境を越えて鳥獣害を市町村で一斉にやろうということで、佐伯市と延岡市が一斉に県境を越えて鳥獣駆除を一緒にやられました。そういう具体的なことが道州制という。道州というよりは、県を越えなければならぬ具体性がボトムアップな道州制の考え方があげられるように思います。

4. 県境地域相互の連携に向けての期待

○戸田：それでは、もう時間が終わりになってしまいますが、最後に一言ずつ、1~2分でまとめといいますか、今日は細部にまで入ることはできませんでしたが、県境地域同士が連携していくことの意義、あるいは三遠南信はこうしたらしいのではないかということを最後にいただいて発言を終わりとさせていただきたいと思います。西座さん、お願いします。

○西座：それでは、最後に「九州県際サミ

ット」のときのアンケートを紹介させていただいて終わろうと思います。佐賀県太良町は、隣県の長崎県と近い中核都市の諫早市まで買い物や病院へいつも行っています。ほとんどが諫早市に行っているのですが、例えばワクチン接種など助成を受ける医療行為については、当然、県内で受けるわけです。今まで行ったことがない病院を探して行かなければいけないという障害を感じるという町の職員の方のアンケートです。

一方、これと同じアンケートを諫早市の職員の方のアンケートでは、太良町の方も諫早市に見えていて、一切何も障害を感じていない。病院にも買い物にもおいでいただいている。何も障害がなく、市民・町民には影響はないというアンケート結果です。だから、お互いが県境を一方的に意識する。受ける側としては意識をしない。こういうことが県境問題を考える、われわれを含めた団体がもっと幅広く、この問題を認識してもらう運動や活動を今後していくべきだろうと思います。

○戸田：ありがとうございました。続いて首藤市長さん、お願いします。

○首藤：県境地域を越えた連携については大変課題も多いですし、その分、期待も大きいと思っております。ただ、いろいろな切り口がありまして、先ほどからいろいろと出ています。例えば、防災のために県境を越えて地域として連携をしましょうということ。これはこれで非常に重要です。ただ、それはあくまでミクロな観点での重要性の高さだと、私は思っております。

別な言い方をしますと、先ほど医療の話をしました。地域医療の問題です。各県単位で取り組んでいると、なかなか最適解にたどり着きません。やはりもっと広いエリアで、九州なら九州全体でどのように制度をつくっていくのか、あるいはシステムをどうつくっていくのかということが片方で

マクロな観点として必要です。

ミクロの部分は県単位でやったり、自治体同士の連携でやったりして取り組んでいかなければいけないですが、このミクロとマクロの両面をしっかりと追求していくことで、県境を越えた連携が本当の意味で価値のあることになってくるのではないかと思っています。

先ほど道州制の話もありました。九州は1つの島ですので一体感を出しやすいです。九州は市だけでも118市あります。この118市ある九州市長会としては、私も道州制検討推進委員会のメンバーになっていたのですが、もう何年も前に道州制を推進しようという決議まで総会でいたしました。ただ町村会は基本的には反対ですし、知事会も推進派の方と慎重派の方で分かれています。ですから、なかなか思うようにはいきません。

なぜ九州全体で1つのかたちをつくることが必要なのかということを1つだけ申し上げれば、広域的な最適解をつくっていくためです。例えば医療というシステムを九州全体で最適解をどうつくるのか。産業の連携をどうしていくのか。そのほか、いろいろな分野での課題解決を広いエリアでしっかりとやろうと。答えを見つけていこうというのが、私たちとしては道州制の1つの姿ではないかと思っております。これは県同士の合併だけで終わるようでは基本的には意味がありません。やはり、トータルで道州ごとのビジョンをしっかりと描けるような地方の分権に基づいた道州制の姿を追求していくことが大事だと感じています。以上です。

○戸田：ありがとうございました。県境域にとって医療は非常に大きいです。最近の集中化の問題がありますが、どうやってつくっていけばいいのかということは、どの自治体でも大きな課題だと思います。ま

た、このドクターヘリも、八戸のように県を越えると飛べるようで飛べないというお話を聞きました。やはり全国的に考えなくてはならないことだという感じもいたします。では、藤山さん、お願ひします。

○藤山：手短に3つだけ申し上げます。最近、道州制あるいは大阪都構想のような統治機構の話がはやっています。だからこそ私は、もう一度、住民にとって身近な地元をつくり直すような仕掛けが必要なのではないかと思います。

これからは定住と循環の時代です。それは一番の地元レベル。ちょうど例えば飯田市で言うならば公民館や自治振興センター単位、あるいは先ほどの小学校区単位で、しっかりと自分たちの地域を自分たちが設計・運営できる仕組みの礎の上にいろいろな統治機構が始まらなければいけないのではないかと思っています。ですから、この三遠南信も388の小学校区の多様性をどんどん出していくと非常に楽しみなのではないかと思います。

2番目は、そういう個々の地元がしっかりとしてくると、大都市、特に沿岸の大都市の団地やマンションが大変なことになっています。ものすごく爆発的な高齢化が起きています。あるいは災害のときも非常に危ういです。パートナーエリアとして、ぜひ疎開保険等、まさに広域的な連携を、しかし、地元に根ざしたかたちでもらえないだろうかというのが2番目です。

3番目は、地元も広域連携も人材育成が根幹を握っていると思います。ここで切磋琢磨しなければいけません。しかも、あらゆる面で。ぜひ三遠南信に中山間センター、あるいは新しい時代の地方公務員を鍛える連合大学院のようなものをつくられたらいかがなものでしょうか。リニアも行きます。ぜひ人材を根幹に据えるような戦略を持っていただければ、私は非常にここの地域は

……。いろいろな大きさの自治体が非常に活発におこなっています。まさに、これからの方々を支える人材を輩出するようなことができるのではないかと思っています。以上です。

○戸田：ありがとうございました。では、続いて蟹江先生、お願ひします。

○蟹江：今日のいろいろなお話を聞いて、あらためて、これから三遠南信の発展性に大きな期待を持たれることを痛感しました。ただ、三遠南信のなかにも250万の圏域で高齢化が進んでいると思います。限界集落もあるだろうと思います。私も自分が高齢者になりましたから、近隣福祉社会に少し興味を持ちました。老人と国が一人一人つながり、制度としてつながっているのではなく、もう少しコミュニティとして老人をきちんと面倒見るような仕組みが必要だろうと。

まさに今、藤山さんがおっしゃったように、そのエリアは公民館区や小学校区なのです。これが一番コミュニティの原単位で、もう少し血の通った補完関係や支援関係をつくっていく必要があります。

三遠南信の場合、インフラはどんどん整備されるでしょうから、特に250万のうちの太平洋側の沿岸地域はどんどん発展するでしょう。ただ山のほうはちょっと心配です。以上です。

○戸田：ありがとうございました。では、最後に大坪さん、お願ひします。

○大坪：私は防災のお話を今回はさせていただきましたので、最後に防災に関連しまして。当市の課題でもあるのですが、岩手県をはじめ、広域防災連携の体制づくりを県単位で一義的に進めている地域があります。岩手県の場合、遠野市が今回の震災において後方支援で活躍したという事例があります。私どもの青森県においては、その構想に向けて、現在準備を進めているところです。

ろです。

まさしく三遠南信地域は、南北に非常に長くてエリアも非常に大きい地域ですので、沿岸部と内陸部、災害の危険性はそれぞれ抱えていると思います。今後、三遠南信ならではの広域防災連携のモデルケースをご提示いただければ、私どもも非常に参考になります。これから安全・安心の社会づくりに向けて、防災・減災の充実のための全国の先駆けになるものをお示しいただければ大変ありがたいと思っております。

○戸田：ありがとうございました。話題は多いですが、なかなか時間どおりの進行をすることができませんでした。これから私どものセンターを含めて、一つ一つの課題を考え、またその発展性を追求していくたいと思います。

5. まとめ

○戸田：それでは、最後に地元の牧野市長さんから総括的なご意見をいただきたいシンポジウムを締めたいと思います。

○牧野：本日は「第1回全国越境地域政策シンポジウム」ということで、それぞれのパネリストの皆様方には、はるばる飯田の地まで来ていただきまして、県境地域の新たな可能性について議論していただきましたことに対して、あらためて御礼申し上げます。ありがとうございました。

本当に、今日のメンバーを時間距離にしたら大変なところから来ていただいていると思います。北は八戸、南は九州、どう考えても時間距離にしたら半日ではすみません。はるばるここまで来ていただきました。つまり県境地域を論じることは、そのぐらいエネルギーと時間がかかるものだと、あらためて思います。

しかしながら、それを乗り越えて県境地域の新たな可能性を論じていくことに対しては意義があるということを、あらためて

感じました。ぜひこうした県境地域の頑張っている皆さん方と私ども三遠南信圏域として、しっかりと連携をさせていただいて、それぞれに切磋琢磨しながら、それぞれに可能性を大いに追求していくことができればと思っております。どうかよろしくお願ひ申し上げ、お礼の挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。

○戸田：どうもありがとうございました。またパネリストの皆さん、どうもありがとうございました。時間が短いなかでご報告いただきましてありがとうございました。また、パネリストの皆さんには、このあと分科会にもお出になりますので、また補足や質問等をいただければと思います。どうもありがとうございました。もう1つだけ、すみません。資料のなかにアンケートが入っております。またこれもお答えいただければと思います。長時間、ありがとうございました。

○司会：どうもありがとうございました。コーディネーターの戸田先生、そして5人のパネラーの皆さんに、もう一度、大きな拍手をお送りください。本当にありがとうございました。

(終了)

4 「道」分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2013 in Minamishinsyu

「道」分科会では、「三遠南信自動車道 -次代を拓く交通基盤-」をテーマに意見交換がなされた。

コーディネーター	飯田市	飯田市長	牧野 光朗
報告者	国土交通省 飯田国道事務所	所長	花木 道治
議会	浜松市議会	議長	太田 康隆
議会	豊橋市議会	議長	岡本 泰
議会	飯田市議会	議長	林 幸次
行政	阿南町	阿南町長	佐々木 暢生
行政	喬木村	喬木村長	大平 利次
経済	奥浜名湖商工会	奥浜名湖商工会長	手塚 二八郎
経済	天竜商工会	天竜商工会長	平賀 丈太郎
経済	飯田商工会議所	飯田商工会議所会頭	柴田 忠昭
経済	豊丘村商工会	豊丘村商工会長	片桐 力
住民	NPO 法人 地域づくりサポートネット	副会長	田中 孝治
住民	岩屋緑地に親しむ会	会長	西川 収示
パネリスト	八戸市	総合政策部長	大坪 秀一

(敬称略)

■はじめに

コーディネーター／飯田市 牧野市長



皆様、改めましてこんにちは。飯田市長の牧野光朗でございます。飯田商工会議所の柴田会頭初め参加市の皆様方、どうぞよ

ろしくお願ひいたします。

本日の進行につきましては、前年のサミットの議論のまとめ、それから今回のテーマについて事務局から説明をしてもらいます。続きまして、国土交通省中部地方整備局飯田国道事務所の花木道治所長様に、本日、来ていただいております。ありがとうございます。花木様から三遠南信自動車道の整備効果とリニア時代の地域づくりにつきまして、ご報告をいただきます。これらを踏まえまして、「三遠南信自動車道－次代を拓く交通基盤－」というテーマから、今後推進していきます事業等につきまして、それぞれの皆様方からご意見をいただきた

いと考えております。

それでは、まず事務局から説明をお願いします。

事務局

それでは、前年度の議論につきましておさらいしたいと思います。

前年度の「道」分科会では、第1期の重点プロジェクトを総括し、第2期に向けての方向性が議論されました。まとめますと、これから述べます次の3点となります。

1点目としまして、三遠南信自動車道の整備により、東名高速道路、新東名高速道路、浜松三ヶ日・豊橋道路、三遠伊勢連絡道路、さらには将来的にリニア中央新幹線が連絡することで広範なネットワークが形成され、そのつながりがさまざまな交流を生み出すであろうこと、これを1点目としております。

2点目としまして、三遠南信地域の産業のさらなる活性化に向け、地域と地域を結び、海外へとつなげるためにも、三河港、御前崎港といった港湾へのアクセス向上が必要なこと。

3点目としまして、東日本大震災で高規格幹線道路が大きな効果を発揮したように、医療機関への搬送路や災害時における緊急輸送路となる命をつなぐ道としてミッシングリンクとなっている三遠南信自動車道の整備が大切であり、こうした地域からの意見を実現するためには、各期成同盟会等による要望活動やキャンペーンを今後も継続的に行うとともに、県境を越え、これまで以上に地域が一体となって広域交通機関の整備促進に取り組む必要があること。

以上3点を前回のまとめとしております。

続きまして今回のテーマ、狙いといたしましては、日本の中央回廊の形成を目指し、ビジョンを推進する中、三遠南信の南北軸として交通、物流、防災、観光、産業など

諸分野の発展の礎となる三遠南信自動車道の整備は喫緊の課題であります。また、リニアに接続する最短ルートとしても期待される中、皆様の地域の交通基盤の進捗状況とその効果についてお話しいただき、今後の展開について議論を進めるため、「三遠南信自動車道一次代を拓く交通基盤ー」をテーマに議論をしていただきます。

先ほど述べました前年度の議論を引き継ぎ、さらに発展的な意見交換をお願いいたします。

コーディネーター／飯田市 牧野市長

ありがとうございました。

それでは続きまして、三遠南信自動車道の整備効果とリニア時代の地域づくりにつきまして、国土交通省中部地方整備局飯田国道事務所長様の花木道治様、よろしくお願いいたします。

■報告

国土交通省中部地方整備局

飯田国道事務所 花木所長

皆様、こんにちは。ただいまご紹介いただきました国土交通省飯田国道事務所長の花木でございます。日ごろより本日ご出席の皆様方には国土交通省、とりわけ道路行政に対しまして深いご理解、ご支援をいただいてございます。この場をおかりして、改めて御礼を申し上げます。

今回の三遠南信サミット「道」分科会のテーマでございますが、今お話しありましたように、「三遠南信自動車道一次代を拓く交通基盤」ということでございます。まず、私のほうから皆様方の議論の参考にしていただければと思いまして、三遠南信自動車道の現在の事業の進捗状況及び三遠南信自動車道の整備に伴う事業の効果について、報告のほうをさせていただきたいと思います。また、この三遠南信地域、特に飯

田市さんのところでございますが、14年後にはリニアの新駅ができることになってございます。この三遠南信自動車道とリニアが結ばれることによりまして、当地域が劇的に変化するものと思っております。そういった意味で三遠南信自動車道、リニアを見据えたこの地域の地域づくり、将来像といったことについても最後のほうで少しお話をさせていただきたいと思います。

それでは、まず三遠南信自動車道の現在の事業の進捗状況について、お話しさせていただきたいと思います。

現在、図にもありますように飯喬道路、それから小川路峠道路、青崩峠道路、それから佐久間道路・三遠道路のうち3区間で事業を実施しております。このうち飯喬道路の1工区、飯田山本インターから天龍峡インターにつきましては平成20年、それから小川路峠道路というのは平成6年、それから昨年でございますが平成24年に佐久間道路・三遠道路のうちの浜松いなさジャンクションから鳳来峡インターまでの間が開通したところです。

事業中の区間につきまして、北から見ていきます。この黄色のところでございますが、飯喬道路の2工区、それから飯喬道路の3工区、それから青崩峠道路、それから佐久間道路・三遠道路といったところで事業を展開しております。また、（仮称）水窪北インターから（仮称）佐久間インターの間につきましては、今年度から国におきまして計画段階評価を進めるための調査のほうに着手しております。

事業の内容を少し具体的にお話しさせていただきます。まず、長野県側の進捗状況でございますが、飯喬道路のうち（仮称）天龍峡インターから（仮称）龍江インターの間につきましては、現在改良工事と橋梁の上部工事を行っているところであります。次の区間の（仮称）龍江インターから（仮

称）飯田東インターの間につきましても同様として、改良工事と橋梁の上部工と下部工の両方を進めております。次の（仮称）飯田東インターから喬木インターの間、一番右側の区間ですが、この間については調査及び設計を進めている一方で、飯田市の区間につきまして道路改良工事と橋梁の下部工事に着手しているところです。

なお、今年の6月ですが、喬木村の氏乗地区に追加のハーフインターの設置が認められました。このインターとそれから現在供用している喬木インターと合わせて、これでフルの形になるインターとなります。

現在、この区間は用地調査等を実施しております、地権者さんと交渉が整い次第、用地買収、それから工事借地等の締結に入っていきたいと思っております。できるだけ早い時期に工事着手をしていく予定でおります。

次に青崩峠道路ですが、現在は環境調査、それから水文調査等を実施しております。工事のほうですが、長野県側では写真の左から三つ、工事用道路を順次行っているところです。静岡県側につきましては、本体トンネルを出たところにかかる本線部橋梁の下部工に、着手をしております。

この後、今年度中にこのトンネルの調査坑の工事に入っていきたいと思っております。現在、長野県側では公告中でございまして、1月には事業者が決まる予定です。

また、静岡県側につきましても同じく調査坑の工事に入していくため、現在手続をしているところでございまして、3月中には事業者が決まる予定です。

次に、静岡県側でございますけれども、現在、佐久間道路・三遠道路の事業を行っております。（仮称）佐久間インターから（仮称）東栄インターの間につきましては、平成30年度の供用を目標に、写真1から7にありますように、一部佐久間第1トンネ

ルにも着工しております。また、改良工事等を進めているところです。

それから、（仮称）東栄インターから鳳来峡インターまでの間ですが、今年度は用地買収、それから測量設計等を行っていく予定です。

工事等の事業進捗状況につきましては以上ですが、次に三遠南信自動車道が整備されることによりまして、三遠南信地域に期待される効果について、4点ほどご紹介させていただきます。

まず1点目でございますが、三遠南信自動車道が整備されることによりまして、この三遠南信地域における交通ネットワークが、高速ネットワークとして確保されるとということでございます。図にもありますように、三遠南信自動車道が整備されることにより、この三遠南信地域において、高規格幹線道路のインターへのアクセス時間が60分以上を要する地域はすべて解消されます。1時間以内にそれぞれのインターに行けるようになります。また、長野県と静岡県を結ぶ主要幹線道路であります国道152号は、県境付近に通行不能区間がありますが、これも回避でき地域の皆様方の生活の利便性向上も大きく図られるものと思っています。

2点目ですが、災害に強い地域のネットワークが構築されるということです。右の図の中の赤い丸でございますが、これはそれぞれの地域の事前通行規制区間でございます。これは、雨が降りますと、災害発生の恐れがあるために事前に止まってしまう区間ですが、三遠南信自動車道ができますとこれらを回避することができるようになります。そして、地域生活においても、雨による影響を受けない、安心・安全な災害に強いネットワークが確保されるということになると思います。

三遠南信地域では平成8年に三遠南信災

害時相互応援協定というのが締結されておりまして、三遠南信自動車道の整備によりまして災害時の地域の安全性、信頼性がさらに強化されることになると思っております。

次に3点目ですが、地域医療のサービスが向上すると考えております。三遠南信自動車道の整備に伴いまして、第3次救急医療施設にたどり着くまでの60分圏域が大きく拡大するということでございます。遠山郷から飯田市内の医療施設への搬送時間につきましても約50分短縮されるということでございます。

また、飯喬道路のうち、飯田山本インターから天龍峡インター間の開通後は、救急車両がこの区間を通るということで、時間短縮のみならず信号が当然ありませんし、急停車することができないということで搬送患者への負担も大きく軽減されたと聞いております。

最後4点目でございますが、高速サービスの向上に伴いまして地域間の連携強化が図られると思っております。観光や交流支援を例にとってみると、三遠南信自動車道の整備によりまして浜松市と遠山郷とのアクセスは約90分短縮されることになります。このように沿線地域の時間短縮が図られることから、南信州の天竜奥三河国定公園や三河地域の奥三河国定公園、それから遠州地域の浜名湖観光圏等との連携、活性化が図られるとともに、観光客の誘致活動支援にもつながるものと期待しています。

次に、実際に開通した後の効果事例を2点ほどご紹介させていただきたいと思います。

まず1点目ですが、これは皆様もよくご存じだと思いますが、高校生のバス通学が実現したということです。平成6年の矢筈トンネルの開通によりまして、南信濃地域から飯田市までの間が約1時間短縮された

ために、南信濃から飯田市内までを結ぶバス路線というのも開設されました。これまで下宿生活を余儀なくされていた高校生のバス通学が可能になったという大きな効果が出ています。ちなみに親御さんの負担ですが、月当たり下宿代が8万円ぐらいかかっていたのが、バス代として月当たり3万円ぐらいで済むようになったということです。ただし、家から通えば食費等がかかりますので、もう少しかかっていると思われますが、そういった報告を受けております。

それから、2つ目ですが、観光施設への集客数がかなり向上したという点が挙げられます。既に昨年供用しました佐久間道路・三遠道路の鳳来峡インターから浜松いなさ北インターまでの間でございますが、この供用によりまして左上のグラフにもありますように、東栄町のとうえい温泉への入込客数が開通前に比べて1.4倍に増えている状況でございます。また、阿南町の道の駅の信州新野千石平ですが、ここにおきましても入込客数が1.2倍に増えております。

三遠南信自動車道の現在の整備状況、整備効果についての報告は以上ですが、いずれにいたしましても中央道と新東名と連携、連絡しまして、三つの地域間の連携強化と秩序ある発展のため、私どもの未供用区間も含めて早期開通を目指して銳意事業を進めてまいりたいと思っております。引き続きご支援、ご協力のほどをよろしくお願ひいたします。

続きまして、冒頭にお話をさせていただきましたリニアの関係を少しお話しさせていただきたいと思います。

先月の9月18日でございますが、リニア中央新幹線の環境影響評価の準備書が公表されまして、詳細なルートと駅の位置が明らかになりました。リニアの開通後は飯田市と東京との時間距離が劇的に短縮される

ことになります。現在は中央高速バスを利用して、東京の新宿まで約4時間かかっていたものが、リニアが2027年に開通すれば、品川まで40分で結ばれるということになるわけです。また、海外から来ていただく、こちらから海外へ出て行く主要な空港へのアクセスについても、現在3時間から5時間かかっていたものが2時間以内でたどり着けると考えられます。こういったことから、国内外を問わず広域的な範囲からこの南信地域への交流人口の増加も大きく期待されると思っております。

そして、このリニアによって生まれた時間短縮によります効果を最大限生かすためには当然、この当南信地域内の方々が容易にリニア駅を利用できるということが非常に重要だと思いますし、また反対にリニアを使ってこの地域へ訪れた方々もスムーズにいろいろな目的地へ移動できるということが極めて重要になってくると思います。そういう点では特に地域内の移動の高速性といったものをいかに確保するかということになってくるかと思っておりまして、高速道路の結節の強化というのが重要な点だと思っております。既存の高速道路のインターへのアクセス性についてバイパス等により改善を図るですか、高速道路の結節点をスマートインターチェンジ等によって増やすといった取り組みが必要になってまいります。そういう意味では、このリニア効果を三遠南信地域全体に波及させていくといった点では、三遠南信自動車道の整備も当然ながら大きなポイントになってくると思っております。

ほかにも駅周辺の拠点サービスの整備やJ R飯田線との接続といった課題がありますが、まずもって「道」分科会から言わせていただければ、そういうアセス性的向上というのが極めて重要になってくると思っています。

南信地域が三遠南信地域の北の玄関口ですが、その役割を果たすためにもこの三遠南信自動車道は必要不可欠なものであると思っております。重ねて申しますが、三遠南信自動車道の整備によりましてリニアの効果を三遠南信地域の広い範囲に波及させることができるのでないかと思っております。

最後に2点ほど、三遠南信自動車道とリニアとの連携によって期待できる効果について、お話をさせていただきたいと思います。

まず1点目ですが、観光振興、観光連携といった点が考えられます。リニアの開業を見据え、新たな連携での新駅周辺の拠点整備や海外からの玄関口としての機能が整えられることによりまして、インバウンド観光を含む観光需要を増加させて他の地域との連携強化が図られるなど、三遠南信自動車道を介して三遠南信地域を含んだ広域的な連携が図られると思っております。

絵の左側の青い龍が今、中部運輸局で進めていただいている「昇龍道」というプロジェクトです。セントレアと北陸道および東海北陸道を背骨にしまして能登半島へ抜く事業でございます。当然、竜といえば天竜川、天竜ということで、絵を少し描いてみました。セントレアから中央道・リニアを通って、この伊那谷を通って、諏訪湖までという絵を1枚入れてみました。まず左足が三遠南信自動車道を示し、右足は下呂のほうへ向かう。手のほうは、左手が国道152号を示し、右手は国道361号を使って飛騨高山のほうへ向かいます。それから、竜が口で火を吹いておりますが、これが中部縦貫道というようなイメージを画にしてみました。参考程度に見ておいていただければと思います。

二つ目は企業誘致の関係でございます。南海トラフ地震など沿岸部での地震や津波

のリスクなどの災害リスクを企業リスクと分散するために、当然この沿岸部から内陸部への拠点分散といったものも考えられるわけです。当然、三遠南信自動車道は極めて重要になってくると思っております。

同時に、商業圏の拡大や観光、通勤圏の拡大等による新たな人材確保を背景とした地域産業の育成など期待できるのではないかと思っております。

三遠南信自動車道とリニア中央新幹線の高速交通網の整備によりまして、この南信地域には大きく変化がもたらされるものと思っております。そして、この地域の活性化、発展というものが、ひいては三河地域、遠州地域とのつながりをさらに強固なものとするのではないかと思っております。三遠南信地域250万流域都市圏構想の実現に向けて、強力な後押しにもなるものと思っております。

現在この地域では地域づくりの将来像を描くために各方面でいろいろ議論が展開されているわけですが、いずれにいたしましても、地域の皆様方が主体となってこの地域の将来像を議論していただくことが極めて重要ではないかと考えております。私もこの当地の一人としまして期待しております。

少々長くなりましたが。これで私からの報告を終わらせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。



■意見交換

コーディネーター/飯田市 牧野市長

交通基盤の整備状況につきまして、花木所長にご報告をいただいたわけですが、実際に道路を使用する立場から見た交通基盤の整備、計画状況について紹介をいただければと思います。あわせて、整備によってどのような効果が生まれているか。これから整備が予定されている地域につきましては、将来どのような効果を期待するかについて、意見をお聞かせいただければと思います。

なるべく2回ぐらいご意見を伺いたいと思いますけれど、1回にまとめていただいても結構ですが、ぜひ3分以内でお願いできればと思います。

まず、交通基盤の整備状況について、それから整備効果について、あわせてお聞かせいただきたいと思います。

最初に住民代表の立場から、議長のお三方からそれぞれお願いできればと思います。まず、浜松市議会議長 太田様、よろしくお願いします。

浜松市議会 太田議長

交通基盤の整備状況と整備効果についてお話しさせていただきます。あわせた回答になってしまふかも知れません。

平成24年は私たち浜松市にとって大変、交通基盤整備という意味では大きな年でありまして、一つは三遠南信自動車道の鳳来峠・浜松いなさ北間が開通したこと。それから、新東名が4月に静岡県区間供用開始されたということで、東西と南北軸がつながりまして、大変大きな効果を発揮しています。

浜松市内から三遠南信自動車道・新東名にアクセスする道路も、いなさジャンクションからは国道257号について、部分改良が始まっています。また、新東名の浜松

浜北インターチェンジからは浜松天竜線という都市計画道路を、従前から継続して整備しているところでございます。こうした形で大きな幹線道路の軸が形成されますと、それに付随しますアクセス道路も整備されていく状況がありますが、当市は地域交通の自家用車分担率が大変高く、70%近くある都市であるものですから、車がないと動けないということで、大変ありがたい状況だと思っています。

ただ、これはお願い事になってしまふわけですが、先ほど花木所長からご報告がありましたように、三遠南信の佐久間道路まではある程度めどが立ち、平成30年の完成を目指して進めていかれるということですが、それから以北の佐久間インター、水窪北インターチェンジの32キロ、現道活用区間にについて、課題となっていました。これについては平成24年から計画段階評価のための調査を始めていただきまして、これまで2回の委員会を開催していただいているところです。あとは3回目の委員会がぜひ早期に開催されて、国の方針をある程度示していただければ、我々も全力で協力して参りたい。そんな思いでおりますので、ぜひ所長にもご協力賜ればというふうに思います。

また、整備効果についてですが、先ほども触れたように自家用車の交通分担率の高いまち、浜松ですので、道路整備は欠かすことができません。特に今回、三遠南信自動車道の鳳来峠からいなさ北インターチェンジまで開通したことにより、佐久間町周辺の北遠と呼ばれる地区の第3次救急医療体制が大変充実しました。つまり、3次救急については、三遠南信自動車道を使って浜松市内の病院まで搬送することができるようになったということで、住民としても大変ありがたいという声が寄せられております。それから、観光とか物流の面でも、

特にこれは恐らく東三河とか北遠に効果があるのでしょうけれども、新東名を活用して来られる方が結構増えているという印象を持っております。

それから、浜松市は産業のまちですので、今、新ものづくり特区を計画しております、サービスエリアのスマートインター周辺地区約88ヘクタールについて、事業調査に入りました。これについてはどのくらいの規模になるかはこれからのお話ですし、農業調整もございますので、先はまだ不透明ですが、産業誘導地区として整備していくたいというような、そんな考え方も持っております。

いずれにしましても、三遠南信地域はそれぞれ特色を持った地域の集まりですので、相互補完といいますか、お互いに足りないものを補完し合えるような、そんなことをこの道路が果たしてくれればいいなというふうに思っておりますし、また花木所長も触れられたように、特に3・11以降、私たち沿岸部を抱える地区、都市としましては、防災面でどうしても東西の道路だけでは発災のときにさまざまな活動が制限されるということで、この南北の道路を何としても、高規格の南北道路が早期に開通させていただきたいと、そんな思いであります。

豊橋市議会 岡本議長

私どもからは、特に国道23号の話をさせていただきたいと思います。国道23号の名豊道路につきましては、ご案内のとおり豊橋と浜松圏と西三河、それから名古屋圏等を結ぶということで、昨年の10月に豊橋バイパスが全線開通し、続いて本年の6月には豊橋の東バイパスにつきまして、浜松寄りのバイパスも全線開通をして、浜松方面への潮見バイパスと23号バイパスの直結という形ができております。

また、西三河方面については全線開通し

ているところがあるのですが、一部、蒲郡地域におきまして供用区間がなく、いわばミッシングリングの状態になっておりますので、蒲郡地区の部分について全市挙げて早期の開通に向けて一層の事業推進を求めていかないといけないというのが現状です。

その国道23号関係の効果ですが、こちらについては私ども豊橋市を含めた三河湾、三河港方面への産業的なアクセスというものが飛躍的に向上しておりますので、産業面に対しては影響力が非常に大きいということで経済界の皆様からも一定の評価をいただいておりますし、それからもう一つは、国道1号が、特に私ども豊橋市内においては市役所の周りの中心市街地を走っておりまして、そのあたりを通行していた車両等が国道23号へ回った関係でかなり交通量が減少し、渋滞緩和並びに自然と生活両面の環境について大変大きな改善効果が、数字も含めて大きく上がっています。

そして、もう1点は、先ほど浜松市の太田議長様からもご報告がありましたとおり、佐久間道路、それから三遠南信自動車道につきましても一定の整備がされまして、特に私ども東三河の中でも北部圏については生活、一部観光、それからもう一つはやはり命の道の一部ということもありますので、医療的な効果も含めてそのアクセスが生活・文化・経済全体に及んで飛躍的な高まりを見せていくというのが今の状況です。

飯田市議会 林議長

私からは三遠南信自動車道の南信州地域における整備進捗状況について、お話ししさせていただきます。先ほど花木所長からもご説明があった部分がございますが、よろしくお願いしたいと思います。

三遠南信自動車道の飯田山本インターチェンジから天龍峡インターチェンジまでの7キロメートルについては、5年前の平成

20年4月に既に供用開始されています。飯喬道路2工区としての天龍峡インターから仮称龍江インター間の4キロメートルにつきましては、2年後の平成27年度に供用開始予定、さらに仮称龍江インター・エンジから仮称飯田東インター・エンジの3.4キロメートルにつきましては、平成29年度に供用開始の予定と伺っております。

また、飯喬道路3工区としての仮称飯田東インターから喬木インターの7.5キロについては、現在飯田市内の上久堅地籍におきまして工事が施工されております。また、喬木村の中におきましては測量設計、用地調査が行われている段階でございます。

それから、国道152号の現道活用区間の21キロメートルについては、南信濃地区において長野県による工事が施工されております。また、長野・静岡県境の約6キロメートルの青崩峠道路、ですけれども、今年度から長野県側におきましても本線工事に着手されました。

続いて、三遠南信自動車道の効果についてですが、飯田山本インターから天龍峡インターまでの供用開始によりまして、名勝天龍峡への観光客の増加傾向が見られます。

また、新東名高速道路、三河道路の一部供用開始により、南信州地域への観光客も増加傾向を示してきております。特に日本の原風景であります遠山地域の観光客は、宅配便会社のCMの影響もありますが、平成24年度前半の統計では、下栗の里で15%の増、しらびそ高原で25%の増というような大きな効果が出ておりまして、地域の皆様、関係の皆様に大変喜ばれているところです。

それから、飯喬道路の沿線においては、観光農園や農業体験等のグリーンツーリズムが積極的に展開されており、全線開通により観光振興の支援も期待されるところです。

そして、整備効果として、地域が切実に期待しておりますのは、地域の医療サービスの向上でございます。三遠南信自動車道の整備により、遠山地域から第3次救急医療施設である飯田市立病院への搬送時間が現在の約80分から約30分に短縮され、救命率の向上にもつながってきております。一部供用開始の段階でありますが、既にこのような効果があらわれておりますので、全線開通によりさらにこの3圏域の連携交流の推進とともに交流人口の増大、あるいは観光振興などに大きな効果が期待されておりますので、ぜひとも1日も早い供用開始を願っております。

以上でございます。

阿南町 佐々木町長

今、それぞれの議長さん方からお話しいただき、浜松市長も言われたように、平成24年度に新東名高速道路と東名高速道路が浜松いなさジャンクションから三ヶ日ジャンクションが結ばれました。なおかつ、引佐から三遠南信自動車道が鳳来峡インターまで供用開始されました。これが非常に大きな影響を与えたわけであります。私ども阿南町は国道151号沿いの町なのですが、この鳳来峡インターが供用開始されたことによって、今まで浜松ナンバーの車が非常に多かったのですが、今度は静岡、沼津のナンバーが多く来られるようになってきました。先ほど飯田国道事務所長が言わられたように新野の道の駅、千石平では供用開始前と供用開始後では来客が20%も増えているという状況であります。

それと来年の夏には新東名高速道路が豊田東ジャンクションまで供用開始されるとお聞きしておりますが、そうしますと今度は伊勢湾岸自動車道を使用して三重県からもこの南信伊那谷へ来られることも考えられます。遠隔地でも身近に感じられる道路

になってくるということになり、高速道路のネットワークが整備されることによって、人の流れというのはまるで変わってしまうという状況が発生しており、非常にありがたいことだと思っています。しかし、整備状況の中で鳳来峡インターをおりて国道151号を通ってこの伊那谷へ入ってきていたただくことになりますが、国道151号にまだ未改良区間があるので、これはぜひ早急に改良をお願いしたい。新東名高速道路が今後、豊田東ジャンクションにつながった場合には車の流れが大きく変わってくると想定されるわけで、重ねて国道151号未改良区間について早急なる改良をお願いしたい。また、先ほどの飯田国道事務所長のお話によりますと、三遠南信自動車道が佐久間道路から始まりすべて天龍峡インターまでつながるのは、まだまだ時間がかかり、供用開始される時期についてまだ明確にならないようあります。供用開始までは非常に長い間があくというような気がしますので、それまでの間にはぜひ早い時期に一般国道151号の改良をお願いしたいと思っております。

整備効果については先ほども申し上げたとおり、高速ネットワークが結ばれることによって非常に大きな効果というのは出てくるわけで、ましてやリニア中央新幹線ということになりますと愛知県の設楽町さんや東栄町さん、豊根村さんにお住まいの皆様がもし東京へ行こうとする場合、国道151号やおそらく供用開始されているだろう三遠南信自動車道を北上して、飯田の長野県駅を活用したとすると1時間半ぐらいで東京へ入れるというようなことも想定され、そうなりますと東三河の皆様方は三遠南信自動車道を使っての東京への出入りというのが基準になるようなことも考えられ、非常に効果絶大だというように思っております。1日も早い改良促進がなされること

を切に要望します。

喬木村 大平村長

私のところは飯喬道路の第3工区、いわゆる喬木の工区ですが、道路計画の説明も実施されました、いよいよ新年度から工事用進入道路の着手にかかるという説明をいただいております。その間、地域インターとして先ほども飯田国道事務所長からお話をありました、氏乗インター・エンジも正式に決まりまして、喬木村としては喬木インター・エンジと氏乗インター・エンジと合わせてフルインターということになり、大変ありがたいことだと感じております。

これから工事が始まります、いわゆる村内の喬木工区でありますけれども、非常に橋梁が急で、またトンネルが11カ所と計画されており、発生土も喬木工区のみで60万立米と予想されています。したがいまして、その発生土の処理、あわせてアクセス道路の整備も国・県のほうへ要望していくかもしれません。特に狭隘な道路が非常に多いということで、工事に関して安全・安心のためにぜひそんな面をお願いしていきたいということと、整備効果の拡大もそれに伴って図っていきたいと思います。

リニア中央新幹線の話もありましたけれども、喬木村も今回の準備書公表によりまして、通過路線等も明らかになった関係で、通過沿線地域帯ということになりました。三遠南信自動車道もリニア中央新幹線も今後の地域の重要な基盤整備に加え、アクセス道路の整備により、さらなる利便性の向上が図られるということで、いろいろな面に効果があらわれてくることを期待しております。

先ほどもお話をありましたけれども、高速ネットワークが開通しますと、中山間地帯の輸送、それから救急医療体制などにつ

いて当然利便性が高まってくるわけありますし、村で今、盛んに行われておりますイチゴ狩り観光などの観光農業の充実が図られ、交流人口の拡大につながると期待しております。また、自然を生かした体験観光を進める中で、今、盛んに言われております二居住型のライフスタイルを推進し、保健や雇用等への効果も将来的に期待を持っていきたいと考えております。

また一面では、中山間の過疎化が進んでしまっており、今回のこういった三遠南信自動車道やリニア中央新幹線の開通を見据えて、国交省のほうで行われております地方拠点整備を、これも行っていく必要があると考えております。どうしても、そういう形をとらないとこれから安全・安心の居住体制がなかなかとれないということで、そんな面も含めながらこれから整備効果がさらに上がるよう一層の推進を図っていきたいと思っております。

奥浜名湖商工会 手塚会長

三遠南信自動車道が一部開通したことにより、今、若者というか、いろいろな地域の人も、昔の人に比べ、愛知県だ、長野県だ、静岡県だという考えが意外と薄い。行けるところは自分のところだというような考えが非常に強くなっています。そんな中で私たちのところは東名高速道路、また新東名高速道路、それに今度は三遠南信自動車道と三つの合流地点にあるものですから、それに加えて3・11以降、山間部というか、海から離れたところが非常に見直されているところです。「いろいろな仕事」、「いろいろな若者」が商売・事業をやるにしても、昔は出て行ったけれど、今は帰つて来ると表現したらいいのか、「この地域でやっていきたい。」というような意識が非常に強くなっているので、私たちはいろいろな意味でチャンスというか、我々にと

って望ましい時代に入ってきたのではないとかという感があり、その中でぜひとも三遠南信自動車道について、本当に1日でも早く通してほしいと願っております。リニアが通ったり、三遠南信自動車道が通ったりすれば、本当にもう、「ちょっと行ってくるよ。」と言って、すぐ帰って来られるよう、そんな地域になるかと期待をしています。

我々の地域は新ものづくり特区の計画地域内でもありますので、「これからかな」というような感じです。ですから、こういったいろいろな集まりや、また、「浜松だ、豊橋だ、愛知県だ、長野県だ」というのを取っ払って、こういういろいろなざっくばらんにお願いしたり、お願いされたりする、こういう機会をつくり、さらに、我々商工会の若い人でもいろいろな交流をさせてもらって、皆様とともにいろいろな地域間の交流をし、発展をさせていくことを皆様にお願いしたいと思います。

天竜商工会 平賀会長

私ども、いなさ・鳳来峡間が開通しまして、しぇつちゅう走っているのですが、本当に都合がいいというか、地元の皆様方も非常に喜んでいます。

それに私どもの地域は三遠南信自動車道の佐久間インターが川合にできるのですが、このトンネルの土砂等につきまして、廃土の場所も畑など様々な場所を確保しまして、いつでも土砂を捨てられるような状態まで持ってきてています。

また、そのインターから水窪地域に向かうルートについて、3案あると聞いておりますけれども、三遠南信自動車道は一部既存道を利用するが、水窪までほとんどトンネルのルートとすることが、私は望ましいと思います。なお、既存道は地域の住民の生活の道路ですので、安全で安心な交通とな

るよう改良工事の継続を希望します。

豊丘村商工会 片桐会長

豊丘村は喬木村の北隣に位置しておりまして、今回、リニアのトンネルが通るぐらいで、今回の三遠南信自動車道もそこを通るわけではありませんが、非常に隣接し、またこの道路ができることによって期待することがたくさん考えられます。昔から東三河・遠州というのは非常に我々とは近い関係にあり、塩の道でもあり、材木もこの天竜川を通して流通されていたと聞いております。また近年、中央自動車道ができてからは非常に近い関係にはなっております。しかしながら、まだまだ浜松、豊橋に関しては非常に遠い感じがします。個人的にも浜松へ行ってみたいと思うけれど、なかなか大変な思いでの道を通らないといけないというわけですが、たまに行っても近いような、遠いような町だなという感じを得ています。三遠南信自動車道が開通することにより、人と文化と商品と農産物や海産物の行き交いが活発になり、あわせて観光の飛躍的発展が間違いなく得られるであろうと思っています。私どもはたまたま広域に販売している商品を持っているわけですが、私どもが浜松へ行こうと思うと大変な大回りをしなければいけない。三遠南信自動車道の開通でそれが「すぐに行ける。」「日帰りもできる。」、あるいは「もっと遠くまで商売ができる。」というように変わる。非常にそういう意味で幅広く行動範囲が広くなるという点でも期待がされるところでございます。

また、豊丘村においては6次化産業ということで、いろいろ村を挙げて取り組んでいるところですが、そういったものも皆様が豊丘村へ見えたなら、こんなにおいしいものがあると紹介できる、またこちらからも販売に行くこともできると、こんなような

関係が築けるのではないかと、こんな期待をしているわけでございます。

また、交流のことですが、今日、ここにいらっしゃる方々はそれぞれの立場の偉い人ばかり出て、年代がかなり古くなつて、完成した段階で利用できるが来られているのかなと、こんなような思いがするわけで、そういった意味で、もう少し青少年だとか30代、40代、50代、というような幅の広い年代層による交流が必要ではないかと、これは本当に思います。若い世代が「だれか、どこかの偉いおじさんたちが一生懸命山の中へ道路をつくると大騒ぎしている。」と、人ごとのような感じがするのではないかと危惧する。期待をどのくらいしているのかという意味では、もう少し若い世代の方々との交流もどうやってやるのがいいか検討するべきではないか。できることから一つずつやっていけばいいのではないかなど、こんなことも思っております。

当然、先ほどから出ている危機管理、地震、津波だとか雨だとか災害、それから医療の関係、命の道とか、そういう点では非常に期待されることでございます。

飯田商工会議所 柴田会頭

まず、整備の状況につきましては、先ほどパワーポイントを使って花木所長から詳しいお話をございました。それから、林飯田市議会議長からもさらに突っ込んだお話をございましたので、改めて私のほうから工区がどうなっているというようなことは発言いたしません。

いずれにしましても、今年1月に10兆円を超える大型予算、補正予算がつきまして、三遠南信自動車道にも大きな予算配分が行われました。そのことによりまして三遠南信自動車道の建設工事が一気に進んだなという感じが、私が現場を見ましてもつくづくそういうふうに思うところであります、

やはり毎年、毎年、国土交通省あるいは国会などへ浜松、それから豊橋の会議所の会頭さんとご一緒に陳情してきたことがやっと実を結んできたのかというふうに思っております。ただ、毎年、毎年、「あと10年後には開通」、「あと10年後には開通」と言い続けて10年以上たっているわけでありますけれど、今年度のような大きな予算がついてくれば、それから青崩峠の起工式が終わってくわ入れが済めば、一気にトンネル開通も期待できるではないかと期待しておりますとして、7年後のオリンピックの開催までにはできないと思いますが、期待をしたいと思うところでございます。

それから、リニア新幹線が9月18日に発表になりました、私も説明会に行ってJR東海の説明を聞いてまいりました。これも花木所長のお話にもございましたが、決まったルート、それから駅の位置、これを中心にどういう形で三遠南信地域の北の玄関口として、さらには長野県の南の玄関口として、どのような駅づくりをしていくのか。そのことによってどのような経済発展に結びつけられる開発ができるのかということが、これから私どもで考えていかなければならぬ一番大きな課題ではないかと思っております。その課題のうち具体的な課題については、ここ1、2年までが非常に大事な時期だというふうに思っております、これについては隣に牧野市長がおみえになりますが、いずれかの時期にぜひお考えを聞かせていただきたいと思っております。私ども経済団体といたしましても、経済団体なんて言いましてもお金がありませんので、構想のご提言というか、発表ということになるわけですが、それについても準備を進めていきたいと思っております。

それから、効果のお話でありますけれども、これにつきましては実際のところどういうふうな効果が出るかということについ

ては、今まではっきりしたことが、ただ観光客が増えるとか、場合によっては工場誘致ができるではないかとか、そういうことについてご発言があるなどして、何となく私どもも意識には思っておりましたが、本日の午前中に行われました経済開発協議会の役員会におきましても公式に発表させていただきましたが、この経済効果の調査を第三者機関シンクタンクにお願いをいたしまして、来年の3月から4月、5月ぐらいまでには一定の数字を持った経済効果の調査結果が出てくるのではないかと思っておりますので、それについても大いに期待をしたいと思っております。

地域づくりサポートネット

田中代表理事

2年前にこの三遠南信地域の住民団体でつくる住民ネットワークというのができまして、代表世話人は輪番制になっておりまして、今日から来年の今ごろまで浜松の私が担当することになりましたので、そちらのほうのお話をさせていただければというふうに思います。

今日午前中、私どもが議論して、来期というのか、今日から始まる新しい活動方針が一応決まりましたので、それに沿ってお話しさせていただければというように思います。今まで、参加の皆様からハイウェイ、あるいは幹線道路の整備、リニアの整備の話というのがあって、これは地元として我々にしても悲願であるということは間違いないのですが、やはり地域といいますとハイウェイとか幹線と同時にバイウェイと言われる旧道、あるいは地域の道、もつといつたら歴史の道まで含めて両輪になって初めて地域の道ができ上がるということで、ハイウェイで確かに大きな流れができるわけですけれど、地域内に魅力がなく、やはり「溜め」の魅力がなければ通過されてしま

まうという問題も全国を見るといわわけではない。大きな流れをそれぞれの地域がどうやって「溜め」の魅力として受けとめておくかということがあわせて考えないといけないのではないかという認識をまず持っております。

それから人材のことですけれど、お話がありましたように、最近ここ数年、住民のいろいろな会合を見ていますと、IターンだとかUターンだとか、今までちょっと我々年配の地域づくりにかかわった人間でない人たちが、我々の会合にもたくさん出てくるようになっています。そういう意味ではある面では将来性は明るいなという期待を持ちながら、我々も一緒にやっているところです。私どもは住民ですから余り力がないということもなるのですが、特に三遠南信圏の中の県境部分、大都市はもちろんあるのですが、やはりこの県境部分をしっかりコアとして道をつながないと、実は都市部との連携もできないという状況があるので、どちらかといえば3県境部分をしっかりつないでいくということの住民の役割というのをしっかりしていこうではないかというのが我々の考え方です。

お手元の資料、三つの柱が立てて、これからやれることからやっていこうということで進めてあるのですが、一つは造語で大変申しわけないのですが、「地縁店」、鎖のチェーンではなくて、地縁で結ばれたアンテナショップをつくっていこうということで、2年ほど前からやってまいりました。おかげさまでご理解いただいている場所もございまして、浜松の特選市場とか、今度は天竜市さんで指定管理に出していただいた施設のところでも物が売れるということになりました。これで三河側に一つできると、一つずつですけれどアンテナショップができるということで、今後期待される新城インターができてきますと、多分この新

城市というのはほかのところと同じなのですけれど、東西南北のクロスポイントになってくる可能性があるのではないかということで、新城に三河側の今、アンテナショップができないかということで少し検討を始めているところです。

それから、もう一つは三遠南信の中の道路ですが、今、国道151号を中心に152号、特にここは非常に伝統的に全国にも誇れる、もっと国際的にも誇れるお祭りがたくさんある地域で、ここを祭り街道という名前で、もう既に地元の方たちがおやりになっているのですが、来年、お祭り街道の15周年という節目に当たるということもありますし、国道151号沿いのお祭り街道と152号を中心として、奥浜名湖も含めての遠州側のお祭り街道と合わせて祭り街道として、道につながる一つの活動の拠点にしていきたいと考えている。ここはたまたま五平餅の文化圏であるので、祭り街道と同時に五平餅文化圏という食文化のつながりもあるのではないかというような話も実はしているところです。

それから3番目ですが、これは特に若い人たち中心に起こっているのですけれども、いわゆるアートとかスポーツで結んでいこうという活動が非常に盛んです。太鼓があったり、映画のフィルムコミッションであったり、そういう若い人たちの活動が広がってきているものですから、もう一つの「溜め」の魅力としてアート街道、スポーツ街道というのもこの軸の中に入れてやって、この3本の軸を中心にやっていきたいと考えています。

特に行政の方、経済界の方につきましては住民もなかなか力があるわけでもありませんし、自分たちでできるわけでもありませんので、ぜひ行政、それから経済の方にも応援団になっていただいて、やっていただきたいなと思います。先ほどのお祭り街

道については今一応、この国道151号については新城市長や飯田市長がいらっしゃいますけれど、その間を少し重点地区にしてやろうというふうに思っていますので、またご関係の皆様にはぜひ応援団となっていただいて、後押ししていただけたとありがたいと思っておりますので、よろしくどうぞお願ひいたします。

岩屋緑地に親しむ会 西川代表

今、皆様、いろいろ述べていただきましたので、私の述べるようなことを全部しゃべっていただきましたものですから、もうしゃべるような要素はないのですけれども、ちょっとつけ加えさせていただきますと、ちょっと豊橋関係についてお話していきたいと思います。

実は豊橋のほうも国道23号、先ほど豊橋市議会の岡本さんがお話しされたように、全線開通しました。それは本当にうれしいことです。浜松からずっと入れる。それから、私は今、二川というところに住んでいるのですけれども、国道1号がすごく渋滞します。といいますのは、湖西市へかなりの企業さんが出でこられて、もう満杯の状態で、朝になりますともう7時ぐらいから8時半ぐらいまで、もう車がいっぱい動きがとれないというような状態でした。それが今、国道23号の開通によりまして、かなり国道1号が有利になりました、そちらへ回るような形にもなってきてくれていますので、非常に楽になっています。特にその二川校区というのは道路が山に迫っていますから、すごく狭い道路です。旧街道とバイパスが1本。2本しかなかつたということもありましたものですから、国道23号の開通により、すごく交通の渋滞も少なくなって、特に子供たちの通学の安全性が確保できたというようなことを感じております。

それと同時に国道23号の豊橋バイパスについて、沿海部の大崎から前芝までの間が片側2車線になりました。それによって田原地域のトヨタ関連の車両がスムーズに通れますものですから、その間がすごく緩和されまして、朝夕のラッシュもスムーズに流れるようになりました。

また、豊橋地域では東三河環状線という道路があるのですが、これもなかなか整備が進まずにいたのですけれども、ここ2、3年、新しく工事も着手されまして、これからスムーズに行くのではないかなと思っております。

これにあわせて、三遠南信自動車道も開通していただけますと、三河港の利用価値がすごく高まってくると思います。それから、今、三河港は自動車の基地でありますけれども、これがコンテナの基地に発展していければすごく良いのではないかなと思っています。

それから、先ほども三遠南信住民ネットワーク協議会の田中さんからもお話をあつたように、住民団体も頑張っておりますので、皆様の協力を得ながら、仲のよい3地域に発展していければいいなと思っています。

コーディネーター/飯田市 牧野市長

それぞれの立場からお話をいただきました。

これまでご発言いただいた内容から、交通基盤の整備によりまして緊急医療体制の利便性の向上、あるいは観光などによる交流人口の増加など、様々な分野におきまして非常に良い効果が生まれてきているということが確認されました。また、地域経済の一体的な発展にもつながってきているということも確認できたのではないかと思います。

それでは、そういった整備効果をさらに

高めていくために、これから私どものＳＥＮＡにおきまして構成員、あるいは関連組織が連携して取り組むべき課題は何であるかということにつきまして、ご意見をお聞かせいただければと思います。

自由にご発言いただければと思いますが、いかがでしょうか。

飯田市議会 林議長

これから道路整備に向けて取り組む課題ということですが、今後、三遠南信自動車道が整備推進されることによりまして、医療サービスの向上とともに災害に強い地域のネットワークが構築されることになります。こうしたことから、三遠南信地域の災害時の相互応援協定に伴う連携の促進が可能となりますので、災害時の安全、あるいは信頼性の強化が大きく期待されるところです。

そのような中で期待されている整備の効果が当地域に発揮されるためにも、ミッショングリングと呼ばれております未整理区間が存在する三遠南信自動車道の早期全線開通が何よりも望まれるところです。道は全線開通して初めてその最大の効果を発揮するわけですので、1日も早い全線開通が願われるところです。

東三河、遠州、そしてこの南信州地域の市町村議会の議員で構成しております三遠南信、浜松三ヶ日・豊橋道路建設促進議員協議会を私どもは組織しております。この協議会におきましては、関係圏域の主要道路の建設促進のための調査・研究や、関係機関への要望活動を28市町村議員の総意のもとに行っているところです。今後もこれにしっかりと取り組んでいきたいと思います。

今後さらに整備を進めるためには、ＳＥＮＡを構成します地域住民、経済界、行政、議会、こういったところが一丸となりまして、国や県に対してしっかりと要望を進めて

いくことが三遠南信自動車道の早期全線開通や、あるいはリニア中央新幹線の早期開業にもつながっていくと考えています。

地域づくりサポートネット

田中代表理事

今、建設のほうのお話があつたのですけれど、多分道づくりというのと道使いというのが両方セットで道が生きてくるという感じもしますので、できましたら道づくりの協議会があると同時に道使いの研究とか協議をする場もぜひつくっていただければ、私どもの運動とも合いますので、つくることと使うことをぜひ両輪で進めていただきような体制をぜひ作っていただきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

コーディネーター/飯田市 牧野市長

また、そのことにつきましてはこれから検討させていただければと思いますが、道づくりの側面と、それから道使い、道をどうやって使っていくかという側面、両方必要ではないかというご発言がありました。

喬木村 大平村長

先ほどから同じような内容が出ているわけでございますけれども、やはり三遠南信自動車道といえばやはり三遠南信の250万圏域の南信州地域、さらにはリニア中央新幹線が来るということになれば、名古屋、東京の大都市圏がやはり圏域内に入るという、こういった面でやはり南信州地域ばかりではありませんけれども、この三遠南信圏域がそういうことを見据えた中でのいろいろなことがこれから広がっていくのではないかなど、そんな希望を持っております。新しい産業の創造などということはもう既に言い尽くされているわけですが、この三遠南信地域、やはり歴史の中で自然環境、それから文化の面でも非常につながりが深

いわけなので、南信州ファンの拡大をしなくてはならないということが第一かと思います。自然を生かしたもの、そして、その地域でなくてはならない、そういうブランド的なものをきちんと磨く中で開通までにはそういう方向を持っていかなくていけないなと思います。

先ほども藤山先生がお話になっておりましたが、疎開保険なんていう言葉も出ておりました。そういう面でも災害時、それから緊急時の場合には南海トラフ地震等がある中では南信州もそういう役割を果たしていく必要があるということを感じました。それから、リニア中央新幹線と三遠南信自動車道があくということなので、県の南北のメインゲートとなれるように、これからはそういうものを目指しながら磨いていかなくてはいけないと、そんなことを感じます。

飯田商工会議所 柴田会頭

整備効果を高めるために取り組むべき課題ということで、今、ご発言があるわけですが、三遠南信自動車道、本年度本当に大型の予算がつきまして、大きな工事が、着工区間もたくさんにふえてきましたが、全線開通、全線供用開始になるまでにはまだまだ相当な年月がかかるわけでした、その間の一番大きな課題は先ほど片桐会長のご発言もありましたが、若い方々を含めた住民意識の高揚、「とにかく1日も早くあけてほしいんだ。」、「それがこの地域に住む、三遠南信地域に住む住民の願いなんだ。」ということを、もっと気持ちを高めていく運動をしなくてはいけない。その運動をすることにより、それが国会、あるいは国土交通省に熱意が伝わって、幾らかでも多くの予算がつくことによって1日、1年でも早い開通につながっていくということになるのだろうと思います。私たちの生

活はこの道路が全線開通することによって大きく変化します。先ほど来言われておりますように、災害防災対策の問題、それから産業の発展、何よりも私たちの生活そのものが変わるということについて、若い人たちを含めた住民意識の高揚、それを運動に具体的につなげて、国の予算拡大につなげていくことができれば、1年でも、あるいは1カ月でも1日でも早く開通につながるのではなかろうかなと、これが一番大きな課題ではないかと思っています。

浜松市議会 太田議長

私たちがこれまでと同じようにやはり国・県に対して一体となって要望活動していくということは何よりも大切なことだというふうに思います。

それともう一つは、私たちの地域が一体感をつくるために、各市町村で持っているそれぞれの、例えばアクセス道路の情報であるとか、そういう情報をお互いに共有して、地域としてメリットを高めていくことも大切だろうというようにつくづく思いますので、先ほどそれぞれの村長さん、町長さんがおっしゃっていただいたような地域の問題も含めて、問題、課題を共有していきたいなど、そんな思いを強くいたしました。

天竜商工会 平賀会長

特に県境域の開発には時間と費用がかかるわけでございます。SENA構成員の県境域開発の方向性が同一の思いとなり、相互の強力な連携と共同歩調により地域の有識者等を総動員して県と国、事業推進に向け、命かけてやっていくべきだと思います。強力な一体感が求められると思います。

飯田商工会議所 柴田会頭

補足になりますが、SENAの予算を使

つて経済効果の調査を行うということについて、皆様にお話をさつきさせていただきました。それから、さらにこの民意を高めるということのために、例えばですが、この机の上にありますこういう小旗、こんなものも相当数、とりあえず500本注文して、皆様のできるだけ近いところに届くように工夫しております。それから、さらにはリニアが走るポスター、それから三遠南信自動車道ができ上がったときのポスターなどをたくさん印刷しまして、皆様の企業、それから団体などのところに張っていただきのような運動をしております。そういうこととの相乗効果でこの地域の民意が上がって、その心が、その気持ちが国へ届いて予算獲得につながっていけば良いと思っています。

コーディネーター/飯田市 牧野市長

それでは、大体意見もきょうのところは尽くされたということありますので、意見交換の取りまとめに入っていきたいと思います。今回の意見交換によりまして、主に四つの点について意見交換がなされたというようにとらえさせていただきます。

まず、三遠南信自動車道の整備状況についてありますが、これにつきましてはお話をありましたように、三遠南信自動車道の一部供用、それからあと新東名高速道路、御殿場インターチェンジから三ヶ日ジャンクションの開通によりまして、またそれらに接続する幹線道路やアクセス道路の交通量が増加するという中で、交流人口の増加、観光客の入り込みがふえるというようなことで、地域への経済波及効果が上がってきているということが確認されたところであります。

また、地域の重要な交通基盤となっております幹線道路、アクセス道路の整備、先ほども名豊道路等幾つかの幹線道路のお話をも出てきておりますが、そういうことに

つきましても渋滞の緩和や生活環境の改善、あるいは安全、安心につながっているということも確認がなされたというふうにとらえております。これがまず1点であります。

それから、三遠南信自動車道への期待、要望ということを2点目にまとめさせていただきます。

南北軸であります三遠南信自動車道に東名高速道路、それから新東名高速道路、浜松三ヶ日・豊橋道路、将来的にはリニア中央新幹線、こういった広域的なネットワークが形成されているということによりまして、三遠南信圏域の交流人口はさらに増加していくことが期待されております。また、産業の発展、活性化ということも合わせて期待がされているところでございます。

また、安全・安心という観点から見ましても、早期全線開通によりまして救急医療機関への搬送時間の短縮、あるいは津波、地震、大雨等によります大規模災害時におきましては、避難経路の確保、円滑な救援や復旧活動、救援救急医療活動がこうした必要な道路によりまして期待ができます。つまり、命をつなぐ道としての効果を發揮することができるということが大いに期待がされているということも確認されまして、だからこそミッシングリンクとしての位置づけがなされている三遠南信自動車道を1年でも早く早期に整備ができないかと、こういうことが強く意見交換の中でも打ち出されたところがありました。

それから、参加者の皆様方からの提案も幾つかあったということあります。商工会議所・商工会が加盟いたします三遠南信地域経済開発協議会からは早期全線開通への足がかりにつながることを期待したいということで、本年度経済効果調査についてのご提案をいただきました。また、住民ネットワークの皆様方からも活動方針案が示されまして、幾つかの具体的な連携や展開

についてのご説明もいただきました。また、道づくりの話とともに、いかに道を使うかという道使いの話も合わせてご提案もいただきました。

それから、三遠南信の連携を強固にするためには、やはり一体感をどのように醸成していくかと、こういうことにつきましても幾つかの意見の中で取り上げられたところでございます。企業や住民同士の交流や意見交換をさらに定期的にしていくことが必要ではないかというようにとらえさせていただいたところでございます。

そして最後に今後の展開といたしまして、三遠南信地域連携ビジョン推進会議が各団体の要望活動をしっかりと把握して、行政、議会、経済界、住民、こうしたさまざまな立場の皆様方が一丸となって国や県に対しまして継続的な、そして強力な要望活動を展開するということが非常に重要であるということが確認されたというものでございます。

以上四つの点につきまして、まとめとさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

ありがとうございます。それでは、こうしたことをまとめさせていただいて、後ほど全体会で発表させていただきたいと思います。

最後に、せっかくの機会であります。今日はわざわざ八戸市から大坪様にこの分科会に参加していただいておりますので、一言いただければと思います。よろしくお願ひします。

八戸市 大坪総合政策部長

八戸市から参りました大坪でございます。大変有意義な時間を過ごさせていただきました。この三遠南信地域、人口250万人都市圏、青森県は今、人口にいたしまして140万人を切っていますので、この圏域に

比べますと1県でも及ばない、そういう県境を越えた広域での道づくりの推進の會議というのはすばらしいなと感心した次第でございます。

私どもは八戸市から三陸沿岸地域、宮城県の気仙沼、仙台まで360キロございます。その中でこれまでサミット会議を、昭和59年からずっと継続してきておりまして、沿岸道路の整備を要望してきておりました。東北地方の幹線の主要自動車道といいますと、内陸部を走っている道路が東京から福島、仙台、盛岡を通って青森までというような路線になっておりますが、三陸沿岸はそういう意味では交通の過疎地でした。しばらく要望を続けておったのですけれども、3・11の被災を受けまして、三陸復興道路として全線開通しました。国の施策の流れとしても、いわゆる公共事業に対する国のスタンスが大分変わってきているのかなという気もしますし、そういう意味ではやはり経済交流としての高速道路の意味づけというのもあるかと思いますが、私どもの経験したところからしますと、やはり命の道というのは非常に強いインパクトが国に対してもあるというように思っておりますし、また、災害時だけではなくて平時も救命救急を初めとする医療を支える命の道としまして、非常に大きな機能、効果を発揮すると思っております。

先ほどもちょっとシンポジウムの中でお話をさせていただいたのですけれども、定住自立圏という広域の連携策を進めておりますけれども、ドクターカーを導入しております。これは救命救急です。ドクターへりで補完できない夜間とか、それから天気の悪いときにドクターカーが出動して行きます。今、八戸の市民病院に2台あるのですけれども、平成22年度から当院に在籍し、今年で4年目になります。この2台の効果を申し上げますと年間50名前後の方々の命

を救っています。これは劇的救命率と言っているのですけれど、劇的に救命ではそれぐらいできているということがありますので、やはりその辺のところはこの圏域におきましても、高速道路というのは効果發揮するのかなと思った次第です。

いずれにいたしましても、すばらしい地域の資源が豊富にある地域でございますので、それを最大限生かすためにも高速道路の整備というのは欠かせないのかなと思っております。

コーディネーター/飯田市 牧野市長

大変貴重なご意見をありがとうございました。

皆様方のご協力によりまして円滑かつ内容の濃い意見交換ができたというように思います。改めて御礼を申し上げます。

それでは、以上をもちまして「道」分科会を閉会とさせていただきます。

5 「技」分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2013 in Minamishinsyu

「技」分科会では、「人財育成と持続的産業発展の有機的連携をめざす」をテーマに意見交換がなされた。

コーディネーター	飯田市	工業課	久保田 優典
報告者	飯田市	産業経済部長	高田 修
行政	平谷村	平谷村長	小池 正充
行政	豊丘村	豊丘村長	下平 喜隆
経済	浜松商工会議所	浜松商工会議所会頭	御室 健一郎
経済	磐田市商工会	磐田市商工会長	野寄 宏之
経済	御前崎市商工会	御前崎市商工会長	阿形 好男
経済	豊橋商工会議所	豊橋商工会議所会頭	吉川 一弘
経済	田原市商工会	田原市商工会長	河合 利則
経済	新城市商工会	新城市商工会長	本多 克弘
経済	阿智村商工会	阿智村商工会長	藤倉 陽太郎
住民	NPO 法人 三遠南信アミ	副理事	中野 真
住民	有限会社 燦燦	代表取締役	宮下 彰
パネリスト	延岡市	市長	首藤 正治

(敬称略)

■はじめに

します。

コーディネーター／

飯田市工業課 久保田優典氏

本会の進行でございますが、最初に事務局から今回の分科会のテーマについてご説明をいたします。その後、この隣におられます、飯田市産業経済部の高田部長より、今日のテーマであります「人財育成と持続的産業発展の有機的連携をめざす」ということに関しましてご報告をいただきます。

その後、意見交換を行いまして、今後推進すべき事業等について論議をしてまいりたいというふうに思います。

それでは、まず事務局から説明をお願い

事務局

それでは、説明をいたします。

今回の議論のテーマは「人財育成と持続的産業発展の有機的連携をめざす」と題しまして、特に前年度の議論の中で出ました大学と行政、また、企業の連携の中で、「人財」というテーマに重きを置きまして行いたいと思います。人財の「財」という字もわざとこのような字にしております。今年の2月にSENA事業で円卓会議を実施して意見交換をしたことも一つの事例でございます。本年はその事業を引き継ぎま

して、さらに発展的に意見交換をするため、また、国内外での経済競争を生き残るために、ものづくりの基幹をなす人財を育成し、その人財が活躍する場を提供していくこと、そして、域外から人財を確保することが重要であると思われます。

今後、2020年代開通を希望する三遠南信自動車道や、特に当地域におきましては2027年に開業するリニア中央新幹線のインフラ整備とあわせまして、来るべき高齢化社会への対応など、人財の育成・交流は非常に重要な位置づけと考えられます。

産学連携などが強くうたわれます時代の中で、三遠南信エリアの経済発展を人財育成と各地域の特徴を生かした産業集積の側面から考えるため、「人財育成と持続的産業発展の有機的連携をめざす」ということで今回のテーマを設定いたしました。よろしくお願いします。

■ 報告

コーディネーター／

飯田市工業課 久保田優典氏

ありがとうございました。

それでは、早速ですが、飯田市産業経済部長 高田様よりご報告をお願い申し上げます。

飯田市 高田産業経済部長

皆さん、こんにちは。飯田市産業経済部の高田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私は昨年度まで南信州広域連合の事務局長を務めておりまして、この三遠南信サミットにつきましては裏方としてお手伝いをしておりましたが、ちょっと立場が変わりまして、今年度は報告者ということで務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

それではスライドを見ていただきながら、

当地域のものづくりの取り組みにつきまして、報告をさせていただきます。

当地域の状況ですけれども、三菱電機、オムロン、シチズン時計などの大企業のマザー工場ですとか、それから、地域の中核的な役割を果たしていただいております多摩川精機さん、夏目光学さんをはじめとして、さまざまな精密機械、電子系の企業が集積しております。また、伝統産業であります水引ですとか、それから、半生菓子、凍豆腐などの特徴ある食品産業もあるという、といった地域でございます。

飯田市の産業政策の組み立てを説明いたしますと、少子高齢化が進む地域におきまして、若者がふるさとへ帰ってこられる産業づくりというコンセプトのもとに、毎年、地域経済活性化プログラムを策定いたしております。

地域経済活性化プログラム2013では、「支え、育む産業基盤づくり」、「未来を見据えた地域産業の魅力・強み・人材の強化」、「新しい力による新しい産業づくり」の三つを施策の柱といたしまして、10の重点プロジェクトに取り組んでいるという状況でございます。

特にリーマンショック以降におきましては、ものづくり産業における構造変化が激しく、不確実な状況が増しております。そういう意味で、一つの企業が単独で新技術、新産業を開拓・展開していくということは難しい状況になってきておりまして、広域連携はより重要になっているという、そんな状況かと思います。

飯田下伊那地域では、広域連合を組織しますとともに、定住自立圏形成協定の締結により、様々な連携を行っております。産業面におきましても、平成20年4月から、国の同意を受けまして「南信州地域産業活性化基本計画」を策定いたしまして、飯田市を含めまして、14市町村において、「高

度ものづくり産業」、「地域風土密着産業」、「頭脳活用産業」の3分野について、産業の集積強化を図ってきているところです。

さらに、県境をまたいだ広範囲な連携といたしまして、平成13年度から国のクラスター計画に基づきまして、三遠南信地域における企業間ネットワークの拡大や次世代産業に向けた産業振興施策に取り組んできております。具体的には、平成22年3月に三遠南信地域基本計画が策定され、10年後の基幹産業化を目指し「輸送機器用次世代技術産業」、「健康・医療関連産業」、「新農業」、「光エネルギー産業」の4分野におきまして五つのプロジェクトに取り組んできております。

また、実際の事業実施に当たりましては、三遠南信クラスター推進会議が中心となり、大学や金融機関等と連携をしながら展示会への共同出展、大手メーカーとのマッチング、あるいは人財育成等の事業を展開しております。

続きまして、当地域のものづくり産業の中核支援機関であります公益財団法人南信州・飯田産業センターの状況ですが、長野県、飯田下伊那の自治体、業界団体等の出捐により昭和50年に設立されております。以来、地域内外の関連機関と連携して様々な産業振興に取り組んできております。

当センターでは、人材育成支援、それから、創業研究開発支援、販路開拓支援、新産業創出支援の四つのメニューを柱にいたしまして企業の支援を行ってきているところであります。そのために工業技術センター、EMCセンター、環境技術開発センター等を併設しまして、きめ細かなニーズに対応しております。特に力を入れておりますのは、新産業の創出であり、専門コーディネーターを配置して、航空宇宙産業や健康・医療産業等、新たな事業の展開を図っ

てきているところです。

当センターにおきましては、さまざまな分野で活躍されておられました工学博士ですとか大手企業のOBの方、あるいは社長だった方、大学教授等、それぞれの分野で幅広い知識と人脈、豊富な経験を生かして、ニーズに即して迅速な対応をさせていただいております。

ここからは「新産業育成支援の取り組み」についてご紹介をさせていただきます。

初めに、「航空宇宙産業クラスター形成の取り組み」について申し上げます。

飯田下伊那地域に新たな産業の柱を育成したいということで、今後の成長が期待されます航空機産業に着目しまして、中京圏に近いという地の利と当地域に厚く集積をいたしております精密加工、電気・電子技術を基盤としまして平成18年に飯田航空宇宙プロジェクトを立ち上げました。現在は36社が参画しております、航空機部品の共同受注体制の構築、あるいは展示会等への出展を通じての販路拡大・開拓、あるいは技術力向上のための人財育成に取り組んでいるところです。

資料の上段に「現状」と書いてあります
が、当地域の受注体制の現状でして、多くの中小企業は機械加工という限られた工程、あるいは一部の部品、1工程しか受注することができないというのが現状です。

現状ではそういう状況が国内に限らず、海外の大手メーカーでは、一定規模のコンポーネント単位、いわゆるまとめて発注をしたいという要求が高まってきており、サプライチェーンの再編等が活発化しているとのことです。そういう要求に対応できない企業は受注が困難になっていくということになりますので、まさにこの地域で中小企業が連携あるいは共同して、そのニーズに応えていくことが大きな課題になってきています。

そうした中で、資料下段の貸し工場整備構想ということで、地域内で一貫体制を構築して大手メーカーの発注に対応していくたいということで、貸し工場の整備構想に取り組んでおります。

資料の中には入っておりませんが、その貸し工場整備構想の概要についてご説明します。国・県のご支援をいただく中で、支援機関であります南信州・飯田産業センターと行政が連携をいたしまして、ネックとなっております熟処理ですとか表面処理などの特殊工程を行うことができる貸し工場の整備を行っているところであります。このことによりまして、域内の企業の設備投資意欲ですとか、域外からの誘致促進を高め、実施が可能となる工程幅を広げまして、地域内での一貫生産体制の確立を目指していきたいというものです。

航空宇宙産業の構造をピラミッド型の階層として表した場合、それぞれの企業が階層を1段から2段引き上げることで、国内外からの付加価値の高い受注を獲得していくながら、そのピラミッド自体を大きくしていきたいと考えております。

続きまして、二つ目の「新産業の取り組み」としまして、「健康・医療産業」をテーマに、今年4月、飯田メディカルバイオクラスターが正式に発足をいたしました。これは、健康長寿社会を支える地域の創造を目的といたしまして、地域にあります民間企業、それから大学、県、市町村、関係団体等が一体となりまして、新たな分野に研究の一歩を踏み出すことができたという状況です。

具体的な事業の推進に当たり、食品系と医療機器系の二つの分科会を立ち上げ、現在、勉強会等を開催しているところです。この分野では、既に幅広い活動と着実な実績を積み上げておられます、浜松市を中心として組織をされている健康医療産業クラ

スターから学ばせていただくことが多々あろうかというように思いますので、より一層の連携をお願いしたいと思いますし、そのような事業を展開していきたいというように考えております。

三つ目の「新産業育成の取り組み」としまして、「環境産業」をテーマに、マイクロ水力発電システムの開発と実証事業に取り組んでいます。マイクロ水力発電システムの開発については、この地域にあります飯田精密機械工業会が昨年当初から取り組みまして、試作機の開発に成功いたしました。その開発された製品を地元の建築士会が設計と工事を担当いたしまして、市内の山間部の河川から取水をして、その近くの公園にこのシステムを設置しました。その管理については、地元地区の全面的な協力をいただきながら、現在、性能テスト等の実証実験を行っているところです。

最後になりますが、本日のテーマでもございますが、「人財育成の取り組み」を紹介させていただきます。

地域の持続的なイノベーションをしていくためには、そこにかかる人財の育成はどうしても欠かせません。当地域では、南信州・飯田産業センターを中心としまして、ものづくりの技術開発の原動力となります実践的な人財、あるいは経営者を育成するために様々な教育機関、支援機関と連携しまして、きめ細やかな体系的な人財育成プログラムを実施しています。将来にわたって次世代産業を創出し、牽引できる人財、あるいは国際的に活躍できる人財の育成に、これからも中長期的な視点から取り組んでいきたいと考えています。

以上、当地域の現在の取り組みを紹介いたしましたが、当地域のこれから的新産業の取り組みは、飯田市単独ではなくて、南信州地域、三遠南信地域の広域的な連携によって着実に今も実を結んできております

が、これからもさらに連携をしていきたいと思っております。グローバル化が非常に進んでいる中で、今後ますます広域的な連携や産学官金の連携が求められてくると思います。各分野でそうした連携を進めまして、技術力や経済力を高めて、世界とつながり、あるいは世界に売り込んでいくというような形でグローバル化に対応していくことが、これから地域の持続的な発展の鍵になるのではないかと今感じながら取り組んでいます。

以上、発表とさせていただきます。ありがとうございました。



■意見交換

コーディネーター／

飯田市工業課 久保田優典氏

高田部長、ありがとうございました。

今のご発表を私なりにまとめさせていただきましたが、飯田市の産業政策ということで、3本の柱というのが出てまいりました。一つは「産業基盤づくり」、それから「人財の強化」、新産業の創出に結びつけた活性化プログラムという手法によって重点推進をしていくというのが最初です。

「地域全体の取り組み」として、コアとなる「南信州地域産業活性化基本計画」、さらにそこを広げた「三遠南信広域計画」推進をもって地域全体の取り組みにしていくということでした。

計画の推進母体である「公益財団法人南信州・飯田産業センター」の役割のご報告

があつたと思うのです。この役割強化を通して、広域ネットワークを広げていくというようなお話をございました。

最後は「新産業の育成支援」ということでした。ご紹介にありましたように、<航空宇宙産業クラスター>と<メディカルバイオクラスター>、それから<環境産業>といった取り組みのお話をございました。さらに、飯田産業技術大学を活用した人財育成と相まって進めているというふうなご説明ではなかつたかと思います。

それでは、意見交換に移らせていただきます。

今回は、事前に参加される皆さん方にアンケートをさせていただきました。限られた時間ですので、3点に絞った報告から進めさせていただきたいと思います。

まず、「地域産業に活力を与える取り組み」が一つ目です。次は「人財の育成、確保について」に関する課題と解決策が二つ目でございます。

三つ目は「大学、あるいはその教育研究機関」について。先ほど産官学金というお話をありましたけれども、これらの連携という視点でご意見をいただきたいと思います。

それでは、まず一番目の三遠南信地域で行われている「地域産業に活力を与える取り組み」について把握してまいりたいと思います。

最初の発言を豊橋商工会議所会頭、吉川さんからお願いしたいと思います。

豊橋商工会議所 吉川会頭

今、お話をありました三遠南信の連携の前提といたしまして、地域が自立をしていくということで、東三河では、3商工会議所と13の商工会が昨年の4月に産業振興を図る広域連携組織としまして「東三河広域経済連合会」を設立しました。現在は広

域観光、人財の育成、ものづくり産業の振興プロジェクトに取り組んでいますので、三遠南信、特に東三河について中心にお話をさせていただきたいというように思っております。本日、本多新城市商工会長と、そして、お隣には河合田原市商工会長もおみえになりますが、私どもと東三河広域経済連合会で一緒にやっている皆様方ですので、最初にご紹介をあわせてさせていただこうと思っております。

我々は、いろいろなプロジェクトを通じまして、地域の自立ということを考えているわけですが、これは地域のあらゆる資源の総合化、そして融合化をいたしまして広域連携を進め、次の時代に対応した東三河広域経済圏の構築を目指していくというものです。個々のプロジェクトのお話をする前に、これらを立ち上げました理由について少しお話をさせていただきたいと思います。

東三河広域経済連合会においては、先ほどもお話がございましたように、近年はグローバル化によります産業構造の変化、人口の減少、そして、少子高齢化などにより国内需要が低迷した結果、雇用や所得の減少が見られておりまして、これからは人口増加を背景とした経済成長を見込むことは厳しいだろうというように考えております。

そこで、我々は具体的なプロジェクトを立ち上げるに当たり、先ほども申し上げましたように、地域独自の発想を基本としまして、地域の個性や多様性をどのようにして引き出していくかということが重要であると考えました。その上で創造性や感性に価値を見出す新しい地域づくりの発想に立ちまして、地域主権であります企業、人材、資源の融合により地域の経済活動を活性化していく、そういう必要があるという認識に立ち、このプロジェクトを推進するこ

ととしました。

それでは、これから本題に入らせていただきますが、産業活性化の取り組みということですので、関連します二つのプロジェクトについてご紹介をさせていただきます。

一つ目としては、「自動車産業ブランディング化プロジェクト」についてということで、お隣にいらっしゃいます田原市商工会の河合会長が責任者としていろいろとおやりいただいている。我々は、全国1位の製造業出荷額の規模を持つ愛知県の中でも、輸送機械産業の10%以上が東三河地域に集積しております、自動車産業につきましては、田原市を中心に関連企業が多く立地しております。そして、豊橋市は外資系自動車企業の立地集積が日本一の地域です。蒲郡地域も含めました三河港臨海部においては、日本のトップクラスの自動車輸出入拠点となっています。

このような自動車産業の集積を生かしたビジネス機会の拡大、そして、人財育成を図っていきたいと考えております。ビジネス機会の拡大ということですが、自動車産業は非常に高い生産性がありまして、これを地域の製造業やサービス産業等の他産業に波及させていくために、企業群系列の境界を超えたオープンな連携を進めることにより、ビジネス機会の拡大につなげてまいりたいと考えております。

また、会員企業の製造現場の中核的人財の育成・強化に向けまして、ものづくりのベテラン技術やノウハウを学ぶことができる企業間交流の機会創出も目指しております。

次に、二つ目としては、「健康な地域社会創造プロジェクト」というものを今、考えております。ヘルスケア産業は、先ほども少しお話が出ておりましたが、今後の高齢化が進展をしていく中で、新たな主要産業として一層の成長と雇用の創出が見込

まれ、地域における新たなサービス産業やものづくり産業を育成させる絶好の機会であると捉えております。

蒲郡地区には、光学、医療機器、再生医療製品、医薬品等の健康長寿に関するヘルスケア産業の集積があります。こうした地域特性を踏まえ、東三河地域の多様な資源との連携により、ヘルスケア分野の新産業の創出やヘルスケアツーリズムを展開しまして健康長寿地域を形成していきたいと考えております。

こちらのほうは、具体的に動き出したところですが、蒲郡商工会議所の小池会頭に担当していただいております。

ヘルスケア分野の新産業の創出については、蒲郡地域の再生医療や先端医療分野を牽引する企業の業績を核としまして、新たな企業や研究機関の誘致、健康医療分野に关心をもっている地元企業とのマッチングにより、ヘルスケア産業の創出の集積を図っていきたいと考えております。

このような取り組みを通じ、東三河地域の温泉や食品等の地域資源を効果的に取り込みながら、産業振興の面からも健康長寿地域の形成を目指したいと考えております。

ヘルスツーリズムの展開につきましては、ドイツでは温泉や自然資源を利用した健康プログラムが医療保険制度によって進められており、こうした事例研究を進めながら、若者、女性、高齢者、外国人など国内外の誘客ターゲットに応じた温泉療養体験、自然体験、農業体験、そして、スポーツ体験など、バラエティーに富んだ健康旅行プログラムを提案していきたいと思っております。

地域経済の発展と成長を獲得していくためには、基幹産業であります製造業や地域特性を生かした観光などのさらなる集積、高度化を進めるとともに、それを担う地域に根差した人材の育成を図っていく必要が

あり、地域間競争を勝ち抜ける競争力の強化も図っていくことが大事であると考えております。

コーディネーター／

飯田市工業課 久保田優典氏

吉川さん、ありがとうございました。本当に多岐にわたったご説明をいただきました。特に東三河広域連合のお話ですか、二つのプロジェクトについてご説明いただいたので、非常によくわかる内容だったと思います。

この件について、ご質問等もあるうかと思うのですが、只今、お話を出ていました河合さんのお話を少し伺ってみたいと途中で思いつきましたので、田原市商工会の会長でいらっしゃいます河合さんから、特に「プランディング」のお話がございましたので、ご発言をお願いしたいと思います。

田原市商工会 河合会長

先ほど吉川会頭から全体についてのねらい、東三河広域経済連合会としての進め方ということはご説明いただきました。

私からは、最初にお話がありました自動車産業のプランディング化というのをもう少し詳細に説明をさせていただきながら、今、どの程度まで進んでいるかということを報告させていただきたいと思います。

この話の始まりというのは、三河港は東三河にとっては宝と言われていますけれども、この三河港は大きな特色を持っておりまして、先ほどお話をありましたように、田原市にトヨタ自動車の田原工場、それから、湖西市のほうからスズキさん、そして、蒲郡地区からは三菱自動車がそれぞれ海外とか国内ですけれども、出荷をされております。それから、輸入自動車につきましては、世界の車のほとんどの種類がここに入荷されておりまして、確か5年連続で日本

一の輸入量を誇っております。その特徴ということでいきますと、自動車に特化されたというか、そこに大きな特徴を持った港ということで、この東三河にとって自動車産業というものを基地として使わない手はないというのが最初の始まりです。

そして、このブランディング化の二つのねらいということで、一つは、自動車産業というのは多くの裾野を持った縦社会の企業群を持っておられます。それが、輸入自動車も含め国内の主なメーカー関連の企業もたくさんあるということで、それを縦の社会でつなぐのではなくて、横のつながりという形で新しい技術、新しいチャンスというものをこのブランディング化の中でつくっていくことができればという形で考えております。

そして、もう一つの大きなねらいですけれども、今までの観光というか、これから地域の活性化のためにはどうしても交流人口を増加させていかなければいけないという話の中で、特に今までの観光とは違う産業観光という部分に力を入れていきたいと思います。例えば、温泉があるから、こんな特産品があるから集まるということではなくて、その切り口を自動車として、自動車産業を前面に出すと、世界中から人が産業観光として集まっていただける可能性があるという想定の中で、いかにして産業観光していくかというところが、今回、中心的な活動になっております。

その参考になっておりますのが、ドイツにありますヴォルフスブルクの町です。そうしたところで進んでおりますカスタマーセンター、それから、その他のあらゆる車をきっかけとした顧客誘致の活動というのを参考にしながら、この地域ができるものを、今、トヨタさんにも入っていただいて、そういう形の会議を進めさせております。

ですから、大きくはその二つのねらい、

技術のクラスター化と、それから産業観光を自動車というものを切り口にアピールできたら、この地域に対して大きな出荷事業費の向上を図れるということで進めております。

コーディネーター／

飯田市工業課 久保田優典氏

ありがとうございました。

今のご報告では、物流の出入り口としての港湾を持った強みがあり、そこに「車」を作る自動車産業の企業群がある。その出入り口を活かして、観光産業の資源として新たな展開へと広げていく。

それから、交流人口という視点での話がありましたけれども、これも非常に新たな産業としては可能性があるというご説明だったと思います。先ほど吉川さんのお話にも「ヘルツツーリズム」に着目した次の産業への流れというものが大きく示唆されていると感じました。

次は、浜松商工会議所の御室さんにお話をいただきたいと思いますが、今、前段でお二方のお話がありましたけれども、関連することも含めまして、ご報告をお願いできたらと思いますので、よろしくお願ひいたします。

浜松商工会議所 御室会頭

三遠南信地域というものは、古くから人・もの・情報、この交流がずっとありまして、ネットワークをずっと形成してきたのではないかというふうに思っています。平成6年から、この三遠南信サミット、これが毎年3地域の持ち回りで開催をされまして、行政、それから産業界、住民レベルで定期的な交流を図っているわけですが、平成20年には地域の共通ビジョンとして三遠南信地域連携ビジョンをまとめ、それを具現化する活動を展開しているわけです。

また、平成22年の3月には企業立地の促進等による地域における産業集積の形成、また、活性化に関する法律に基づく基本計画である、三遠南信地域基本計画を策定しまして、国の同意を得て、平成26年度末までの5年間にわたって、新たな産業、いわゆる輸送用機器の次世代技術産業、それから、健康医療関連産業、新農業、光エネルギー産業といったものの集積と基幹産業化を目指して取り組んでいるという現状であります。

ここで、こうした中から幾つかの具体的な例を紹介させていただきたいと思います。

ただいま申し上げました計画に掲げる目標を達成するために取り組みを推進しているのが三遠南信クラスター推進会議というものでございまして、構成メンバーは浜松商工会議所、豊橋商工会議所、株式会社サイエンス・クリエイト、公益財団法人南信州・飯田産業センターであります。関東経済産業局の支援を受けて、遠州地域を中心に「次世代輸送用機器産業」・「光・電子産業」・「健康医療産業」の三つ、東三河地域では「新農業」、南信州では「航空宇宙産業」ということで、五つのクラスタープロジェクトにおきまして、県境を越えた連携による新たな付加価値の創造、新産業の創出を目指して、ビジネスマッチングを中心、今、諸事業を展開しています。

いずれの分野もこれまで地道に取り組みが行われてきたところであります。既に相当なノウハウの蓄積もありますし、技術的な研究などもかなりのレベルで進んでいますと認識しております。

過去2回、3地域のクラスター参加企業が東京の大田区において関東近郊の川下企業と販路マッチング交流会を開催しまして、その成果として、おおよそ1,000万円の商談も成立したという実績もありますし、健

康医療産業クラスターにおいては、医工連携の研究開発によって内視鏡の手術ナビゲーターという画期的なシステムが製品化され、市場の参入も今、進んでいるということです。

また、航空宇宙産業クラスターでは、クラスター参加企業による共同受注グループも発足するなど、着実にビジネスベースへの展開が今、進んでいるという状況です。

加えまして、浜松地域においては、新たな産業の創出と既存産業の底上げを図るために、浜松商工会議所では平成22年度から「浜松地域新産業創出会議」、これを社内に立ち上げました。この内部には五つの研究会、具体的には、「宇宙航空」、それから「医工」、「農商工」、「光技術」、「輸送用機器」があり、この活動を中心として、ものづくり中小企業の既存技術の高度化、あるいは高付加価値化に資する事業を展開しまして、関係機関との連携も強力に今行っているところです。

今後は、こうした取り組みをさらに進めで新たな市場を生み出して、いかに企業の直接的な売上、トップラインに結びつけられるのかということ、あるいはまた雇用の創出につながることが求められるわけですが、そのハードルというのは現実的にはまだまだ高いのではないかというように思っております。

産業振興のあり方としては、短期あるいは中期、長期という時間軸で考えていく必要がありますが、三遠南信地域のクラスターの活動の取り組みにおいては、それぞれのプロジェクトがゴールをどこに設定するのかということを明確にして、スケジュール感を具体化しながら製品の可能性を判断していくということも必要になってくるという認識を今現在持っております。

**コーディネーター／
飯田市工業課 久保田優典氏**

ありがとうございました。

地域連携ビジョンの概要として、五つのクラスターというお話をいただきました。

具体的な内容の取り組みで成果がどのように上ったかという評価も必要だとされた点、最後に非常に重要なことをおっしゃったなと思います。というのは、短期、中期、長期の施策がありますけれども、どこに目標を置き、具体的にどのような方法でだれが主体的に進めていくかというような、取り組みの幹になる部分の評価もそろそろ必要ではないか。そのご指摘だったと思っております。

今、お三方に発表していただきまして、最後に、豊丘村村長さん、下平さんにまた違う視点から、この地域産業に活力を与える取り組みということでご報告をお願いしたいと思います。



豊丘村 下平村長

豊丘村というのは、この飯田市の天竜川の向かい側、反対側の竜東というところにありますて、いわゆる農村ということになります。人口7,000人、それから、距離でいいとすると、こここの飯田から車で15分ぐらいのところです。

皆様ご存じのとおり、9月18日にはJR東海がリニア中央新幹線環境影響評価準備書というものを出しまして、路線と駅の場

所が確定しました。2027年、今から14年後には、まずは東京－名古屋間の営業を開始、その後、10年後くらいには東京－大阪間の営業を開始というような流れになっております。

東京－大阪間を67分で結ぶということですから、東京、名古屋、大阪の日本の大都市がリニアというツールを使って、おおむね1時間で結び、それを日本経済の発展の礎にするという大国家プロジェクトだと思います。そのど真ん中にこの飯田下伊那が入ったということの中で、さあ、どうしようということあります。

これをひっくり返してみると、東京、名古屋、大阪、この都市圏の人たちがこの飯田下伊那まで、自宅を出てから多分2時間以内に着ける方々が日本全人口の半分近くはいる、もしかするとそれ以上いるということあります。そこへいよいよ三遠南信も乗り込んでいく。物流も確保できる。それも日本最大の製造品出荷額を誇る東海地域から入って来られるということです。

その中で、まずは将来どういう展開になるのだろうということを私なりに簡単に予測はしているのですが、リニア中央新幹線が開通することにより、品川まで40分、品川から16分で羽田空港まで行くことが出来ます。名古屋まで20分、名古屋からセントレアまで40分で行けるという、そういう形になります。つまり、ここは海外から訪れても、あつという間に来られるところになり、かつ都市部ではなくて、すごい田舎だということあります。この伊那谷の持つすばらしい自然と農業が織りなす日本人の原風景というものを大事にしながら、日本国内のみならず国際的にも売り出していこうと考えています。そのことによって、将来もしかしたらIBMの頭脳集団がいるインドのバンガロールや、シリコンバレーみたいなところになれる可能性もありますし、

なっていかなくてはいけないと思っているところです。

今現在では飯田下伊那というの経済の規模は小さいですが、20年、30年後には、「浜松や豊橋の皆さんに三遠南信で飯田とつながっていてよかったなと思っていただけるようないい地域をつくり出していかなければいけない」、そういうつもりでいます。

その中で、そうは言っても、まだまだ13年先の話であります。現在、農業が織りなす日本の原風景がすばらしいと言いましたけれども、実は農業はへばりかけています。高齢化、それから、後継者不足により、加えて鳥獣害の被害もあるなどして、田園や果樹園が、耕作する人がいなくて山に戻っていき始めているところもあります。農業を何としても守らなければいけないと思っています。豊丘村としましては、昨年、農業を守るために、農業の6次化を村としてまずはスタートしました。商工農連携により新たなブランド品をつくることを考えました。豊丘村はもともとナシ、桃、それから、マツタケと、すばらしい農産品をいっぱい持っております。それを農業で生産するだけではなく、やはり製品開発や販売まで行うようにする。そのためにどうするのだということで、今、豊丘村としましては、2年目に入りましたて部会を三つに分けたりして、40人、50人の人たちみんなで新しい商品を考え、新しい売り方、新しい食べ物などの検討を今必死でやっています。

先ほど述べましたように、この豊丘村、それから、飯田下伊那に大都市圏から1時間半から2時間以内でたくさん的人が押し寄せてこられるというときに、この地域において、例えば、群馬県川場村の田園プラザみたいなもの、それから、三重県のモクモク手づくりファームみたいなものを、規模としてはその半分でも、3分の1でも

いいです。まず、そういうものを何とかつくり出してお客様を迎える。農業の体験をしたり、泊まったり、それから、いろいろなおいしいものを食べたり、買ったり、そういう体験をするところを何とかしてつくることが重要だと思う。

ただし実は、このことは非常に難しいことです。行政が行うことというのは、基本的には、幾らお金を使えば何メートルの道ができる、橋ができる、福祉に幾ら使えばこれだけの福祉ができるということが答えとして必要となる。この6次産業化のことにつきましては答えがありません。しかしながら、難しいからといってやらなかつたら、トライしなかつたら何も始まりません。豊丘村は、地域の活力向上のために「スタートする」ことから始めております。今年2年目ということで、いよいよどういう組織が推進役になるべきかという調整をしており、これまた非常に難しいことなのですが、それでも、肃々と頑張っていきたいと思います。

コーディネーター/ 飯田市工業課 久保田優典氏

ありがとうございました。

今のお話にもありましたように、リニアが14年後ということで、先を見据えた取り組みを肃々とされていると。その中で「農商工連携」で6次産業化のお話がありました。これは豊橋地域でも事例報告いただきましたけれども、従来、農は農というような狭い産業分野でやってきたところから範囲を広げ、事業をより高次元化していくためにはどうしても産業分野間で連携する必要があります。

豊丘村だけではなく、今後の全体の広域の取り組みとして、こういうところが切り口となって横に広まっていくと、あるいは先進でやられていることもあると思います

ので、お互いに学び合うというようなことが非常に重要ではないかなという感じを持ちました。

N P O 法人三遠南信アミ 中野理事

浜松に拠点をおいておりますN P O 法人三遠南信アミの中野と申します。

産業と人材育成というテーマですけれども、私どもは、この三遠南信地域の中山間地の過疎地域において、まちづくりなどのお手伝いさせていただいております。産業・経済といったときに、大きな経済という視点で今、ご発表があった飯田市の産業など、そういったものはとても大切なテーマだと思うのですが、もう一方で、暮らしのもととなる部分、小さな経済といいますか、そういったこともとても大切なことかなというように感じております。今、豊丘村長のお話にもあったように、その中山間地域における6次産業化というのはとても重要なテーマだろうと思っております。

こうした中で、できるだけ三遠南信地域にあるすばらしい地域資源である農林水産物の物流を活性化するために、この南信州地域、それから、東三河地域、遠州地域で、力不足ですけれども、その販売する機会ですとか、PRする機会を私どもつくっています。ものが動くことによって、小さいけれども仕事をつくっていくということも大切な視点かなというふうに思っています。

それから、人財育成という視点で最近感じているのが、若者たちを中心に非正規雇用の割合が非常にふえている。もっといえば、非正規雇用どころか、アルバイト、パート、ひきこもりというような人たちが非常に多いというのを、実は都市部を中心に感じております。そういった人たちがいかに就業し、労働していくかというあたりで、この三遠南信地域、中山間地域の中で新しい働き方と言えるものも創造していく

ものも大切なテーマなのではないかと感じています。

コーディネーター／

飯田市工業課 久保田優典氏

ありがとうございました。

アミさんのメルマガも時々拝見させていただいているのですが、今のお話のように、地域資源をいかに小さな経済の中で生かしていくかという視点は共感できます。人財育成含めてご発言いただきましてありがとうございました。

もうお一方、宮下さん、別な視点でご意見をいただけないでしょうかね。

有限会社燐燐 宮下代表取締役

人財育成のほうに関するかと思うのですが、農業法人を立ち上げまして、一緒にやる若いスタッフをいろいろな縁で募集しましたところ、意外と都会から若い人たちが来てくれまして、一緒に農業を営んでおります。ご存じのように、後継者不足が叫ばれていますが、地元の若い人々は地元の農業の魅力にはなかなか気づかない、生まれ育ったところの魅力に気づかないままではありますが、都会の若い人たちの中には、こういった伊那谷で農業をやりながら暮らしたいという思いの人が意外と多いなということを最近感じながら農業をやっております。

ですから、こういった三遠の皆さんと交流をもっと深めながら、松川町にはこういったおいしい果物がたくさんあるよというような、こういう両アルプスに囲まれた環境の中で果物を生産しながら生きていくことができるよというようなことも、どんどんそういう情報は発信しながら、地元の農産物を生産できるように守っていきたいなと考えたりしております。

**コーディネーター／
飯田市工業課 久保田優典氏**

ありがとうございました。

ここまで6人の方に報告やご意見を伺ったわけですけれども、最初の「地域産業に活力を与える取り組み」というところについては、これで一旦終わりたいと思います。

皆さんからは、特に産業集積、地域連携と言った重要なキーワードが出てまいりまして、それぞれ特徴のある取り組みをされていると感じました。

多地域から学ぶべきことが多くあるなという感じを持ちましたし、相互に連携を図れる具体的なヒントもあったと思いました。

それでは、続いて、二つ目のテーマであります「人財の育成の確保に関する課題と解決策」というところに論議を移してまいりたいと思います。

特に地域産業が持続的に発展するというためには、それを支える専門家でありますとか、人財、「ざい」は木へんの「材」ではなくて、「財産」の「財」だというお話がありましたけれども、その人財が必要です。勿論、創造性が豊かであり、アイデアもなくてはなりませんが。

人財の育成・確保は、これから地域にとって欠かせない要件だと思います。今、下平さんのお話にもありましたけれども、農業後継者が地元は余りいないけれども、外から見ると非常に宝だなというような話もありました。これは意味のある示唆だと思います。

継続して人財を発掘し、育てることは社会自体を維持していくために必要です。その際の課題と解決策について報告やご意見をいただきたいと思います。

磐田市商工会 野寄会長

「人財育成の確保に関する課題と解決策について」という課題ですけれども、それ

に当てはまるか当てはまらないかわかりませんが、私の思いを若干述べさせていただきます。

磐田市商工会は約1,900人の会員を擁している商工会ですが、やはり我々は自営業者の集まりでして、従業員数人ということの中で、なかなか人財が養成できないということが現実でございます。

それでも人財を養成していかなくてはならないということで、3、4点ほど活動項目を考えて活動しております。

まず1点目としては、磐田市の近くに理系の静岡理工科大学と、それから文系の静岡産業大学の2大学があるわけですが、その2大学とのいろいろな形での連携を模索しています。先ほど申し上げましたように、2名、3名の従業員いるだけの1商工会員で大学へお願いに行くということはなかなかできないものですから、商工会全体としてお願いをするという形をとって、若干の成果をあげているというのが現況です。

それから、第2点としましては、我々磐田、特に遠州地方は輸送機器産業が工業出荷額として非常に品質として高いわけですが、ご案内のとおり、円安、生産の海外移転等でどんどん大企業が海外に行ってしまう状況です。だから、その状況を手をこまねいて、「死を座して待つ」というわけにはまいりませんので、とにかく大企業の方もぜひ国内にいるという優位性を持っていただいて、我々も小たりとはいえ、技術力とか人的な資源を持って引きとめ策を講ずるということがまず一番の肝要なことだと思います。

しかしながら、海外移転の傾向というものは、これは避けられない事実ですから、できればこのような三遠南信サミットのように、全体の中で異業種の交流もこれから積極的にやっていきながら、産業の膨らみ、厚みをぜひつくっていきたいと思います。

それから、3点目としまして、行政の持つ企業情報の分析及び積極的な活用ということで、技術的な問題ではないのですが、官報から出ている具体的な話を二つばかりさせていただきます。

この出典は国土交通省ですが、2012年の観光宿泊者数の都道府県別全国ランキングというのがあるのですが、その第1位は、やはり4,488万人で東京です。そして、我々静岡県は1,995万人で全国4位を確保していますが、その中で、外国人の宿泊数はどうであろうかとこの出典を見ると、やはりトップは東京の765万人、それで残念ながら静岡県は10位で47万人です。やはりこれから外国の方々が観光でお見えになる中で、今はやりの「おもてなし」というのですか、それとか外国人に対する観光インフラがやや脆弱ではないかということで、この辺りをどうしたらいいのかというような点について、官の持つ情報を積極的に活用しなければならないと思います。

もう一点、一昨日でしたか、日経に載っていました。職業別の有効求人倍率について、ハローワークの出典だと思いますが、建設が2.4倍、介護サービスが1.85倍、情報処理が1.62倍、機械整備・修理が1.34倍、機械組み立てが0.31倍、一般事務が0.21倍というように有効求人倍率がなっているということは、これからの将来、自分たちが仕事・ビジネスを開拓する上で、どこにターゲットを持っていくべきかというのも、やはりこういう官の非常に透明性の高いものの資料を活用していくことが、大事ではないかと思っております。

これらの企業は若手を訓練することが一番肝要であろうと思っております。「未来塾」のような講座を開設して、将来への展望並びに事業展開の方向性を探し出すということを、産官学を含めましてやっていくことが重要ではないかと思っています。

ちなみに山口県では「やまぐち産業戦略アドバイザー」ということで、山口県出身の企業人などをアドバイザーとして、若者に、県内の心ある人に講座を開いているという事案もあるようです。やはり、これから将来、未来に向かって若手を育成していくということが肝要であろうかと思います。

コーディネーター/ 飯田市工業課 久保田優典氏

具体的な内容が幾つか出てまいりました。特に異業種交流という話の中で、産業の厚みというお話がありました。これは私も日々感じている点です。

というのは、1次産業、2次産業の推移、3次産業への移行が急速に進んでいます。就労人口で見れば「ものづくりの分野」は既に20%を切り、70%を3次産業が占めています。実際に産業構造の変化で従来産業から生み出される生産価値とのギャップが拡大し、それらをどういうふうに評価とは正をしていくか。地域の特徴を厚み（多様性）としてどのように取り込んでいくかというようなところが、産業視点で今後は大きな課題にあるのだろうなと思っております。

それから、官報のお話がありましたけれども、日々の情報として提示されるデータベースを十分に活用していないということにお気づきになったという点は非常にすばらしいと思います。

これは実際に「ハローワーク」だけのことではなく、情報としてのネタが随所に潜んでいて、そういうデータを基に政策的にどういうことをやっていったら良いかが見えてくるだろうと思います。

そこが要点です。どちらかというと、引き継ぎの前やったことをまた今年もやるというようなマンネリ化した施策の組み方に警鐘が鳴らされたと理解をいたしました。

示唆的な指摘でありましたので、そういうところに目を向けていきたいなというふうに思います。

阿智村商工会 藤倉会長

最初に、お礼を申し上げたいのですが、阿智村で観光事業の一環としてヘブンスそのはらというスキーフィールドがございます。ここが標高1,400メートルぐらいあり、グリーンシーズンが主なのですが、ここでナイトツアーや星空の観察会を今、展開中です。その事業の一環として七夕の日、7月7日に飯田商工会議所の副会頭を務めていらっしゃる多摩川精機の萩本社長にご講演いただきました。大変お世話になりました。ありがとうございました。その際に子どもさんに大勢聞きに来ていただきました。講演が終わった時点で、このときの質問の内容を詳しくは申し上げられませんが、10人の子どもさんから宇宙に関する質問がありました。私もこの質問を聞いて、当阿智村ものづくりや宇宙に関する関心が子どもたちには高いのかなというような感じを受けとめて、少しばかり安心したような気持ちになりました。

そういうことでありますので、今日は人財の育成というお話をありますので、まずご紹介させていただきますと、当商工会員を平成24年度と平成25年度に中小企業大学校へ派遣させていただいておりまして、その節は大変お世話になりました。平成24年度には3名の受講生が行っております。今年度は4名の方がこの中小企業大学校に行って受講しております。

それで、当商工会は、その後押しをするために1人当たり3万円を上限として補助金を支給しております。この講習について、10月の末に、その感想というか、レポートが届いておりますのでちょっと紹介させていただきたいと思いますので、よろしく

お願ひいたします。

「この研修を受けて思いましたことは、自分を含め、現状の商品ロスの金額を知らない人が多い。」・「せめて自分たちが製造にかかわった商品ぐらいは知っておく必要がある。そして、今後は月ごとに売上が大きい商品、ロス率を出して目標を定め対策を考え実施し、その結果、今月はどのぐらいロスを減らしたか向上率を出して、目に見える状態に進めていきたい。」・「不良伝票、記録を残しておくのも大事なことだ。」・「不良破棄の内容が明確に残っていき、対策が行われていく際の判断材料になると思う。」といった感想を持ったようです。簡単でありますが、報告とさせていただきます。

コーディネーター／

飯田市工業課 久保田優典氏

どうもありがとうございました。

人財育成ということで、中小企業大学校に村としてもそういう人財を派遣していくというお話をうけたと思います。ありがとうございました。

新城市商工会 本多会長

新城市は、先週の日曜日、全日本ラリー選手権の新城大会が行われました。年間全国で10カ所やるのですが、最終が新城で、2年目です。新城ラリーとしては10回目ということで、知事も巻き込み、トヨタの社長も巻き込みまして、社長自ら出してくれるようになりました。今回、県営の総合公園を使いました。今まで全く使ってはだめだと、なかなかやかましかった、規則のため使わせなかったのを知事の鶴の一声で使えるようにして、そこを会場にして、土日で4万人来ました。これを何とか一つの起爆剤として全国区に持っていくたい。いずれは本宮山スカイラインがありますけれども、

これもなかなかやかましい規制があるのですけれども、これも、そこを使えば世界大会が可能だということです。今、日本で唯一、北海道でやっています。それを新城に持つてこようという計画で、これには知事も乗り気で、トヨタの社長もその気になりまして、かなりトヨタが力を入れてくれまして、半分ぐらいのトヨタの重役が見にきていました。

新城市、第二東名、これは本東名になると思いますが、その新城インターができます。新城ラリーの世界大会に向けて、今、オリンピックの年に何とか合わせようという考え方を持っていますが、さらにそういうものを基盤にして、人の集まるところにビジネスチャンスがあると思うものですから、そのラリーを中心としてまちおこしをしようかと考えています。

二つ目が、新城がもう一つ日本一になったのは軽トラ市です。これはスズキの会長、たまたま私、ちょっと知っています、「スポンサーになってください。」といつて始まったことです。今、軽トラ市があちこちでできておりまして、今、コマーシャルでも「軽トラ野郎」なんて、あれも軽トラ市用のトラックというか、そこでPRしているみたいですけれども、会長自ら見に来てくれて、軽トラという意味がよくわからなかつたようですけれども、実際に見て、「なるほど、わかった」と理解してくれた。軽トラですと向こうが見えるんですね。普通のトラックだと向こうが見えない。シャッターを閉めていた商店街が日曜日でも開け出す。そういうまちおこしの一つ。これが一番、地域産業に活力与える。ラリーと軽トラ市。

ラリーがなぜできるかというのは、小泉さんが唯一いいことやってくれたのは特区です。新城はアウトドアスポーツの特区をもらいました。アウトドアスポーツでいろ

いろな、今、ツール・ド・新城もありますし、山登り、カヌー、ハンググラインダー等のいろいろな全国大会。どぶろく特区なんていうのが東北のほうにありますけれども、新城はアウトドアスポーツ特区をもらったおかげで、いろいろな規制緩和の恩恵を受けながらラリーもできるわけです。公道を走らせるのですから普通だとなかなかできないこと。今、林道を使うなど、いろいろな形でやっていますけれども、いずれは本宮山スカイラインを使って世界大会をそこまで広めていきたいなというように思っております。

私はこの三遠南信サミットの「技」というのは技術のほうかと思って選んだのですけれども、三遠南信サミットの一番メリットというのは、今日も東三河の商工会議所会頭のお二方がみえますけれども、私が悪いことで有名ですが、やはり遠州浜松のやらまいか精神に学べと言いたい。何で山を一つ境にしてこうも違うのかと思う。東三河人はそこへいくと、「やめまいか」が多いものだから、やはりやらまいか精神を学ぶ、こういう三遠南信サミットによって学ぶ、そして、南信州の人の真面目さ。やはりこつこつとやっていく。多摩川精機さんを代表として、今、もういろいろな集積産業が飯田市にあるわけですから、南信州の人に学べと。これは教育の違いかなと思うのですけれども、気候の違いはもちろんあると思いますが、やはり、そういう意味でこの東三河の人にはいい刺激になっていると思います。浜松と豊橋を比べるだけでもこうも違うし、本当に東三河にとっていろいろな面で信州、遠州の人に学ぶものが非常にたくさんあると、このように思っております。

**コーディネーター／
飯田市工業課 久保田優典氏**

ありがとうございました。

地域の活力ということで、最初のテーマにも踏み込んで全体的なお話を伺いました。ありがとうございました。

二つ目のテーマ「人財の育成・確保」についてご報告いただいたのですが、それぞれ地域性も含めて、うまく取り込んだり生かしたりというようなことを広域的に、あるいは分野横断的にやっていくべきとのことでした。また、先ほど情報収集のテクニックの指摘もされました通り、広域においての仕組みづくりということが急務になるのではないかということを痛感をいたしました。

磐田市商工会 野寄会長

先ほどの人財育成の中で大学との連携ということをお話しいたしました。会員企業の中で経営革新を取得している機械製造会社があるのですが、その会社が、防災機具として開発した発電機、ガソリンとLPGガス兼用の発電機であったのですが、性能評価をすることを当然外部に委託しなければならないといった中で、それを先ほど申し上げましたように、我々、静岡理工科大学と提携をして、交流会の中で「ぜひ性能評価をしていただけませんか」ということを申し上げましたら、「やりますよ」ということになり、具体的にここにあるのですが、発電機の性能評価をしてもらい商品化をしたという事例があります。やはり、今までのような性能評価会社に依頼するのではなくて、大学にお願いして産学連携をしていくという大きな成果が得られたのかなと思っております。

それからもう一つ、私申し上げましたが、磐田市に静岡産業大学というのがあるのです。こことも大学の教授等と交流会を開き

まして、経営学や財政部門に関しての講座の開設を商工会の有志、先ほど言いましたように、未来塾、若者を対象に交流会を通じながら講座を開設していただきたいということでお願いし、それも徐々に具体的な話になっているというところまで来ております。こういった意味で、我々のような小さな自営業者でも、学校と連携をしながら、行政の支援を受けながらやっていけるという一つの自信にもなった一例をご紹介させていただきました。

**コーディネーター／
飯田市工業課 久保田優典氏**

どうもありがとうございました。

まだほかに、こういった連携については多くの活動があると推測しています。もう少し内容を掘り下げて聞かせていただこうと思いましたけれども、恐らく他の大学さん、本日、ご報告はありませんけれども、恐らく色々な方面や分野で活動され、実績もあげておられるのではないかと思います。

平谷村 小池村長

今まで、皆さんの話を聞く中で、いかに人財育成が大事かなと痛切に感じたところでございます。私の村は本当に過疎で、小さな、人口も非常に少ない村でございます。以前は林業で栄えたということありますけれども、現在では林業が低迷する中で、私たちの先輩たちが観光立村ということで、すべてのことができるよう、温泉があり、スキー場があり、ゴルフ場があり、釣り体験のできるところもあり、また、パラグライダーで高い山から飛んでくる、そういうことをやって生計を立てているような村でございます。そんな中で、三遠南信が連携する中で私どもも人財育成、また、健康維持のために協力できたらいいかなというふ

うに感じておりますので、三遠南信連携がうまくいって、栄えて発展していくように願うところでございます。

**コーディネーター／
飯田市工業課 久保田優典氏**

ありがとうございました。

参加者の皆さんのお熱いメッセージをいただきましたので『まとめ』づらさもありますが、予定した項目3つについては、ここでご報告を終わらせていただきたいと思います。

私からは、この後に「分科会報告」の場がございますので、今までの「技」分科会での報告を簡単にまとめさせていただきたいと思います。

1点目は、3つの報告をいただいたのですが、取り組みとして、国内外からの人・もの・金が集まるような魅力ある産業、あるいは地域連携というような中で新しい産業の創出というようなことを図る必要があるということです。

2点目は、地域連携を深め、事業の発展や拡大を更に加速させていくことが必要だろうと思います。この時、人財をどうやって育てていくかということが大きな課題だろうと思います。そこに焦点を当て、県境を跨いで、お互いの地域が持っている有効な資源、あるいは大学、行政、団体等と結びつけていけるのか、連携した形仕組みをつくっていけたらいいのではないかということといたします。

3点目は、「SENA」の事業として円卓会議というものが設けられているようですが、そこに今回の分科会の議論を踏まえ、具体的に実施可能な内容をぶつけながら、それぞれの今日ご発言いただいた中のエッセンスを具体的なテーマとして上げていただくということを3つ目にしたいと思います。

以上ですが、結びの前に、せっかく機会をいただきましたので、お隣にお座りいただいておりますお二方にご意見をいただきたいと思います。

「飯田の航空宇宙プロジェクト」「メイカルバイオクラスター」というお話を高田部長からありましたけれども、この分野で中心的に活躍をいただいている飯田商工会議所の萩本副会頭と、先ほどのシンポジウムでも出席されておりました延岡市の首藤市長に分科会のご感想をお願いします。

まずは、萩本さんからお願ひします。

飯田商工会議所 萩本副会頭

皆さんの貴重なお話を伺いしながら、そのことを含めて、そして、日ごろ私の思っていることを少しお話しさせていただきたいと思います。

今日は2つのテーマで、1つは大学ということですが、広くいえば人財育成という観点でお話があったのだろうと思います。最初に、新産業創造のための取り組みというテーマだったと思います。ただ、これは私自身現場におりますので、ひしひしと日ごろ感じているわけですが、言うほど簡単ではありません。物すごく時間がかかります。これもまたたびたび言われます産学官が連携したら何かができるのではないかと幻想のように言われますけれども、決してそんなに簡単ではありません。結局、基本的には、この産業を論ずるのではあれば、産が主体でなければ何事も起こらないということを我々は承知をしておく必要があるだろうと思います。官学がどう仕掛けてきても産が動かなかつたら何も起こらないという意味では、産をどう動かすのか、あるいは産がどう動くのかということがとても大事になると思います。そして、技術には突然変異というのはなかなかございません。ですから、穏やかな移転を仕掛けていく以

外にないのだろうというように思います。そのときに、その移転をするわけですけれども、しょせん突然変異はないので、コアコンピタンスだとかキーテクノロジーという言葉があってご存知のとおりなのですが、そこをしっかりと踏ました上で、その技術をどういうふうに展開をしていくかというようなシナリオがとても大事になるだろうと思います。

そして、そのときに最も重要なことは、粘り強くリーダーシップということが鍵になるように思います。そしてまた、意外と若手のアントレプレナーというのが実は地域には埋没しています。そういう人たちを地域から発掘するということがとても大事だと思います。私たちは、今こうして商工会議所だとか権力を持った人たちがミーティングをしているのですが、こういう人にある意味では疎まれている人たち、あるいはこういう組織に飽き足らず排除されている人たち、そういう人たちをどう地域社会が発掘をして、そういう人たちの力を引き出すか、ここが次の時代をつくる上でのとても大事な要件になるだろうと私は思っています。

その次に今度は2番目に、先ほど田原市商工会の会長がおっしゃいましたけれども、垂直分業から水平分業だとか、そういう関連するお話なのですが、私は、これだけ新興国の急成長がある中で、日本の産業の大部分は下請け型の中小企業だと思っています。この構図をどう転換をしていくか、ここに一つのポイントがあると思います。それは、河合さんがおっしゃったように、まさしく垂直分業で、高度成長の時代はそれがとてもぬるま湯で心地よかったです。それで生き延びてきましたし、それが高度成長ですから企業の成長にもつながったのですが、今からは残念ながら新興国の大変な急成長がありますので、下請け型の中堅企業、

中小企業では、それと闘わなければいけないという構図をどのように逃れていくかといつたら、やはり自立をしていくしかない。下請け型企業から自立型の中堅企業を目指す、そこへポイントを持っていかないとだめだと思います。それを社会全体で育成していくような状況が必要だらうと私は思います。

ただ世の中には、インキュベーションセンターみたいなものをよく行政はつくり上げます。要するに、産めば育つだらうという期待のもとにインキュベーションセンターをつくるのですが、そんなことで育つことはありません。皆さんのお子様のことを考えれば当然だと思うんです。産めばそのまま育つかというと、その後、お乳をやつて、保育器で育てて、保育園にやり、小学校にやり、高校にやり、15歳、18歳にならなければ一人前にならないわけです。時間がかかるということと、その育てる仕組みというものをよほどしっかりとつくっていかないと、それは実現できなかろうというふうに思います。

浜松の御室会頭さんがおっしゃいますけれども、ゴールはそういうふうにして決めて、しっかりとゴールに向かって仕掛けをつくっていくということがとても私は大事だらうというふうに思います。

人財育成について少しお話をさせていただきたいと思います。

私は、この人財育成についていえば、重層的・多面的なシステムがとても重要になるだらうと思います。3ステージに分けて考えたいと思います。まず幼年期、そして、小中学校あるいは大学までも含めてかもしれません、さらに成人になってからと、3ステージについて考えたいと思うのです。まず幼年期。昔は親のお尻について親の働く姿を見続けて成長しました。今の親は、全くそういうふうに子供たちとともに仕事

をするという場面を見せていませんから、子どもたちにいきなり、「職場に入って仕事をせよ。」と言うのは、それはなかなか無理です。ということは、幼年期と現実の社会といいますか、生産現場をどういうよう見せて育てるかということにもっと私たちは苦心しないといけないのではないかなというように思います。

先ほど阿智の藤倉会長がおっしゃいましたけれども、夢を見させれば子どもたちは頑張ると思います。私、あのとき宇宙の話をしたのですが、子どもたちがすごい質問をしてびっくりしました。ものすごく宇宙に関心があるんです。すなわち、関心のない私たちの現実を幾ら説明しても、子どもたちを感動させることはできなかろうと思うんですよね。例えば、これが高校、大学に行きますと、今、大学の学科はどんどん名前が変わっています。もう既に古い話なので言っても仕方がありませんが、私たちが卒業したときの学科名なんていうのは既にないわけです。もう全くわからない学科で今は募集をしている。なぜ大学がそのように変わったかといえば、そういう名前をつけてやらないと若い人たちが来ないので。学生を集客するために、大学は必死になつて若い人たちが興味を持つ名前をつけて集客しているんです。

では、私たち産業界は一体全体、若者たちにどれだけ興味のある仕事を提供しようとしているのか。あるいはどういう宣伝の仕方をしているのか。こういうことをしっかりとと考えないといけないと思います。

産業の世界も同じように、やはりそういうふうにPRをしていく、そういうふうに事業を転換していくことがとても大事だと思います。磐田市の野寄会長がおっしゃいました、学生と現場との間のミスマッチが雇用の情勢の中にあるのではないかというご指摘だったと思います。そのとお

りだと思います。

この長野県の北のほうに川上村という農業主体の村があります。その藤原村長とお話ししました。「若い人たちはいっぱい来るんです。うちの村は求人で困るということはないんです」とおっしゃっています。すなわち、意外と若い人たちの感性は高いんですね。その高い感性を持った若者をだめにしているのは私たちの現実ではないのか。その若い人たちを育てるように社会そのものが変わっていかないのといけないのでないかなというふうに思います。

今度は成人になってからのことを少し申しますけれども、大学なり、小学校や中学校という学園の中ですべてをわかって卒業してきてすぐに役立つなんていうことは到底あり得ないですから、現場にもし有効な人材を得ようとするならば、入社させてからしっかりと教育する、その再教育こそ必要だと私は思います。ですから、社員になってから社内留学をさせて勉強してもらう。先ほどもお話がありました、地域に何とか大学があるとおっしゃいました。地域に何とか大学があつても、地域の産業と結びつくことはまずあり得ません。すなわち大学が地域にあるから、そこと何か結びつけばいいという幻想は捨てるべきだと思います。むしろ、その産業というのは、幅広く世界じゅうを探し回っても、ぴったりフィットする相手というのはそうたくさんはないわけです。でも、そういうところを探し出して、いかに整合させるかというのが産業を育てる上でとても大事になるわけですから、地域を論議すると、地域の大学と連携したらしいというふうにすぐに短絡的に話すということはよほど注意をする必要がある。もちろんそこに専門の方がいらっしゃらないとは申しませんけれども、そこはしっかりと見極める必要があるだろうし、逆に、そういうふうに近いということ

だけを理由にしないで、幅広く世界じゅうから自分の技術と整合する人たちを見つけて、集めて仕事に結びつけるということが大事だと思います。

たまたま飯田には大学がありません。キャンパスがないからキャンパスレス大学を考えようということで飯田産業技術大学という発想を持ちました。すなわち日本中から、世界中からこれと思う先生を集めてきて、そして、架空のバーチャルな大学をつくればいいじゃないか。この地域に合った、そういうコースをつくり上げればいいではないかと思う。これが一つのこれから発想ではないか。キャンパスがあって、そして、そこに勤める教員がいて、その先生たちに全てを地域が期待するという考え方は、これからは余り通用できないのではないかというように思いました。

延岡市 首藤市長

今日は、皆さんのお話をいろいろと伺わせていただき、大変感銘を受けました。これだけ広い地域において、それぞれの商工会議所あるいは商工会の皆さん方が中心となりながら、こういう形で連携をしておられるということ、非常に勉強になりましたし、本当に感銘を受けたところでございます。

私からは、アドバイスをなんていうおこがましいことはできませんけれども、私たちの地域のことをせっかくですから少しお話をさせていただいて、何か皆さんにとつてご参考になる点がその中に少しでもあればというように思います。

先ほどのパネルディスカッションのときにも申し上げましたけれども、延岡市は旭化成の発祥の地でございます。旭化成は、昔は繊維を中心でしたが、最近は随分事業構造が変わってきて、むしろ半導体とか、あるいは住宅、建材、メディカル産

業関連等々、非常に多角化してきています。昔、繊維が盛んだったころは、延岡市内にレーヨン工場やベンベルグ工場といった工場がたくさんありまして、数十年前は社員数が2万人近いときもありました。今はどうかといいますと、旭化成プロパーの社員数でいえば3,000人ぐらいです。旭化成100%出資の子会社の社員さんを含めても6,000人足らずということで、随分雇用ということでも減ってきました。そして、その中身も、旭化成が中核になりながら地場の協力企業が相まって、延岡の製造業を形づくってきたわけですけれども、随分姿が変わってきた。というのは、もちろん社員数が減ってきたということもありますけれども、構造が変わってきまして、繊維産業だったころは地場の中小企業がいろいろな形で中核企業と結びつきがあったんですね。

例えば、新しく設備更新をするときには、地場の会社がいろいろとその仕事を受けることができましたし、あるいはメンテナンスも地場でできていましたが、もう随分変わりました。例えば、半導体工場ですと、ニコンとかキャノンみたいな会社から運ばれてきて、どんと据えつけられて、そういったもののメンテナンスは地場の中小企業では基本的にはできないわけですね。ですから、その中核企業と地場企業との結びつきというものが昔と比べるとさま変わりしました。ただ、工業製品出荷額自体は余り変わっていません。昔2万人ぐらいいたころも今もそうですが、年間出荷額3,000億円弱というところで推移をしています。

ですから、そういう金額ベースで見ると余り変わらないのだけれども、その中で働く雇用の場がどうなったかということでいえば大きく変わったし、また、地場の企業との結びつきというのも大きく変わっていました。

私たちが今思っていますのは、そういう古い産業の中で残すべきものはしっかりと残していくかなければいけないということです。例えば、技術の伝承という意味では、金属加工、あるいはその機械加工といった分野で非常に技術集積がありますので、そういう人たちの技術を伝承していくことが必要だと認識しています。例えば、様々な溶接技術があるからうと思いますが、そういうものをいかに伝承していくかということが非常に重要だし、その中で、我々も行政として入ってマイスター制度なんていうものをつくって技術の伝承に努めているということは一つあります。

もう一つ、ただ、その古いものがそのままではもう残っていけないわけですから、新しい形の産業に変わっていく、あるいは新しい形の産業を興していく必要があります。今我々は、今日お話ししましたように、メディカルバレー構想というようなものを持ち、メディカル分野を産業振興していくとしている中で、もちろん旭化成メディカルや東郷メディキットといった既存の中核企業はある程度放っておいてもいいのだけれども、そういうところに、できれば私たちの立場としては、地場の中小企業に参入していってほしいと願っています。それでは、こうしたメディカル産業に地場の会社が参入していくに当たって何が必要かと考えたとき、もちろん人財育成というようなことも含めて、そういうところに行政としての関わりというものが出てくると思しますし、必要ではないかというように思っております。

今、萩本社長から、行政の立場にある私たちにとっては非常に耳の痛いお話もありました。行政が中心になってやってもうまくいかないよと。産学官連携ということはよく言われるけれども、産業界が中心になつていかないうまくいかないということ

は、私たちももう身にしみて感じております。産学官というと聞こえは良いのですが、最後に誰が責任をとるのかということが明らかになっていない。最後に誰が熱意を持って、その形をしっかりと、地べたを這つても産業を興していくとするのかというようなところ、そのところについてお互いの思いがいい加減だとなかなか良い結果につながっていないだろうと思います。やはり産業ですから、その主体となるべきは事業者の方であり、事業者が熱意と責任を持って、ある意味では使命感を持って取り組んでいくことが大前提です。それに対して行政としては、例えば研修、セミナーの場の提供ですか、様々な情報提供や環境整備ということで関わることができる部分があるのかなと思いながら、今、取り組んでいるところでございます。

なかなか私どものところも、新産業というものが目に見える形になつていない状況にありますが、具体例が1つ2つ出てきている部分もありますので、そういうところを足がかりにしながら、今後もまた頑張っていきたいと思います。

コーディネーター／ 飯田市工業課 久保田優典氏

ありがとうございました。萩本さん、首藤さん、ありがとうございました。

限られた時間でありますけれども、皆様のご協力によりまして、円滑でスムーズに意見交換ができたかなと思います。お礼を申し上げます。

以上をもちまして、「技」の分科会を閉会とさせていただきます。

6 「風土」分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2013 in Minamishinsyu

「風土」分科会では、「『あるもの探し』で発見！三遠南信の底力！」をテーマに意見交換がなされた。

コーディネーター	財団法人 阿智開発公社	理事長	羽場 瞳美
報告者	天龍村柚餅子生産者組合	組合長	関 京子
行政	豊橋市	豊橋市長	佐原 光一
行政	豊川市	豊川市長	山脇 実
行政	田原市	田原市長	鈴木 克幸
行政	松川町	松川町長	深津 徹
行政	天龍村	天龍村長	大平 巍
経済	蒲郡商工会議所	蒲郡商工会議所会頭	小池 高弘
経済	泰阜村商工会	泰阜村商工会長	秦 和陽児
経済	喬木村商工会	喬木村商工会長	藤本 芳男
住民	三遠南信地域を学ぶ会	会長	仲井 政弘
住民	みらい企画 律	代表	矢澤 律子
パネリスト	九州経済フォーラム	理事	西座 聖樹

(敬称略)

■はじめに



コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

皆様、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました羽場でございます。本日、コーディネーターを務めさせていただきま

すので、よろしくお願いをいたします。

本日は、佐原豊橋市長を初め3市の首長さん、町長さん、村長さん、それから商工会議所、商工会、あるいは民間団体の皆様にお集まりを賜りまして、これから約1時間45分にわたりまして風土部会のワークグループを進めさせていただきます。

今日の主な流れですが、最初に前年度サミットの議論のまとめ、そして、今回のテーマについて、事務局から説明をいただきます。

次に、今日の基調報告でございますが、天龍村柚餅子生産者組合の関京子様より、「ゆべしづくりから三遠南信交流へ」というタイトルでご報告いただきます。

この講演を踏まえまして、今日のテーマでございますが、魅力的なタイトルになっております。『「あるもの探し」で発見！三遠南信の底力！』ということでござります。お手元の皆様の資料の封筒の中に三遠南信サミットのこの資料集が入っているかと思いますが、この50ページをお開きいただきたいと思います。また事務局から説明がありますが、ここに三遠南信のプロジェクトの全体図が書いてあり、私どもはこの中の一角を占めるわけです。それもあわせて後ほど説明があろうかと思いますので、私たちのミッションに沿って、この中の議論をしていくということになります。

それでは、事務局より説明をお願いいたします。

事務局

それでは、前年度の議論について、ご説明します。

前年議論でございますが、大きくは内容を三つのポイントにまとめることができます。

まず、その一つ目ですが、従来の丁寧な口コミに加えて、B－1 グランプリなどに代表されるイベントやフェイスブックなどを利用した新しい情報戦略が必要となり、これまで以上に三遠南信地域が情報発信力を強化することが大事であること。

二つ目は、民間行政を初め、それ以外のさまざまなセクターとネットワークを構築し、強固な情報網をつくっていくことが大事であること。

最後、三つ目でございますが、三遠南信地域の基盤づくりに向けて地域ブランドを確立し、それをさまざまな産業に広げていく。こうした中の一つとして「風土」の戦略が役立つであろうこと。

そのように3点、まとめることができました。

そして、今回の議論についてですが、前年度の議論を引き継ぎ、さらに発展的な意見交換を行います。私たちにとって、ふだんは余り気にしない、身近に存在する様々なものや事が、地域外の人から見れば、これが三遠南信地域の特異性、魅力と捉えられることがあります。言いかえますと、三遠南信が一つのブランドとして高い可能性を秘めている、そうしたことを踏まえまして『「あるもの探し」で発見！三遠南信の底力！』をテーマとして設定し、食べ物や物産、伝統文化など、地域にあるものを生かして、三遠南信の魅力を域外に対し、いかに存分にPRしていくかについて議論をしていただきたいと思います。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。

以上のように、SENA事務局が今回の「風土」のテーマを明確に定めていただきました。それに沿って進めていくわけですが、皆様の議論に進む前に、参考となります先行事例ということで、先ほど申し上げましたが、天龍村の柚餅子生産者組合の関京子様より、「ゆべしづくりから三遠南信交流へ」というタイトルで基調報告をいただきたいと思います。

それでは、関様、よろしくお願ひします。

■報告

天龍村柚餅子生産者組合 関組合長

今までやってまいりましたことは40年ちょっと超えていますので、15分でお話しするといっても、本当にさわりだけかと思いますが、おかげさまで、三遠南信の皆様の交流のおかげで本日までやらせていただきました。

まず、最初の写真をご覧ください。

私たちが住んでいるところは、こういう

すごい山の中でございます。この下を流れているのが天竜川でございます。私どものところから2キロメートル下りますと、今は豊根村になりましたけれども、富山村でした。そして、その対岸が浜松市の水窪町になります。ですから、1時間あれば三遠南信をぐるりと回ることができるわけでございます。

ちょうどこの写真は対岸から見た私どもの住いでございます。800年余の歴史のある隠れ里であります。熊谷家伝記という古文書によると、今から600年ほど前に新田義貞の息子、熊谷丹甲貞直が開祖となっております。その前には、既に左善、阿閑というおじいさんとおばあさんが住んでおりました。木曾義仲が1177年に見えたときに、「ここら辺は何というところだ」と聞かれました。「信濃の領内ということしかわからない。」と答えると、では、1泊お世話になったお礼に、おじいさんとおばあさんの名前から、「ここらあたりを左閑辺とつけよう」と。そういうことで、昔は「左閑辺」ということになっておりました。

その横にきれいな桃の花が写っていますが、周りの山が全部岩場ですから、秋は紅葉が本当にきれいです。そして、春は山桜が、30メートルおきくらいに下から上へだんだん咲いて、周りが全部花ばかりになります。

訪れていただいた皆様が、「本当にここ の花はきれいだ。品があって、何とも言えない良い花だ。」などと言っていただき、私ども、それも喜び、胸を張っています。

次の写真をご覧ください。

これは、皆様すでに御存じかもしれません、坂部の冬祭りと申しまして、その熊谷丹甲貞直から3代目の直吉が、「ここで神樂をすると、この地域が栄えていくよ。」という夢を見たことから始まったお祭りで、600年も延々と続けております。

1月4日の夕方から始まりまして、5日のお昼ころまで、徹夜で行います。今はもう過疎で14戸の24人しかおりません。お祭りも昔から全然手抜きをすることなく、丁寧にやっていますが、子どももいなくなりで実施は大変になっております。

しかし、このお祭りには、ここからよそに出た人たちの息子さんやその縁者が必ず来てくださり、その際、「おれは会社を首になつても、このお祭りだけは来たいのだ。」というようにおっしゃって、今でも続けていただいております。

次の写真は、メインのたいきり面でございます。それで、その向こうが、やはり冬祭りに出てくる天公鬼でございますが、私どもの柚餅子の名前を、この鬼様の名前からいただいて「天公鬼」とつけたわけであります。この字は全部、今、ここにいらっしゃいます大平村長が書いてくださって、皆さん、「この字は何と読むのですか」と聞いてくださいます。そうすると、柚餅子とお祭りとセットでお話することができるわけです。そんなことでやらせていただいております。

次をお願いします。

これは、もう42年くらい前に、大平村長さんが教育委員会にいらっしゃったときに、公民館事業として村の暮らしの総合展示会をやった中に柚餅子がありました、私も地区外から嫁に來たですから柚餅子は知らなかったわけですが、そこで柚餅子との出会いがありました。真っ黒い変な塊だなと思ったのですが、これを切っていただいたときの本当に品のいい香りと深い味に感動しました。そして、うちに帰りましてお母様にお聞きしましたら、「おらも昔はつくったんだ。」とのことでした。いろりの生活がなくなると同時に、「もう今の衆はそんなものは食べないぞ。」ということでおやめたというのです。いや、これはもった

いない。何とかして次の世代にもつないでいきたいと思いました。一方、民俗学の先生にお聞きしたところ、これは武士の携帯食だったのだとのことでした。そういうものを踏まえた上で、保存食として天龍村地域の古いおうちでは昔から作られてきていたものなのです。

こうしてお豆を煮て、おみそをつくって、それを柚子の中に詰めてつくってきたんですけども、加工所をつくるのに、私どもは若妻で構成していた昔の生活改善グループでやっておりましたので、お金も知恵も何もありません。そこで、地域の希望者で組合をつくりまして、長野県と村にお願いをして施設をつくっていただきました。

そして工場ができたのですが、大量生産は何とかできるようになりましたが、全く私ども素人ですから、今度は販売に本当に苦労しました。皆様に知っていただくために、一生懸命方々歩きました。最初は新宿の三越に行ったりしたんです。ところが物を売ったことがないですから、恥ずかしくて、「いらっしゃいませ。」なんていう言葉が出なかつたんです。そんな恥ずかしさを重ねながら、今ではもう600回以上、あちこちのイベントに出させていただいてきました。でも、私どもが出ていっても宿泊費も出ない、交通費も出ないと経済的に大変で、これではどうしようもないから、今みたいな車社会を踏まえて、今度は皆様に来ていただくようにしようと方向転換しました。出向いた時には一度も良い思いをしたことはありませんでしたが、でも、その時出会ったお客様たちとの話がきっかけで皆様が来ていただけるようになりました。そのようなこともあります、販売に出向いていったことは、やはり無駄ではなかったのかなと、思えるようになりました。

それにはやはり柚餅子だけですと商売になりませんので、販売と同時に新商品の開

発もしたわけです。まず、最初の販売は、冬祭りの売店で私どもがやっておりました店先で柚餅子を試食していただきました。そうしたら思いがけなく、東京から1,000個の注文が入つたんです。でも、私たちは全然設備を持っていないし、商売目的で柚餅子を作っていたわけではなかったものですから、それから慌てて、皆で相談して組合をつくりました。

そして、1年に1品ずつ何かつくっていこうということになりました。まずは、柚子製品からつくっていこうということで、柚子みそとか、柚子の中をくり抜きますので、それでジャムをつくったり、柚子ジュースをつくったり、柚子あめなど様々なものを作りました。そして仲間をだんだんつくれて、とにかく健康にも良い物を目指して、地域の原材料ばかりを使ったわけでございます。ですから、余計に本当にお金がかかって大変で、儲けは出ないです。でも、健康に良いということにこだわっていきたいということですっとやってきました。そして、浜松市へ行ったり、豊橋市へ行ったり、東京とか名古屋、遠くは神戸まで行ってきました。

販売はなかなか良い状態にならないものですから、組合の者たちがみんな条件の良い方へ離れてしまったので大変な思いをしましたが、平成の初め頃に、今年5月に亡くなられた松田不秋先生と、新城市的清水良文さんがお見えになり、「関さん、私は今、三遠南信に夢中になっているところですが、どうか関さんも一緒になってやってくれないかねえ。」とお話をいただきました。今まで販売だけでお世話になってきましたが、いろいろな会に出させていただくようになりました。

引佐町のつみ草休養村で行われていた「めだかの学校」に入学させていただいたり、静岡県の農産加工のマイスターとして

お世話になり、県中を歩かせていただいて良い勉強をさせていただきました。今でもクリエイト浜松「中部協働センター」に販売だけでなく講座の方までお世話になっております。

豊橋市でも三遠南信を学ぶ会の皆さんと交流したり、中央図書館とか愛知大学の皆さんにも色々としていただきました。

今年9月に「南信州交流の輪」の事業として、新・地域づくりフォーラムを開催した折に、豊橋市のカレーうどんの仕掛け人である鈴木恵子さんに基調講演を、長野市から料理研究家の横山タカ子先生をお願いして南信州でも何かブランドになるものを作りたいと良いヒントを得ることが出来ました。

この写真は多くの皆様が数多いお祭りや行事においてくださった時の様子でございます。小さな分校がもう閉校になりそうだと言う平成8年から秋風コンサートとかカタクリコンサートとして、浜松市や豊橋市、新城市の皆さん方がおいでくださり、毎年やってきました。

小さな分校からマスメディアにのって大きなコンサートになり、天竜川を上に下にと流れて、「カネト合唱団」が飯田市にできるきっかけになりました。

大きなバスでおいでくださり、県道1号から林道は狭くて登れませんので、ピストン輸送で送迎をさせてもらい、村長さんには「道幅を広くしてください。」とお願いしているところです。

おいでいただくだけでは交流ではありませんので歴史めぐりやお祭り等にも行かせてもらい、あの写真は、細江町で主人が姫様道中の警護侍をやらせていただいた時の楽しんでいるところでございます。

この写真は「南信州交流の輪」の設立の時のもので、平成22年にここで行ったサミットの時のものです。私達の地域の事を、

私達よりも三遠南信を学ぶ会の浜松市や豊橋市の皆様の方が良く知っておられて本当に恥ずかしいなと感じていました。

松田先生から南信州でも勉強会を作るよう言われてもいましたので、呼びかけをさせてもらい、飯田市にお世話になって24団体で発足しました。また、三県の地域住民ネットワーク協議会もできました。

この三遠南信地域には素晴らしいお祭りがたくさんございます。この地域の柳田国男先生をはじめ、折口信夫先生や渋沢敬三先生、早川孝太郎先生方が昔から目を向けてこられた日本の原風景とも言われています。国の無形文化財に指定されているお祭りが私達の誇りにもなっております。

今年は、「南信州交流の輪」の事業の一つとして、講座も4回やるようにし、第1回は南信州の花、植物について小林正明先生をお願いして実施しました。いつも知らずに見ている草や木、花が改めて素晴らしい物に見えるようになりました。第2回目は、桜井弘人先生をお願いして、お祭についてスライド説明で民俗芸能の宝庫であることをつくづく知って深く重要性を感じました。第3回目は中央構造線について坂本正夫先生にお聞きして、現地まで行っての学習でなお驚きました。「九州から諏訪以東、日本列島を1,000キロ以上走る」・「約9,000万年前に発生したものである」などお聞きしました。

次の写真は松田先生と田中さんと私が写っておりますけれども、去年の6月1日に住民ネットワークの協議会ができた時のものです。松田先生は、そのときにはお元気でした。今日はお嬢さんがおいでくださっています。先生は「私は1軒、家が建てられるほど三遠南信にかけてきたよ。」とおっしゃっていました。本当に先生のご苦労を思うと、もう少し生きていていただきたかったと思います。このネットワークがで

きて、活動をもう少し見ていただき、ご指導いただきたかったなと思って、今考えると、じーんときてしまいます。

こちらの写真は私どもの地元に元々あった分校で、その分校を使っていろいろやりたかったのですが、耐震検査したところ「使用不可」ということで、建てかえていただいて、そして、地域活性化センターという施設にしていただきました。そのおかげで、皆さんお祭りとかいろいろな体験学習においてくださいます。坂部というところはお祭りが毎月のようにあります。祈りで生きてきたものですから。それで神様はぜいたくですから、旬のものを、採れたものをお供えするようになっております。

だから、それを皆様にも召し上がりいただきとつくらせていただいております。そうすると皆さんおいしいなどと言ってくださるので、「神様がこういうおいしいものを食べていたのですよ。」と話をさせていただいております。私どものところはどんどん人口が減っていく一方ですが、全然暗くならないです。訪れていただく皆さんのおかげだと思っております。

この写真が今年9月14日の新・地域づくりフォーラムの様子です。鈴木恵子さんの基調講演と横山先生のお話と、最後には、お祭り街道で一生懸命活動しておられる伊東さんから、何とか飯田市と豊橋市まで国道151号を祭り街道としてつなげたいという活動報告がありました。市長さんもどうぞよろしくお願ひします。

今、新城市長とはお話をさせていただいたそうですので、ぜひつないで、このお祭り街道を良い文化の道としていただきたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

次の写真は、その祭り街道弁当をつくるための活動の様子です。今までお祭りと食文化が別だったのです。これを今度は

お祭りと食文化をセットで何かしたいということで、「祭り街道弁当」をつくろうということから、横山先生においでいただき、試作をしていただいて、いろいろと検討したわけです。今年は勉強会なのですが、来年には、試食までもっていきたいと思っております。県の支援金をいただいて、その中で何とか良いものをつくり上げていきたいと思います。お祭りがいっぱいありますので、それにちなんで、うまくお弁当の中に食文化として入れていきたい。そして、3年目には何とかそれが売り出せるようになったらうれしいなと思っておりますので、また皆様にいろいろとお世話になるかと思います。よろしくお願ひいたします。

上の写真の一番前の笑っているおばあちゃんは今年98歳で亡くなりましたけれども、生涯現役を目指して、元気でやってこられたのが本当にうれしかったと思います。ちょうど田中知事がお帰りになった後に、皆で「よかったです」ということで撮った写真です。

下の写真は村長さんもおいでになりますが、村井知事がお越しくださって、そして旬のものを召し上がりいただきました。村井知事さんは料理がお好きだったですから、いろいろ本当に喜んで、「おいしい」と言ってくださってうれしかったです。右の写真は総務大臣賞をいただきましたので、主人も裏方ばかりしてくれているので、一度くらい一緒に行きましょうということで、東京に行ってきました際の写真です。これらも私どもの力だけではどうしようもないのですが、多くの皆様のおかげで何とかやってまいることができました。だから、今はイノシシとかシカのほうが多くなっているような状況ですが、でも暗くなることなく、三遠南信の皆様のおかげだと、そんなふうに思って感謝申し上げております。

つたない発表で申しわけありません。よ

ろしくお願ひいたします。ご清聴、ありがとうございました。



■意見交換

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

関様、まことにありがとうございました。
大変すばらしい発表をいただきまして、
柚餅子を売っているのではなくて、歴史と
文化と、そして、温かな天龍村の坂部の心
を売っていらっしゃるのだと感じました。
まさに6次産業だということを感じさせて
いただきました。

それでは、せっかくでございますので、
ご質問、あるいはご意見等ございましたら、
今の発表に対して、皆様のご発言をお願い
したいと思います。

フロアの方々でも結構でございます。

どうですか。特ないようであれば、次
に参りますが。

鈴木市長、お願ひいたします。

田原市 鈴木市長

大変すばらしい活動、試みだと本当に実
感いたしました。継続して行動することの
大事さがわかりましたし、もう一つはやはり
広がりですよね。お祭りも広げていこう
とする動きや、お祭りと食文化を積み重ね
ようとする動きなど、いろいろな面での広
がりというのは、一番大事なことではない
かと思います。今、6次産業化で販売に大

変ご苦労されたというお話を聞きましたが、
まさに、農商工連携とか6次産業化という
のは、販売の得意な人を仲間に入れてやつ
てもらうことが必要となります。三遠南信
は豊かな地域ですので、またいろいろな面
で活動の場があちらこちらで生まれてくる
と思いますので、それらをつなぎ合わせる
ことがこれから三遠南信の盛り上げにつな
がるのではないかという感じがしました。

ご苦労さまでした。また頑張ってください。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。

それでは、いよいよパネリストの方々から
いろいろとご意見、ご議論をちょうだい
していきたいというふうに思います。

まず、事前に事務局のほうからパネリスト
の皆様にご意見を伺ってございます。その
中で、この地域の資源の活用について、
この地域からあるものを探していくかに地域
おこしをしていくか、あるいはプロモーション
していくかということについての全体
のテーマの中で資源の活用の事例、今は天
龍村の事例を発表していただきましたけれども、
各地にさまざまな宝が眠っているもの
だと思いますので、ご発表いただきたいと思
います。

どんどん挙手をしていただいて、我が町、
我が市、我が村の資源をご紹介賜りたいと
思います。

それでは、お伺いしたいと思いますが、
いかがでしょうか。

泰阜村の秦様、お願ひいたします。

泰阜商工会 秦会長

泰阜村は、商工会が中心になって源助かぶ菜の生産をして、漬物にして販売してお
ります。この源助かぶ菜は、明治時代に愛

知県から種の行商に来ていた井上源助さんが広めたもので、最後、泰阜村金野に伝わったものです。

種をとりまして、9月の後半から収穫が始まり、12月にはそれを漬物にしているわけでございます。全国的には野沢菜の支持のほうが圧倒的で、源助といえば泰阜と言われるようにして行きたいと思っておりますので、ここで報告させていただきます。

**コーディネーター／
一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長**

他地区はいかがでございましょうか。

豊川市 山脇市長

まず初めに、実は来月の9日、あと10日ほどしかありませんが、B－1グランプリの全国大会が豊川市で開催されます。今回ご参加いただいている商工会議所関係、信金関係、行政というようなたくさんの方のご支援とご協力、そしてまた、ボランティアとしての参加もいただきまして、着々と準備を進めているところです。今までのご協力に対しまして厚く御礼を申し上げたいと思います。

このB－1グランプリの全国大会の誘致でありますけれども、ちょうど6年前に私が市長選に出馬するころからになります。豊川といえば豊川稲荷ですが、正月の3日間は賑わうものの、それを過ぎると閑古鳥が鳴くという大変寂れた状況でした。一時は年間600万人という参拝者があると言わされておりましたが、今は半分の300万人を切り、門前町の店舗もシャッター通りというような状況になってまいりました。そんな中で、豊川稲荷といえばいなり寿司だと考え、いなり寿司の地域ブランド化を進めることをマニフェストに掲げ、取り組み始めました。

平成20年に市役所内で若手職員を中心に

豊川ブランド研究会を組織しまして、ブランド化の手法などを研究しました。そして、平成21年にその提言の一つであるブランド化の推進組織として「いなり寿司で豊川市をもりあげ隊」を設立しました。

その後、もりあげ隊がB－1グランプリの主催団体である「ご当地グルメでまちおこし団体連絡協議会」、これは富士宮市にありますが、そこに加入しました。翌年の平成22年9月のB－1グランプリの厚木大会に初めて参加させていただき、6位という成績を取ることができ、全国的にも大変注目を浴びるようになります。そのころから豊川いなり寿司の認知度も向上してきたのではないかと思っております。もう2年前になりますが、平成23年9月に「中日本・東海B－1グランプリin豊川」という地域の大会を開催いたしまして、そのときに22万人という多くの方に来場していただきました。経済効果も12億円という結果になり、それを踏まえて、次は全国大会をぜひ豊川に誘致したいと手を挙げましたところ、豊川市に決定していただき、来月、11月9・10日に開催ということとなりました。これは皆様のまちおこしに対する思いにより、本当に一生懸命に盛り上げていただきました結果、開催できることになったと思います。

天候も気になりますが、東三河地域の皆様方にも大変応援をしていただいておりますので、ぜひ成功させたいと思っております。今日は午前中のシンポジウムで八戸市さんが見えていました。八戸市さんは昨年のB－1グランプリの全国大会において優勝されていますので、お話を聞きたいと思っております。

**コーディネーター／
一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長**

ありがとうございました。

昨年度は浜松市長の餃子戦争のお話で盛り上りましたけれども、お隣のいなり寿司と餃子ということでだんだん話が盛り上がりまいましたが、キーワードが「ブランド化」ということになってまいりました。今そんな話もございましたが、いかがでございましょうか。

蒲郡市の小池様、よろしくお願ひいたします。

蒲郡市商工会議所 小池会頭

今、豊川市のほうからB－1の話がありましたけれども、最初、この分科会で「風土」と聞いたときは、私は食かグルメの話かなと思って、そのくらい東三河では今、B－1グランプリに向けて盛り上がっておりまます。お隣の豊橋市では、先ほどから話が出ているように「カレーうどん」。もう年間35万食以上出ているということで、本当に地域のうどん屋の売上も10%以上上がっているし、そういう意味ではすごく「食」に力をいれてやっておられる。豊橋市のカレーうどんもそうですし、田原市長もみえますけれども、「どんぶり街道」ということで、本当に丼をいろいろなものを集めてやっていらっしゃる。蒲郡市もこのあいだ、「ガマゴリうどん」というのがうどんサミットでグランプリをとりまして、まだどこでも食べられませんが、商工会議所の青年部が開発して、応募したらグランプリとなってしまったということで、これから急いでいろいろなところで食べられるようによようと、そんなことを今やっている東三河です。

蒲郡市はもともと8年前に観光交流立市宣言をしまして、観光ビジョン推進委員会というものを作って、オール市民で観光という切り口のまちおこしをしようといろいろなプログラムを作りました。一つはおもてなしコンシェルジュ検定をやりながら、

交流ということもあって、おもてなしのスキルも学びながら検定をしようということで、もう800人以上合格者の方がおり、その中で、おもてなしコンシェルジュクラブというのをつくっております。観光情報の発信をしたり、お手伝いをしてくれたりという作業をやっていまして、今、その発展系のマイスター制度をつくろうとかいろいろやっています。蒲郡は観光地として年間500万人ぐらいいらっしゃいますし、温泉地ですから70万人以上泊まっています。

「市民との交流のところでおもてなしができるような組織があるといいね。」ということでやっております。

そのときに観光交流ウィークというか、初めは蒲郡市民の人にはまず蒲郡の良さもわかつてもらおうということになりました。地域の中で観光の話をしていると、日常で当たり前のことは良いと言わないですね。外の地域と相対化してやってくれないと、日常の地域のものでも良いものというのはいろいろあるのですが、地域の中だけで話をしていると、良さが当たり前で出てこないということになる。そういう意味では、地域の方にまず知ってもらうということを始めました。それが3年前から「オンパク」ということで、地域での楽しめるプログラムをつくろうと、「遊び100選」と称して100個のプログラムを1ヶ月ちょっとの間に市民、また観光業者を含めてやってきました。今年はそのエリアを広げて、もちろん東三河が中心ですけれども、三河全体に広げてプログラムを開催する「みかわdeオンパク」というのを、皆様の手元に資料を配付しておりますけれども、そういうことをやってまいりました。

結局、いつも観光のことをやっていると思いますが、観光に来る人は、それぞれの市、行政区のボーダーなどは余り関係ないのです。蒲郡には来ますけれども、蒲郡市

に来るわけではないのです。だから、そういった意味では、なるべくその地域で楽しめるものを増やしていきながら、滞在時間を伸ばしてもららう。

また、本当に来る人の期待を超えるような楽しみを提供できるかどうかというのが勝負ですから、そういった意味で、いろいろな観光客に対応できるプログラムをつくりながら、広域で、「楽しんでもらえる地域だね。」と言ってもらえる地域づくりをしていくというのが、結果として、その地域のブランド化に向かっていくのかと思います。

地域が広がれば、外に向かう発信力が増すのではないかと思っております。

松川町 深津町長

松川町というのは、先ほど天龍村の関さんからお話がありましたが、下伊那郡の一番南が天龍村、私どもは下伊那郡の一番北側になります。飯田市から車で20分ぐらい北になります。およそ1万3,500人の町です。私どもの町の売りは、まずフルーツです。「くだものの里」として大きく売り出して、果樹園ができてから、来年でちょうど100年ということで、来年、梨の古木を中心にお祭りをしていきたいと思っています。非常にフルーツ栽培が盛んでして、サクランボから始まりまして、桃、ブルーイン、ブルーベリーがありまして、ナシに入りまして、昔は二十世紀梨で非常に栄え、一代財をなした町でございます。そして、リンゴは、12月のふじまで、リンゴ狩りがこれからシーズンになるわけでありますけれども、シーズン中には多くのお客様が見える町です。それらを生かして、6次産業の中でリンゴのワインや、乾燥させた果物の菓子類を作るなどしています。

また、清流苑という直営の温泉施設があり、その辺一帯が温水プールやマレットゴ

ルフ場、パーゴルフ場、テニス場、スポーツ施設などもあります。清流の片桐松川という川があり、ダムもあります。それから、今年、森林浴で「セラピー基地」の認定を受けました。それから、長野県から指定管理を受けております「青年の家」があります。これは生涯学習の場です。そういった、一帯を一つの観光資源と考えています。これから三遠南信自動車道、リニア新幹線が来るということで、交流人口は確実に増えてくる。観光というのが非常に大きなポイントになってくるだろうと考えております。

三遠南信ということですが、豊橋市や豊川市の三遠地域とこの南信州、これは当然のことながら違いがあります。いわゆる地形的な違い、あるいはそれこそ風光、景色が違うわけで、それぞれがその違いをアピールすることが、この三遠南信を大きく売り出していくものになる。同じものをやってもしようがない。当然のことながらできない。この南信州、合わせても飯田下伊那で16万人の人口で、そして、谷があり、段丘があり、山あり、川ありという、ここをどう生かしていくかということになるのではないかと思っております。

それから、観光に訪れる人たちは非日常を求めて来る。非日常を求めてくるということは、当然、食べ物はその地域独特のものを食べてみたい、それから、風景もその地域の独特なものを見てみたい、環境にしてもそう。そして、その地域の人たちと接したいという思いで来るのだろうというように考えるわけです。そうすると、今度はそれぞれの地域の中で旅行のプロデュースをしていく。地域をプロデュースしていく。こうした観光、着地型の観光とよく言われますけれども、そのようなものがこれからは大事だと思っておりすることと、それを実行するにはキャバの問題もある。そうす

ると地域で連携をしていくことも必要だと考えております。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。

B-1 グルメに始まります地域から自分たちの強みを探し出して売り出していく、これをブランド化していく。そのときに、この地域が海から山への、日本でも最もすぐれた海浜を持ち、また山岳を持ち、生態的にも非常に生物多様性のすぐれた、世界に誇れる自然を有しているわけで、隠れた魅力がいっぱいあるのであろうというよう

に自信も持ちながらも、まだまだ未開発のものがあるのであろうというように思われるわけです。

あとお一方だけ資源の活用についてお聞きしまして、次のテーマに移ってまいりたいと思います。

喬木村商工会 藤本会長

喬木村といいますと、今話題のリニア新幹線が山梨から抜けてトンネルを出たところが喬木になりました。当初通る予定がなかったのですが、今、ハチの巣を突ついたような大騒ぎでございます。ありがたいやら迷惑やら。工場移転の関係だとかいろいろありますと、大変でございます。

私、個人的な話をさせていただきますと、旅行が大好きで、先ほどおみえになったのは八戸の総合政策部長さんですね。八戸には50回ぐらい行っています。B-1グランプリをとったせんべい汁ですね。真っ先に食べてみまして、最初はそんなにおいしくはなかったのですが、だんだん慣れてきました。おいしいものが各地にありますと、先ほど松川町長が言わされたとおり、その地域の人と触れ合い、おいしいものを食べたいという思いが私にも強くありますと、東

北は100回ぐらい行っています。ナビが要らないです。ですから3・11の震災のときには連休を利用して各ところをお見舞いに行きました。隣村の天恵製菓さんからしつかりお菓子を仕入れまして、70万円分くらいに安くしていただきました。有志と、有志といつても私の女房と2人きりでキャンピングカーに積んでお見舞いに行ってきましたが、東北が好きです。その魅力は素朴さですね。

私、温泉が好きで、よく飯田市のかぐらの湯に行きます。かぐらの湯に行くと、浜松ナンバーが一番多いですね。それから、三河ナンバー、豊橋、岐阜、名古屋、三重、非常に多いです。ありがたいことだなと思います。その方たちが三遠南信自動車道の矢筈トンネルを通って喬木村へ来るわけです。喬木村には地域の有志がつくった「田舎道」という野菜とか産物の直売所、それから「楽珍農場」というものがあります。県外から来られたお客様が、そういう野菜の直売所回りをしていらっしゃる非常に楽しんでいてくださるということで、ありがたいと思っております。

喬木村というところは、河岸段丘、日本でも有数の、有数というより、ほとんど唯一くらいのきれいな河岸段丘があります。天竜川がありまして、その平地、それから、その上に河岸段丘、その上に耕地と。喬木村は、「小さな拠点づくり」ということで、国土交通省が主催している、いわゆるその準備のための予算が全国で12地区が通り、そのための研究を今やっておりまして、その講師として先ほどパネラーをしていただきました島根県中山間地域研究センターの藤山浩先生に昨日来ていただき、7時から講演をしていただきました。

そんな先生の意見の中にも、喬木は、段が4段あるとのことでした。それで、それぞれの良さがあるということでお話をいた

だきましたが、喬木の下段では、ご存じだと思いますけれども、イチゴ狩り。これはおかげさまで40年かけてブランド化できました。そのブランドで、喬木のイチゴは大体5割から10割ぐらい、よその産地のイチゴより高いです。イチゴの産地に、例えば、私、5、6年前に九州のイチゴの産地へ友達の八百屋さんのところへイチゴをお土産に持っていました、「何だ、こっちのほうが産地だ。」と言われましたが、食べてみたら、「これはうまい。」となりました。東北だとか北陸に私に行きますが、そのたびに喬木のイチゴを持っていくのですが、待っていてくれるくらいブランドになっております。今年も1月から5月くらいまでイチゴ狩りのことをやっていますが、予約がいっぱいでお断りしている。「よそへご紹介させていただきます。」と言うと、

「いや、喬木のイチゴが食べなくて予約をいれているのだ。」というように言われるくらい、おかげさまで40年かけてようやくブランドに育てることができました。

そんなブランドを利用しない手はないということで、私どもに「N P O 法人たかぎ」という団体がございまして、そこで観光事業、あるいはいろいろなことをやっています。喬木には九輪草園だとか藤であるとか、そういうものの見物のためにお客様がたくさんお見えになります。そういうのをセットにして売ろうではないかということで、パンフレットをつくって応募しました。春は九輪草などを中心に村内を回る計画を立てました。秋はマツタケ狩りを中心にして、村内の紅葉などをご案内すればいいということでつくりました。募集したところ、来客数ゼロでした。良い話をする非常に格好良いのですが、お客様をお誘いする魅力ある計画を立てるということはなかなか大変なことだと、我々N P Oの理事も非常に頭を痛めています。実際、どこ

の地域の皆様も成功例は多々あると思いますけれども、もっとあるのが失敗例だと思っています。

おかげさまに喬木はリニアの駅へも、自治体としては飯田市まで5分くらいで行けるところです。それから、三遠南信自動車道もおかげさまで通り道になっております。インターも喬木の矢筈インターと喬木の氏乗インター、両方合わせて一つのインターということで、二つのインターができる予定になっております。いろいろなことで喬木を売ろうということでしていますけれども、先ほど深津町長も言っておられましたが、最終的に、「では喬木だけでできるか。」というと、それはできないです。やはりお互いが連携をとっていかないと、喬木村へ来て喬木村で帰るだろうか。先ほども述べましたけれど、かぐらの湯へ来て、かぐらの湯だけで帰るだろうか。そうではないです。かぐらの湯は、飯田市の方はあまり来られないですけれども、この辺で一番良い温泉だと私は思っております。うちから50分かかりますけれども、毎週日曜日には行っています。そのくらい良い温泉ですから、浜松の人たちもよく来てくれます。そして、温泉だけでは帰らないのです。飯田市も見ていきたい。浜松市に行ってミカンを買うと、「おっ、飯田か。かぐらの湯だ。かぐらの湯は私も行ったけれども、冬は怖くて行けない。」というように言われます。何が必要か。連携と、もう一つは、今、兵越の峠しか通る道がない。トンネルが必要です。飯田市と、それから、浜松市、豊橋市。愛知県と長野県と静岡県で協力してもらって、ぜひ青崩のトンネルを早くあけてもらいたい。トンネルさえあれば、全通しなくともまだ来ていただけるのではないかというように思っています。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

大分熱がこもってまいりまして、秋ではございますが、温かくなつてまいりました。

さまざまな資源を活用する例をお話しいただきました。そして、先ほどからのお話で、蒲郡市では例えば検定を使うとか、地域グルメの手法を使うとか、様々な方法によってご苦労されている。成功する場合もあるし、なかなかお客様に来てもらえないこともあるということでした。

次のステージですが、それでは、どのようにしてファンをつかんでいくか。自分たちのブランドを定着させていくかということについて、テーマを移させていただきたいと思います。

これについても、今、アンケート等で寄せていただいてございますが、ご意見・ご発表等いただける方はぜひ挙手でお願いをしたいと思います。

豊橋市 佐原市長

先ほど来から、道路のトンネルをつないでくれというようなお話があり、国土交通省出身の私としては出る場所を間違えたかなと思いながらお聞きしておりました。また、豊橋のカレーうどんとか、私が紹介させていただく前に紹介していただいて、本当にありがとうございます。

この「風土」のパネルの壁紙に当たるものを見ていると、先ほどの関先生もとても優雅な雰囲気、そして、今回も明るい雰囲気で、これは明るく今日は話さないといけないなという気になっております。

私たちの町、最初は、路面電車が残っているところは少ないということで、全国には多分市電が売れたと思います。そして、カレーうどんがひょんなことからテレビで取上げられて、ちょうどいいタイミングで売れて、そして、去年から今年にかけては

手筒花火ということで売れているわけです。いずれも地域のとても珍しいものをしっかりとつかまえていく。地元の人にとっては、先ほどお話をあったように、ごく普通だったことが、実は普通ではないのだということをマスコミを通じて上手に紹介していただけだということが大きいと思うのですが、これは単に上手にマスコミを使ったと、こう思われるがちなのですが、実は私どものところはちょっと経緯が違いまして、いずれのものも、ひょんなことからつながっております。

例えば、ここで今売れております手筒花火ですけれども、私たちは東京でプロモーションというのをここ数年続けていました。いろいろな形でやっておりましたが、手筒花火は大きなショッピングセンターに行ってイベントをかけさせていただくというお願いをしても、なかなかああいう花火はやらせてもらえないものですから苦労して場所を探しておりました。ところが、テレビ番組の「世界の果てまでイッテQ！」のプロデューサー関係の人たちが偶然、8月の番組用に、「日本で一番危険なお祭り」というのを探しているという話があったらしいのです。私たちはその話があったことは知らなかったのですが、偶然東京で手筒花火をあげているときに、そのプロデューサーが見ていて、「これだ」ということで決まったという、簡単に言ってしまうとそれだけのことです。その間にはまだいろいろなことがあるのですが、いろいろなことがこうやって積み重なって、「好機をしっかりつかまえていこうではないか。そのためにはしっかり普段から活動しておくことが大事。」ということをつくづく痛感させられました。

そんな中で、豊橋市を中心として、東三河全体の活動につなげていきたいということで、私どもは東京に事務所を持って、そ

の人間があちこちでプロモーション活動をしております。中心になっているのは、やはり観光のいろいろなところにイベントをということで、イベントについては、やはり行政としてお手伝いをしていくということですが、それを支える、いろいろな場所、情報を提供していただく、そしてつながりを持っていくものとして、私どもは東京に「豊橋応援俱楽部」というものを組織して持っております。年に1回総会、そして、懇親会を開いているという組織ですけれども、何も豊橋出身に限らないのですが、地域の地元にゆかりのある方たちに私たちの応援団になってもらう。いろいろな情報を提供していただいたり、こちらからの情報をそれぞれの人たちの持っているネットワークに流していただいたりするなどの、そんな仕掛けをさせていただいております。カレーうどんにしろ、手筒花火にしろ、マスコミに上手に乗せることができた、その背景には、そういう人たちの力が大変大きかったと思っております。

私どもの事務所、実はオープンにしていいる東京の事務所になっておりますので、最近は豊橋市の人よりも飯田市の人ほうがたくさん訪問されているという大変不思議な事務所になっておりますが、それはそれで、私たちも飯田市から持ってきていただいた情報を使えるということで大変重宝しております。

それから、豊橋市というか、東三河は、今、東京やいろいろなところ、外にネットワークを広めまして、それと同時に、私たちは東三河の中での交流を深めましょうということで、先ほど、オンパクのお話を小池さんからいただいていますが、これも「みかわdeオンパク」となっています。

豊橋市というよりも東三河の広域連携の協議会の中で、できるだけ人の交流を広げたいということで私どもから提案して実際

にやっておりますのが、子どもが動物園に行ったり、いろいろな施設の博物館に行ったり、温泉に行ったり、地域にある公共で持っている交流施設、これを使うときに、子どもはみんなただにしています。子どもにパスポートを持ってもらって、それを示せば子どもはただ。大人はちゃんとお金を払っていただきます。そこで稼げるということがバックにあるのですが、そうすることによって、いろいろなところ、知らなかつたものを知っていただく契機とする。そして、その体験を持って帰った人がそれを地元に、そして友達に、場合によっては城外にしゃべっていただける、こんな仕掛けをしております。もうちょっと外に広がってもいいのかなと思うような仕掛けですが、今まで豊根村の人が豊橋市の動物園に来るということはなかなかなかったものが、何人かそれでも来ていただけるようになる。そんなことがあることによって、少しずつ中の交流が広がると思っております。

それから、もう一つは、やはり同じように人が動くような仕掛けを何とかしたいと思っておりまして、これはまだうまくいっていないませんが、豊橋鉄道の渥美線という線路があるのですが、これは自転車に乗っていいけるという、自転車を持って乗れるという、そういう言い方が正しいですかね。「土日は自転車を持って乗っていいですよ」と鉄道で指定されています。これは、中部運輸局さんにご配慮いただいて、「観光地に行く列車だったらしいよ。」というその枠を使っていただいて、「余り観光地ではないな」と当時は思ったのですが、今はしっかり自転車で行って、危険な豊橋市内は避けて電車で行って、田原の安全なところから自転車で渥美半島を回っていただく、こういう観光に意外と使われています。思ったより使われていることにびっくりしました。これをぜひ飯田線に広げていただき

きたいと思って、今、運輸局にかけ合っているのですが、料金所、改札の問題などがありまして、物理的なところの障害もまだ残っている。ただ、私は鉄ちゃんですので、先ほど日本じゅう旅行されているというお話を同じように、日本じゅう鉄道に乗っていますが、飯田線というのは、多分いろいろな風景を楽しめる。風景の醍醐味から、ほんわかした風景から、いろいろなものを楽しめるということでは出色的のラインだらうと思っています。これを上手に生かして、しかも地域をめぐってもらえるという仕掛けにするのは、ぜひいろいろなことをみんなで連携してお願いをすれば何とかなると思つて、つながりの強さというのをそういうところで發揮していけたらうれしいなと思っております。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

私も飯田市の動物園の園長をしていた時代がございまして、豊橋市の動物園、それから、博物館も大変立派です。もちろん周辺の皆様の博物館も立派でございまして、これも連携して、今、展覧会を回しておりますよ。こういった連携をしていくということが非常に大事かなと思います。ファンを獲得していくこと、連携していくことが大事かなと思います。

時間もございますので、この連携について、少しお話も含めて最後のまとめにだんだんしていきたいと思うのですが、鈴木市長、いかがでしょうか。その連携について、お考えがあるというふうにお聞きしておりますが。

田原市 鈴木市長

一つ、最近の事例を報告させていただきたいと思います。

渥美半島、ご存じのように、本当に多種

多様な農業が展開されておりますが、昔、豊川用水ができる前は、畑は芋、麦、そして大根、米という形で、大変貧しいまちでした。田原市の藤七原という地区で今、まちづくりをやっている民間団体がありまして、その当時の芋で何とかまちづくりをしようと活動しています。たまたま松尾社という京都の分社がありまして、酒をテーマにして、最初どぶろく製造を考えたようですが、これは難しいということで、伝統ある、歴史のある芋を使おうということで、3種類ぐらいの芋を使ってやった結果、一番いい紅あずまという芋を使って焼酎を造ろうということになりました。

そして、そのときには土壤とかの関係で、豊橋技術科学大学の三枝先生にもご指導いただきながら取り組んでまいりました。ただ、田原には造り酒屋はありませんので、実は飯田市の喜久水酒造さんにお願いしました。アルプスのおいしい水を使って、それで焼酎を造っていただき、販売しようということで、この4月に初めてでき上がりまして、何と2カ月で売り切れました。来年は今年の倍以上の5,000本造ろうということで、今、力を入れております。これが何といっても、ロックで飲むのがおいしいです。普通は水で割りますけれども、ロックで飲むと本当にまろやかで、特に女性の方が大変喜んでおります。また、我々臨海部に60社ぐらいありますけれども、その臨海企業の懇談会のときに提供しましたら、これはおいしいということで、どこで売っているのかと大変好評でしたので、そういった面ではこれも三遠南信の6次産業化だというように思います。原料生産を田原でして、焼酎は飯田で造っていただいて、そして販売していく形です。

今回は、限定版で田原だけで販売したのですが、できれば飯田で売っていただくとか、そして、その焼酎の味に合うつまみを

開発するとか、そういう広がりができるといいと思っています。今年は持って来ていませんが、来年の三遠南信の交流会にはぜひ皆さんに飲んでいただきたいと思っています。

**コーディネーター／
一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長**

実は市長さん、それをお尋ねしようと思って、今、マイクを握ったところなんですよ。今日は残念ながらということですか。

田原市 鈴木克幸市長

もう売り切れてしましましたので。

**コーディネーター／
一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長**

ありがとうございました。

大平村長、この連携について、お考えを。

天龍村 大平村長

事例発表でうちのおばさんが先ほど話をしたので、天龍村は何も話さんでもいいといってコーディネーターさんがこちらを向いてくれないので手を挙げ損なっておりましたが、ご指名いただきましてありがとうございます。

大変参考になるお話をいろいろ聞きました。皆様のお話を聞いていると、自慢するようなことは柚餅子以外に余りありません。柚餅子は、私は最初から関連しておりました。ただ、問題は、こういったものができる由縁は、先に柚餅子ありではなかったので、他のことから発想して柚餅子がこれだけになったということです。その間には大変、この組合の皆様の努力がありました。苦労もありました。本当は、私が教育委員会にいるときに、子どもたちのおやつを今は親が買い食いをさせていました。だから、買い食いはやめて、手づくりにしようと思

いました。その手づくりの品物を幾つもつくりました一角に柚餅子を置いたんです。たまたまそのときにおばさんたちが参加しております、「これは何とかしたほうがいいのではないか」という発想から今に至ったわけで、初めからこういったものを产物にしようという考え方で出るとなかなか難しいけれども、そういったヒントからこれまでになったということです。もう長くお話しするともっといろいろありますけれども、そのかわり私もそれを計画した以上、いろいろ協力してまいりました。

それで、私どもも柚餅子と言いましたが、それ以外にもいっぱいございます。ていざなすとかいろいろ一生懸命やっておりますが、これは後から何とかしようと思って発見したものでございます。先ほど喬木の商工会の方は、下伊那にはかぐらの湯しかないような非常に強いお言葉がありましたけれども、いっぱい良いお湯がありますから、ぜひご利用いただきたいと思います。私どももお湯がございまして、実はそのお湯も宣伝の糧として、今、足湯を各地に運んで入ってもらっています。一番有名なのは名古屋のシティマラソンですね。あれにも足湯を運んでいます。先ほど動物園の話が出ました豊橋市の動物園。あそこには、もう常駐と言ってはいけませんが、土曜、日曜、祝日には必ず足湯を出すということで、市長さんのご配慮で、あそこに常時運んで大変喜ばれています。南信州の温泉はどこにもありますので、ぜひご利用のほどよろしくお願ひしたいと思います。

そういう経過で、この県境というのは、地図の上では1本の線です。ところが本当は高いフェンスと同じなのです。なかなか交流ができない。道路も問題がございますが、そんなことで、どうしても来てもらいたいということで、観光誘致に観光バスを誘致して、そして、飯田線もなかなか乗っ

てくださる人がないのでだんだん貧弱になっていき、今に廃止されるのではないかと憂いておりました。それを両方使って、観光バスを誘致するということで、今、一生懸命やっております。そういった意味で、今はJRのほうもいろいろ計画をしていたので、新緑列車とか紅葉列車とか、いろいろそういった列車もつくりまして今やっていますが、微々たるものではござりますけれども、そういうつながりがあって初めて観光も、そして、こういったいろいろな産物もつながりができるわけで、そんなことも含めて、いろいろな面で、この地域の皆さんと一緒にやってやる必要があると思う。

ただ、先ほど言いましたけれども、こういった機会にいろいろ話が出るのですが、それ以上になかなか積極的に話が進まない。今まで何回かこういう会議に出て、私どももやらない1人ですが、もっと具体的に実施するような方向づけをしていただきたいということがこの協議会で特にお願ひ申し上げたいことです。あとは言うとぼろが出来ますから言いません。天龍村もありますので、どうぞよろしくお願ひします。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

天龍村の村長さんに早くマイクを渡さなかつたがために、大分勘気をこうむりましたけれども、大変すばらしいご指摘をいただいたかと思います。実は、私も最後に、もしご発言がなければ申し上げようと思ってここにメモしてございましたが、村長さんとも何回ここでお話をさせていただいているのでしょうか。会議を積み重ねていって、すばらしい計画はできているのですが、そこが、今、村長さんがおっしゃったところだと思います。これを検証して、チェックして、そして、次の問題点は何だという

ことをきちんと明確にして、次のステップに確実に進んでいくと。議論だけではなくて進んでいくべきだというのが大平村長さんのおっしゃりたいことかと思うのですが、まことに同感でございます。まことによいご指摘をいただきましてありがとうございました。

コーディネーター／

一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

大変重要なご指摘をいただきまして、仲井様からまたお考えをちょうだいしたいと思います。

豊橋観光ボランティアガイドの会

「ほの国豊橋案内人」 仲井代表

この会を始めて今年で12年目ということで、年に2回ずつ行っていますので、都合24回もやっているわけですが、それぞれいろいろなところへ行っております。特に南信地域は何度も来ております。この前、先ほど関さんにご発言いただきました、このゆべしの里ですね、坂部も行っておりますし、古くは、神様王国「遠山郷」、ここに行きましたし、あと大鹿歌舞伎にも2度ほど行きました。それから、あとは水窪の西浦田楽ですね。ここにも行っております。皆様方、行けば、「これはよかったな」ということで非常に褒めいただきます。ということで、大体バス1台は必ず集まりますので、40人前後で行っております。

先ほど豊橋市長さんから豊橋のお話が出ておりましたが、やはり祭りとなりますと、豊橋のあたりはもう大変古い祭りです。具体的に言いますと、安久美の神戸神明社の鬼祭ですか。それから、あとは祇園祭になってしまいますので、そうするとやはり手筒花火になります。豊橋は今、52校区あります、半分以上の校区がそれぞれ煙友会を持ちまして手筒花火を非常に盛んにやつ

ております。

奥のほうの伝統ある祭りとなりますと、豊橋はその点は少ないので、今後については、やはりまとまってやっていくことが一番ではないかと思います。

もう一個、豊橋の中で、今日は関係ないのですが、「ほの国豊橋案内人」ということでボランティアをやっております。これにつきましても、今現在30人前後でやっているのですが、今度の日曜日なども広小路で歩行者天国をやります。このときにボランティアなどやらせていただいております。

皆様方でそれぞれ企画されましたものを、私どもは何とかそれぞれ皆様に広く売りましてPRしていきたいと思っておりますので、いろいろありましたら、また今後ともいろいろなところで私も知識を得まして大勢の皆様方を連れていきたいと思いますので、ひとつよろしくお願ひいたします。

コーディネーター／ 一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長

ありがとうございました。

それでは、その民間の企画をされて、この地域に貢献されるというお立場から、矢澤様、よろしくお願ひいたします。

みらい企画「律」 矢澤代表

午前中に住民セッションが行われたのですが、その三遠南信住民ネットワーク協議会というところで、昨年来から「三遠南信ここが楽しい事典シリーズ」全5巻を各2,000部ずつ作成してきました。この編集をするに当たりまして、各市町村様から非常なるご協力をいただきまして、これが1巻の「祭り事典」です。祭りといいますので、やはりこれが超人気で、ほとんど完売に近い状況になっております。

そして、2巻目が、先ほど電車の話も出ましたが、飯田線と天竜浜名湖線です。私

は飯田の人間ですが、飯田線には余り乗らないのですが、それでもちょこちょこと乗るときに、この秘境駅のツアーがありました。普通では停車してくださいませんが、ツアーのときだけは、その秘境駅といわれている駅におろさせていただいて、その辺の界隈まで案内してくださいって、これはとてもいい経験でした。それから、天竜浜名湖線。これもすごく雰囲気がいい電車だなと思いました。これを編集するがためにわざわざ行って、お金を落としてまいりました。そして、歴史の紹介。それでまた道ですね。

3巻目が、先ほどから皆様が自慢されています温泉を含めた「道の駅＆温泉事典」です。これは温泉好きの方の実用本となっています。といいますのは、全館無料入浴券がついておりまして、当然、おきよめのお湯さんにもご協力いただいておりますし、南信州の温泉さんには多々ご協力いただいております。ということで、これも人気です。

4巻目が、今日のこの「風土」に特に関係のある「特産事典」です。残念なことに、焼酎だけが載っていなかったんですね。あと、お話ししているところが、皆さん、「ココイチ」というものを紹介いただきましたので、ほとんど掲載されております。

そして、最後5巻が「花街道事典」ということで、これはお花です。

それを全5巻つくりまして、今現在、ここにお見えになっている方たちのおかげさまもございまして、約6,000冊販売されておりまして、あと4,000冊残っておりますので、出たところに売っておりますので、ぜひお買い求めのほどよろしくお願ひいたします。

それで、ここに総計650点の素材があります。三遠南信全エリア650点の文化素材

を実は整理・網羅しました。先ほど関さんも発表されました、関さんがリーダーとなっている「南信州交流の輪」というのは私も会員なのですが、そこで、この中のものをきちんと勉強しようということになりました。しかも座学と現地学習しようというセットで、今年45名の参加者のもとに勉強を始めました。そこで、学習した中で、この地域の凄さに本当に改めて気づかされました。それは、いろいろな祭りの専門の先生にお聞きしました中でも、日本の祭りの原型がこの地に息づいているということです。それはまさしく関さんの住んでおられる坂部というところは、800年も昔から代々ずっと祭りの形や祈りを伝え続けていっている、このすごさに、「800年っていうの世だったのかな。今はたしか平成だよね」と、そのようなことで、すごく感動するわけです。

それと、もう一つ着目したのが、実はこの4巻です。4巻のところすごいなと思ったのが、実は今日、市長さんもお見えになっていますけれども、豊橋カレーうどんのこのカレーうどんの底に何とろろと御飯があったということです。私も女性ですので、食に関してはとても関心がございまして、わざわざ豊橋市まで行って、二重底の豊橋カレーうどんを食べてまいりました。隣に皆様みたいに背広を着た立派な紳士がお二人いらして、ここに白いような前掛けをかけて、「豊橋といったら豊橋カレーうどんだな。」とか言いながら、カレーうどんのカレーを飛ばしながら食べていました。やはりそういうことってすごいなと感じました。

それから、「豊川いなり寿司」。これも紹介してありますが、このいなり寿司のバリエーションのすごさ。そして、「渥美半島どんぶり街道」。これは渥美半島全部がどんぶり街道です。そういうことのすごさ。

そして、「奥三河・戦国ぐるめ街道」。これは、織田信長と武田信玄の戦いのあった設楽原の戦い、あれを物語にして、そして、その国道151号でしたか、そこを全部、「奥三河・戦国ぐるめ街道」というふうにしまして、そういう面的な取り組みをしている。このあいだ、鈴木さんの話で、カレーうどんで、たしか何億円と儲けているという話を聞きました。そんなに売上を伸ばしていると。そして、全国にその地域をアピールしているという、そういう取り組みに実はびっくりしたわけです。そこで南信州も何か仕掛けたいと、そのように思いました。

そこで着目したのが、日本の原型をとどめている祭りと、そして、食文化の融合です。この地域の強みが何といってもやはり祭りです。そこには信仰があり、物語があり、春、夏、秋、冬それぞれのいろいろな祈りがあります。先ほど関さんがおっしゃいましたように、神様、仏様は一番ぜいたくなものをお召し上がりになる。つまり旬のものをお召し上がりになるということです。ですので、国道151号は「祭り街道」と言われております。この祭り街道と食を融合させた「祭り街道弁当」を開発して南信州のブランドとするということで、祭りやその年中行事の食からヒントを得て、日本の伝統食として堪能していただく。そして、全国の人たちに日本の分野や味を楽しんでいただいて、とても幸せな気持ちになっていたただく。そういう時間を作りたいということで「『祭り街道弁当』夢と感動のプロジェクト」を立ち上げ、先ほど関さんがおっしゃったように、新・地域づくりフォーラムを開き、勉強の第一歩としたわけです。

そして、プロジェクトは3年計画で、3年目に「祭り街道弁当」をぜひここで、関さん、頑張ってつくり上げて、焼酎を飲み

ながら「祭り街道弁当」を食べていただきたい。そんなことを実現するために動いていきたいと思います。ここは、かつては「山の都」と言われたところでした。リニアが開通しようが、三遠南信自動車道が全通しようが、ここは山の都として、もうそのときには栄えているようにしたい。そういうことを夢見て、このプロジェクトに向かって頑張ってまいりたいと思います。

**コーディネーター／
一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長**

ありがとうございます。

関さんといい、矢澤さんといい、すばらしい女性パワーに圧倒されておりますが、本当にすばらしい発表、ありがとうございます。

単なる出版ではなくて、この地域を全部網羅して、地域の文化を文化資源として売っていこうというすばらしい試みだというふうに理解しているところでございます。

まだまだ話したい、話し続けたい、あるいは議論したいところではございますが、大体お約束の時間が参りました。簡単にまとめの方向に移ってまいりたいと、そんなふうに思います。

様々な意見が出されました。アイデア、地域のある宝を工夫して、見つけ出して、加工して、そして、人、心で売っていくということ。あるいは検定を、あるいはB級グルメのそういった仕掛けのアイデアを出して売っていくということをご報告いただきました。

今後、今までの過去の集積は、最初に私、お示ししたのですが、この資料集の50ページにあるような形で、全体の戦略・戦術が描かれております。これを具体化するのが今日の個々の話だろうというように思いました。設計図はできておりますので、これに沿って、今日出たようなお話をぜひまた別

のところで体系化するような作業をしていくことが大事ではないかということが、一つ目ではないかと思います。

それから、二つ目ですが、それを具体化していく、そのメニューをプロモートしていく、プロセス設計していく必要がある。1年目は何をして、2年目は何をして、3年目は何をしてということかと思います。

もう一回整理すると、1番目は、シナリオを整理して書くということ。2番目は、そのプロセスの工程表をつくって攻めていくということかと思います。

それから、大平村長さんから思いを込められてご指摘がありましたように、話は大体出尽くしているのではないかということ。それらをきちんと見直して、チェックをして、本当に実行性のある計画を立案すること。内容がまづければまた改善して、そして、それをさらにもう一度トライしてみるという、こういうチェック・アンド・トライの動きをそろそろする必要があるのではないか。次のサミットには、ぜひそのような内容が報告され、それをもとにまた進んでいくということが必要ではないかということが大平村長さんから提案されました。

大まかにそのような内容でまとめをさせていただきまして、最後になりますけれども、九州経済フォーラムの西座様が今日はゲストとして来てくださっていますので、わずかな時間しかございませんが、ご感想、それから、ご助言・ご指導をいただければと思います。

よろしくお願ひいたします。

九州経済フォーラム 西座理事

実は先週、九州の宮崎県のある町に風土ビジネス推進協議会というものができまして、そのアドバイザーとして来てくださいということを言われまして、つい先日、私、第1回目の会合に行ってきました。そ

こで出た意見は、「有害鳥獣の処分をどうするか非常に困っている問題だ」ということでした。これはシカ、イノシシ等々でございました。このシカを、要するに処分するわけですが、その後の処理として、食べることを考えましょうということになりました。それで、ちょうどワインセラーがその町にはあるので、ワインに合うシカ料理をして、そして、これで売り出していこうということになりました。ただし、ここには一つ問題があります。「独自でやるのは、これはだめだ。やはり県境を超えて、その地域のエリアでネットワークを組んで、駆除したものを一緒に地域の食べ物として売り出していく、こういう連携が大事なのではないでしょうか。」という助言をさせていただきました。まさに、その地域の風土、この地域のものとしての宝物をつくつていけばいいのかな。今日お話を聞いていても、非常にたくさんのその地域のことをやられているので、非常に私も参考になりました。駆除したシカを食べるという変な発想で非常に申しわけと思うのですが、そういうことをつい先週、話していましたので、ご報告ということにかえさせていただきます。

**コーディネーター／
一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長**

ありがとうございました。

閉じる前に、佐原市長さん、前回のお話の中で、「良いお祭りはあるけれども、呼んでくれないと行けないよ。」というような冗談めかした話があったかと思うのですが、各地のお祭りの首長レベル、あるいは議員さんレベル、民間レベルの交流というのはその後どうなっているのでしょうか。

豊橋市 佐原市長

お祭りは多分、わざわざ呼ぶという仕事

はしていないですが、例えば、愛知県でいいますと、東栄町の花祭が一番歴史ある祭りという意味では有名ですが、これは、もう一方では、私たちがわざわざ行けない、行っても入る場所がないぐらい有名になってしまったりしていることがあります。それで、何を今やっているかというと、お祭りもそうですし、先ほど出た歌舞伎などもそうです、交流という形のものが上手にできるというように思って、今、歌舞伎は三遠南信のふるさと歌舞伎というのをちょうど紹介させていただきたいですが、今年は順番で来月17日に豊橋であるのですけれども、ぜひ、お弁当を試作品でもでもいいから持ち込んでくれたら、うちはそういうのを今、専らやっています。

お祭りは、多分声かけとか情報提供はすごくされていて、あとは、首長さんたちはなかなか行けていない。時間がとれない。先ほどお話がありましたように、夜中徹してというお祭りが多いですからなかなか行けないという状況だと思います。私自身も、花祭は豊橋市内の花祭しか見ていない。東栄町出身の方たちが集まっている町がありまして、そこのお祭りの花祭ぐらいしか行けないので、なかなか実際は行けていません。発言だけして実施していないという、先ほどの大平村長のおしゃかりをまさに受ける、そんな状態でございます。

**コーディネーター／
一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長**

政でお忙しいということですね。

豊橋市 佐原市長

そういういい政だったからいいのですけれども、そうではないことも多くて、残念ながらそこまでいっていない。ただ、地域間の連携というのは、そのお祭りにかかわらず、先ほどありましたように、こういう

発言をいろいろなところでさせていただいたり顔見知りになりますと、天龍村の村長さんが来られて、「豊橋市でこんなことができんかね。」という相談があつたり、根羽でもあつたりしておりますので、そういう意味では、三遠南信の交流があるおかげで顔見知りになったいろいろな人たちが、それぞれのネットワークを使って上手に発信をし始めているかなということは強く感じております。

**コーディネーター／
一般財団法人阿智開発公社 羽場理事長**

ありがとうございました。

最後に佐原市長さんからお言葉をちょうどいしたのですけれども、このフォーラムを通じて非常につながりが感じられる。要は、親しみを感じられる。それまで地図上でもどこにあったかわからなかった町や村や市が何とかイメージできるようになってきたというようなことで、この20年に及ぶ動きが着実に効果をあらわし、成果を積み上げているものというふうに確認をしたところです。

本日のまとめにつきましては、先ほどさせていただいたような三つの項目でまとめをさせていただくところでございます。

皆様の大変すばらしいご発言、ご意見、ご議論をちょうどいしまして、大変ふつかな司会で滞るところもありましたが、お約束の時間どおりにすべての会議、討議を終えることができました。

パネリストの皆様、それから、西座様初めといたしまして、会場にお越しになつてくださった皆様に感謝を申し上げまして、この「風土」の会の分科会を閉じさせていただきます。

ありがとうございました。

7 「山・住」合同分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2013 in Minamishinsyu

「山・住」合同分科会では、「人口減少時代における地域社会の持続可能性を考える」をテーマに意見交換がなされた。

コーディネーター	豊橋技術科学大学	教授	大貝 彰
報告者	島根県中山間地域研究センター	研究統括監	藤山 浩
行政	浜松市	浜松市長	鈴木 康友
行政	設楽町	設楽町長	横山 光明
行政	高森町	高森町長	熊谷 元尋
行政	阿智村	阿智村長	岡庭 一雄
行政	根羽村	根羽村長	大久保 憲一
行政	壳木村	壳木村長	清水 秀樹
行政	泰阜村	泰阜村長	松島 貞治
行政	大鹿村	大鹿村長	柳島 貞康
経済	東栄町商工会	東栄町商工会長	井筒 瞳治
住民	NPO 法人 三遠南信アミ	理事	水島 加寿代
住民	NPO 法人 てほへ	副理事長	大脇 聰
パネリスト	足利工業大学	副学長	蟹江 好弘

(敬称略)

■はじめに

**コーディネーター／
豊橋技術科学大学 大貝教授**

豊橋技術科学大学の大貝と申します。この「山・住」分科会については、私、ここ3年ほどずっと継続してコーディネーターを務めさせていただいております。今年もまたどうかよろしくお願ひいたします。昨年の議論からさらに何か進展があればというように考えておりますので、皆様、何とぞ積極的にご発言をいただいて、ご協力をよろしくお願ひいたします。

以降、座らせていただいて進めさせていただきます。よろしくお願ひします。

SENAの会長で浜松市の鈴木市長様を初め、この分科会の参加者の皆様、どうかよろしくお願ひいたします。

まず初めに、本日の進行についてご説明をしたいと思います。

最初に、これは例年同様ですが、前年度のサミットの議論のまとめと今回のテーマについて、事務局から説明をいただきます。それに続きまして、島根県中山間地域研究センター研究統括監であります藤山浩様から、「新たな地域社会の持続性を考える」というテーマでご報告をいただく予定にしております。これらを踏まえまして、今回の分科会のテーマであります「人口減少時

代における地域社会の持続可能性を考える」ということについて、それぞれが取り組まれている事業等についてご意見をいただきたいというふうに思っております。

それでは、早速ですが、まず、事務局から説明をお願いいたします。よろしくお願ひします。

事務局

それでは、前年度の議論のまとめと今回のテーマについてご説明いたします。

前年度の「山・住」合同分科会では、第1期の重点プロジェクトを総括し、第2期に向け、「中山間地域の生活環境向上に繋がる人・ものの交流促進」というテーマで議論していただきました。

前年度の議論をまとめると3点となります。1点目は、三遠南信自動車道あるいは新東名といった道路基盤整備が確実に交流を促進させているということは疑いのない事実であるということから、そういった点を踏まえ、中山間地域の生活環境向上のための方策を検討していく必要があると。ただし、基盤整備が逆に過疎化を促進させるという側面も否めないという指摘もあることから、その点についても注意を払う必要があるということでした。

2点目は、情報発信力が重要である。地域の持つ魅力的な地域資源をこの圏域内外にもっと発信していく情報発信の体制や方法を整備する必要があるということでした。

3点目は、中山間地域の生活を支えるという意味において、三遠南信地域の県境を越えた防災対策の強化や災害発生時の相互連携が必要であるということでした。

そこで今回は前年度示された三つのポイントを踏まえた上で、全国の中山間地において維持が困難になりつつある集落、いわゆる限界集落がふえてきているような時世の中、いかにしてコミュニティーを維持し

ていくか、また、全人口が減少する時代において自治会活動や祭礼などの社会的共同作業の実施が困難になることに加え、大規模災害発生時の共助も期待できない事態が想定されることから、そのような事態に対応していくため我々に何ができるかを議論していただきたいと考え、「人口減少時代における地域社会の持続可能性を考える」というテーマを設定させていただきました。

どうぞよろしくお願ひいたします。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございました。

今回のこの分科会のテーマは、非常に大きなテーマというか、なかなか議論が絞りづらいところもあるかもしれません、皆様、よろしくお願ひいたします。

それでは、続きまして、島根県中山間地域研究センター研究統括監の藤山浩様より、「新たな地域社会の持続性を考える」というテーマでご報告をいただきたいと思います。

早速ですが、よろしくお願ひいたします。

■報告

島根県中山間地域研究センター

研究統括監 藤山浩 氏

それでは、これから皆さんのがいろいろな意見交換の材料になるような、今の時代をどう捉えるべきか、それから、どうしても中山間地域は規模の経済が働かないのですね、だから、都市スタンダード、特に東京スタンダードのそういった規模の経済ではない、新しい循環の経済といいますか、そういう発想も必要なのではないかと思うのです。そのあたりを話題提供できればと思います。

これは美しい、私が生まれたあたりの島根の風景でございます。これは「愛の一本

道」と呼ばれていますけれども、未来はこのように、もっと紆余曲折あるのではないかなどと思っています。しかも危機は迫っています。私はこれを「2015年危機」と呼んでいますが、中山間地域の2015年危機というのはあと2年ですが、実は、島根はこちらよりもかなり高齢化が進んでいます。昭和1桁の方が主力世代です。私の親の世代ですけれども、ずっとこの方々が地域の産業や社会の担い手です。

さすがに引退が始まっています。例えば、この右側のグラフの農業の従事者で見ますと、この赤いところが昭和1桁の方です。実は島根県における農業を引退される平均年齢が76.7歳になっています。これはこちらも余り変わらないのではないかなどと思うのですが、これを超え始めたということですね。ですから、5年後、10年後はごつそりこの世代がいなくなります。

となると、地域社会あるいは農林業はどうなるのか。ただ、これは単に悲観すべきだけではなくて、逆に、次の世代に入るチャンスもあります。初めてまとまった土地が逆にあいていくわけですから。こういった危機を迎えているというのが一つです。

2番目は、先ほどもちょっと申し上げたのですが、実は、都市の団地がすごいことになっていまして、私、この中京圏のあたりは知らないのですが、中国地方、あるいはそれに先んじて東京、大阪の団地がかなりすごいことになっています。大体こういった団地というのは70年代につくられ始め、80年代に大体入居が終わっています。極めて短期間に同じ世代が入りました。その結果として、団塊世代がその中心ですけれども、団塊世代は2年後に全部高齢者になります。それを契機に爆発的に今、高齢化が起っています。全国的にも秋田と並んで高齢化が進んでいる島根県。その中でも高齢化が進んでいる中山間の町村部を2年後

には続々上回ります。

こういった自給率0%の団地やマンションで起きる高齢化というのは、私は逆に中山間以上に厳しいものがあると思っていました。人と人のつながりとか、そこでどう老後や死を迎えるのかといった問題が今、噴出しております。

先ほども言いましたが、逆に、これからは中山間のほうでそういう都市の団地やマンションで足りないところをカバーするような、こういう関係づくりが逆に求められるのではないかというふうにも思っています。

さて、そういう中で、中山間地域は待ったなしで定住を実現しなければいけない。とにかく昭和1桁が引退するときに、糊代がある形でバトンをつながなければいけないと思っています。

今、島根では全県の中山間地域、ほとんどもう中山間地域だらけですけれども、227の基本的なエリア、大体小学校区、公民館区の基礎的な生活圏です。ここに分けていろいろなカルテをつくって、現状を明らかにした上で定住の作戦を練ろうとしています。これを県としても支援しています。これが227のエリアで、大体昭和の旧村ですが、平均人口が1,370人、500世帯です。

ちょっと画面ではわかりにくいかもしれませんが、色分けしているのですね。これは4歳以下の赤ちゃんがどこで増えたか減ったか。青いところは10%以上減っています。少子化が進んでいる。ここでは濃い黒になっていますが、濃い色のところがありますね。これは、この少子化の時代にあって5%以上、逆にふやしているのです。この分布を見ると、非常におもしろいですね。私はこういう中山間の分析の専門家ですが、これを見たときに非常におもしろいと思いましたね。なぜかというと、5%以上子どもをふやしている分布というのがまるでば

らばらです。一見もう法則性がない。

島根でいう都市部は、この東部の松江、出雲です。こういう大きな都市部に近いほうに赤ちゃんが増えているかというと、全くそういう傾向はないのです。むしろこの5年で一番ふやした子どもも定住オリンピックの金メダルは、実は美郷町というところです。これは客観的ないろいろな状況はかなり厳しいですね。厳しいですけれども、逆に、もう徳儀に足が乗ったということで、もう定住に向けて具体的な戦略を打ち始めています。住宅をつくり、あるいはコミュニティーを集落支援員や協力隊で強化し、イノシシを初めとしたいろいろなおもしろい産業を興していますね。そういったところは、いろいろな地理的な条件は厳しいにもかかわらず、実は8例中5エリアで子どもをふやしている。これはすばらしいですね。

あと、銀メダル、銅メダルはどこかというと、実は離島です。ここが増やしている。銀メダルが西ノ島という、定置網漁業で毎年1組、2組ちゃんと入れている。銅メダルは割と有名な海士町です。ここはかなり、もう人口はほぼ定常化を実現している。むしろ普通に考えたら厳しいところで、逆に今、子どもを実はふやしているという状況があります。

こういったことがありまして、この227エリアで詳細な人口の現状分析と将来予測を役場と一緒にやって全部してもらっています。

では、どのくらい増やせばいいのかというのも全部割り出しています。これをぜひ三遠南信でもやられてはどうでしょうか。これが処方箋です。これは何粒入れればいいかというと、20代前半の男女、それから、30代前半の子連れの夫婦、60代前半の定年の帰郷の夫婦。これをどのくらいふやせばいいかというと、この227のエリア、平均

人口1,370人で2.4組ずつふやせば島根の中山間はずっと続いていけます。もう高齢化率は下がり始め、ほぼ人口も定常化。小中学生の人数もいきます。もうこういうふうに実は結果が出ているわけですね。この2.4組をやるかやらないか。でも小さなエリアでは、本当に1組をふやせるかどうかなんですね。これが島根は542組です。3,794人。これは首都圏人口が3,562万人ですから1万分の1なので、選りすぐりの人々が来てほしいなと思っています。こういう具体的な、県全体としても、圏域としても、あるいは各それぞれの地元でも、単に人口が増えればいいなとか、高齢化が下がればいいなではなくて、具体的にあと何組なのかというのを割り出した上で、やはり作戦を考えるときが来ているように思います。日本は首都圏に集まり過ぎだと思います。非常にこれは災害も含めてリスク、危険もありますね。こういったことをぜひ全国の中山間で作戦を立てて、ここで一緒に暮らそうという定住ののろしを具体的に上げるということではないかと思います。

ただ、誰彼とはなく来ればいいというわけではないです。うちの集落も今、この私も入れて、5年間で1家族ずつ増えています。これはすばらしいケースですが、やはりみんなどんどん一緒に草刈りをやってくれるような人が増えるから本当は良いわけで、やはり選ばない地域は選ばれないということだと思いますから、そういう宣言をしていく必要があると思います。

ただ、定住をやるためににはいろいろ厳しい、乗り越えなければいけないハードルもあります。例えば、島根県でも先ほどの227エリアで詳細な、どこにどういう拠点が残っているか全部つくっていますが、ガソリンスタンドが今、激減ですね。もう今やガソリンスタンドがあるところが半分を切ってしまった。こういう状況です。だか

ら、それぞれ分野、縦割りの拠点では人口が減る中で、どんどん実はビジネスが成り立たなくて、減っているわけです。こういったのをどうするかという知恵が要る。だから、大都市に照準を合わせた規模の経済で分野ごと縦割りの仕組みではなかなか保たないわけです。

これは、2007年に当時の広域地方計画との絡みで八つの市町村をモデル的に、一次的な拠点含めて全部の拠点を落としてみました。どこにどれだけ今、残っているのがあるのか。こういった状況を把握しながら、きちんとこれをモニターしていくなければいけない。あるいはそういった拠点の配置、あるいはそこへの時間、距離、これを全部調べました。どういう関係があるのか。そこはどういう定住条件等へ響いてくるのか。こういうのをやりましたが、その一つを紹介しますと、これは一次的な医療、例えば診療所ですね。最寄りの内科医まで何分で行けるかということ、もう一つ、二次医療、総合病院ですね。大体診療科目13科目以上をこれにしましたけれども、これで一次医療も9分以内、10分以上みたいな感じ、そこで切ったわけですね。総合病院には29分以内か30分以上か。これで分析してみたところ、非常におもしろい結果ができました。それは何かというと、それぞれ最寄りの一次医療まで9分以内、総合病院29分以内という両方の条件が満たされたときのみ定住条件はかなり向上しています。そこからずれると、もちろん両方がだめなところはかなりひどいですね。10%ぐらい5年間で減少してしまっている。高齢化度も高い。

ところが、どちらか、広域的な総合病院だけ近かったらいいかというと、最寄りの病院が9分以内になかったところは、実は、もう定住条件は悪化しています。逆もまた真なりで、最寄りの診療所まで9分以内だが、総合病院までは30分以上かかる。これ

も悪化しているのです。

だから、何が言いたいかというと、単に広域的にどかんと拠点を建てれば良いというものではない。バランスなのですね。最寄りのところにも一定の拠点があり、そして、広域的にも30分程度ではそこへ行ける。この条件を満たすような圏域づくりが中山間、あるいはその圏域としての定住条件にも非常に必要であるということが実態面から明らかになっています。

あとはこれをどういうふうに満たしていくか。特に、最寄りの身近な拠点機能をどう守るかなんですね。先ほどのように放つておくと、どんどん、どんどんなくなるわけです。それで今は、こういう複合型の取り組み、いわゆる合わせ技というのを私はお薦めしています。

これは高知県の例ですね。わずか人口300人のところでガソリンスタンドが撤退することになった。これはもう困るわけですね。20キロメートル、30キロメートル先まで、次に行かないといけない。

ガソリンスタンドがなくなるという個別課題に対して、単に個別解決をしてもダメですね。それは、根っこは複合的なものですから。

こここの住民は、自分たちで大宮産業という株式会社に3分の2の住民が出資しました。しかも、その個別解決だけではなくて、やはり売店も一緒に復活させようと。「そこは地域のたまり場であってもいいよね。肥料とか無いものは一緒に仕入れ、そこで配達してもらおう。せっかくおいしいお米ができるのだから、みんなで売ろう」。こういうことで立派にビジネスをここで成り立たせています。2人の従業員さんを雇用して、こういった知恵が分野を横断した合わせ技でやっている。大体ガソリンスタンドが6割、売店が1割か2割、ほかで2割ぐらい稼いでビジネスが成り立つような仕

掛けです。

高知県は県としては昨年の4月から画期的ですが、中山間対策では縦割りをやめました。それまではばらばらに福祉は福祉、医療は医療、鳥獣対策は鳥獣対策、集落対策は集落対策でやっていた嫌いがありました。でもここは県職員を60名、この10年間張りつけています。現場の市町村職員と、あるいは現場の人と一緒に汗を流してという、すごいことをやってきました。そういう中から、やはり縦割りではだめだということになりました。地域のほうは全体で、地域ぐるみでいろいろな問題を解決していくかなければいけないということで、こういった集落活動センターということで、その地域の実情にあわせて一緒になってやる。そういうボトムアップ型のものをやっています。しかも、そこに高知ふるさと応援隊という人材を張りつける。これは総務省の協力隊支援員を使ってもいいのですけれども、プラス100万円、県が支援しています。こういった形のものをやり始めていまして、私もこちらのセンターの推進アドバイザーをしています。だから、こういった形が必要なのではなかろうか。

そして、昨日、私は喬木村でも講演させていただいたのですが、拠点のつくり方も、今までは補助金も縦割りだったので、全部ばらばら、ばらばら、いろいろ分散的にやってきました。そろそろ、先ほどの一次的な生活圏のエリアではまとめてやっていく必要がある。そうでないと人と人がまず出会えません。あるいは非常にむだが多い。だから、「郷の駅」というものにいろいろな機能を集めて、それで交通の流れも人も物も、これは法令の改正が必要なところもまだありますけれどもやっていく。そして、今後は循環の経済ですから、いろいろな地域のローカルなエネルギーもここで循環させていく。

私はまきストーブで暮らしていますが、まきの駅、木の駅もここにある。電気自動車もここでチャージすればいい。そして、それは災害のときには地域の防災ステーションとして機能する。遠いところからいろいろなそういう建設機械がやってくるのでは間に合わないですね。やはりここにあって、農業にも林業にもそういうのを使い回す。こういった仕組みが本当は要るのではないか。

国土強靭化というのがありますが、それ自体は非常に大切なことです、大きな、どーんとしたネットワークなしではもたないです。やはり各地域にこういった核となるような施設をつくっていくことが私は国土強靭化に欠かせない要素だというふうに思っています。

ちなみに昨年から国土政策局で「集落地域における小さな拠点検討委員会」というのが始まっていて、私も委員です。この「小さな」というのがすばらしいですね。「小さな」というのは、国の省庁でほとんど使えない言葉です。小さいものはだめだというのがこれまでの国のやり方なのですが、初めて、小さな拠点で、合わせ技で集落を支えていくという発想が生まれています。今年から12の地域で、この喬木村も含んで、実際にこういうのをつくるために検討を始めようというものが始まっていますから、少しづつ風は変わり始めているかもしれません。

そして、3年前になりますか、イタリアの山村がものすごく元気だぞという噂を聞きまして、私も行ってみました。これは本当に元気でしたね。イタリアは合併していません。コムーネという自治体が全国に大体8,000ある。平均人口7,000人ですが、山間部に行くと500人、1,000人の村がほとんどですね。でも、非常に元気なのです。

なぜ元気なのかというと、徹底的にそこ

の暮らしというのを、地元の中で衣食住をつくり上げている。例えば、既製品のパスタなんかは食べない。このおばあちゃんが毎日打つ手打ちパスタを食べています。だからそこにまた小さな経済が生まれますね。チーズも伝統的なものでそこでつくって、さらに、ここは輸出までしているのです。やはり負けたなと思ったのは、窓枠まで地元の職人さんがちゃんとつくっている。あるいは、そこの金具も鍛冶屋さんがつくっています。ストーブも、それから、ピザも地元のまき。こういうところでやはり定住する必然性が生まれているわけですね。ただ、それは守りではなくて、村から村へ行けば、チーズもワインもパンも建物も全部違うわけですね。だから、私たちも含めて、観光客が押しかけます。それが攻めにもなっているというのがすばらしいと思いますね。

この三遠南信は非常に多様性に富んだ地域だと思います。30以上の自治体があり、388の小学校区がある。それがこういった形でどんどん、その伝統も生かしながら多様性をやることが本当はすごく可能性を秘めているのではないかなと思います。そこで388の定住のストーリーがあるはずです。

今までの中山間地域の対策というのは、規模の経済で、特定地域のひとり勝ちですね。こういうのをやってきました。もう何かだけ。レタスはレタスだけとか。だから、それだけだと、それ自体が成功するのは悪いことではないかもしれません、ほかのところがないがしろになる。中山間は、特に中国地方、島根もそうなのですが、なかなか全国市場に向けて1.0になるだけのロットがそろわない。0.2とか0.3ばかりです。これを一つだけひとり勝ちさせて、あとはまあというということになると、循環も途絶えれば資源も荒廃します。やはりイメージとしてはこういう形で、先ほどの

大宮産業ではないですが、0.2、0.3、0.2、0.3で1.0をつくるような、こういうことをしないと小規模分散的な資源とか、その営みというのはどんどんなくなってしまいます。あるいは拠点にしてもそうです。ガソリンスタンドでは0.3にしかならない。あとはやめてしまえということになる。それではどんどん消えるばかりで、定住条件を守れません。

そのためには、先ほどの「郷の駅」とか、あるいはそれを組織して支える集落活動センターみたいな、結節機能とここでは呼んでいますが、こういったものを各地元レベルにいろいろな形でつくっていく必要がある。あるいは、それを実際に支える人材を配置していくあるいは地元でも雇用していく、こういう仕組みが要るのではないかとは思っています。

今、全体としては循環の経済への移行が急がれていると思います。今までの規模の経済でどんどん使い捨てであれば大都市の優位性が目立ちましたが、時代も2周目に入っています。団地も1周目はよかったです。どーんと新しい家が建ち並び、学校があり。今、2周目になったところで、もう次が見えていません。中山間地域というのは、ある意味、何百周目の地域社会のはずですね。そのことを思い起こし、やはりこここの資源を今みたいな合わせ技で小規模分散だけれどもきっちり使い切るような、こういう中に次世代の定住を呼び込むような戦略が本当は求められているのではなかろうか。

そういう中に一緒になって加わってもらうような新しい移住者を呼び込む。そのためにはしっかりした作戦を立てる。冒頭申し上げたように、1年何組なのか。これを余り急いで、ぼこっと来たらダメですね。だって、団地と同じことになります。

(録音切れ)

そういう長期的な戦略をつくるのは非常につらい作業がありますが、そういうのを各地元でも、そういうものの地元で足りないところは各市町村、そして、こういった三遠南信などの広域でも補完していくような、そういうものが本当はここならできるのではないか。そして、そういった未来の地元をきちんとつくっていく。プロフェッショナルとして、例えば、地方公務員などをもう一回養成し直す。あるいはそういったものをここから、先ほど申し上げたように、輩出するような、こういう人材育成の機能をぜひ三遠南信のみならず、東日本はここで受け持つぐらいのことでやっていただければと思っています。

今、中山間センターも一つしかないのです大変です。私も年間移動距離10万キロメートルみたいな感じで、全国を駆けめぐっています。ここならできると思うのです。これだけいろいろな、数百人の自治体から80万人の浜松市まであるという中で、どんどんそこで鍛えて、実際に現場で使えるようにして、全国の中山間に配置していくようなことができれば本当はすばらしいではないかと思っています。

以上で報告を終わらせていただきます。
どうもありがとうございました。



■意見交換
コーディネーター/
豊橋技術科学大学 大貝教授

どうもありがとうございました。

非常に多くの示唆を含んでいますし、この三遠南信地域のこれから取り組みに幾つものヒントがあったのではないかなどといふうに私自身思います。

ただいまの藤山さんの報告について、ご質問があればお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。

それでは、今、非常に示唆に富むお話をいただきましたので、そのことを少し頭に置きながら、これから意見交換に移ってまいりたいと思います。

時間が限られていますので、原則お一人当たりの発言は3分程度にさせていただきます。円滑な進行にご協力をよろしくお願いいたします。

それでは、今回のこの分科会のテーマ、人口が減少していく状況の中で、この三遠南信地域の社会、特に中山間地域の持続可能性を考えるというテーマであります。

まずは、先ほど藤山さんのお話にもありました、要は定住というテーマ、あるいは、この地域の活力をどう維持していくか、こういった取り組みはそれぞれの自治体で積極的に取り組まれていると思います。この事例について、まずご紹介をいただきたいというふうに思います。

事前にアンケートをそれぞれの首長さんに対して送らせていただいて、それは回収されています。それに沿って、こちらで少し指名をさせていただきますので、よろしくお願ひいたします。

まず、トップバッターとして、浜松市の鈴木市長よりご報告をお願いできればと思います。

よろしくお願ひします。

浜松市 鈴木市長

浜松市は平成17年に12市町村が合併をするという、これまででしたら考えられない

ような合併をして、今の浜松市、政令市になりました。人口が、大体佐賀県と同じくらいです。だから県が一個できたようなものでございまして、当時、旧浜松市が人口62万人、一番小さな旧龍山村が1,500人。62万人から1,500人までの、全く規模も性格も違う12の基礎自治体が一つになったということです。ですから、東大のある先生が「国土縮図型都市」というように言ったのですが、言い得て妙でございまして、日本をギュッと小さくしたような町になったということでございます。

ですから、浜松で都市経営が成功すれば、これは、私は全国でモデルになれる自分なりにそう思っているわけでございます。せっかく一つになったのだから、私は、いかにして都市部と中山間地域の交流を進めるかということを考えています。今まで自治体が違っているとなかなかやりにくかった部分が、一つになったわけですから、都市部の活力をいかに中山間地域に活かすか、逆に、中山間地域の持つ潜在力をいかに都市部に波及をさせるかということあります。

そうは言っても、浜松市は今、もう限界集落が127ですから、多分日本一限界集落の多い自治体ではないかというように思いますので、頑張ってやっていかなければいけません。基本は、その都市部と中山間地域の交流、連携をどう促進をするかということでございます。

幾つかポイントがあります。一つは、どこでもつくると思いますが、中山間地域振興計画です。これは総合的なプランとして、236の事業があり、水、生活用水の応援から、地域公共交通の維持、林業の振興、浜松山里いきいき応援隊のような、若い人たちをいかに送り込むかというような、生活支援、地域支援、産業支援まで、総合的に実施しているのがこの振興計画です。

少し独自に始めているのが中山間地域まちづくり事業です。これはNPOからの提案をいただきまして、それを採用して、いろいろな中山間地域振興事業をしてもらおうということで、例えば、採択されたものは「WEB版道の駅による天竜区観光産業活性化事業」。これはウェブ上で道の駅をつくって、観光情報、あるいはいろいろな物産情報をいったものを発信する事業です。その他には、「中山間地域自立高齢者支援事業」といったものとか、あるいは遊休農地を活用した「そばの里づくり」とかがあります。NPOの提案によりまして、総額6億円の予算を用意し、大体交付期間は5年間で実施してもらうというものです。

それから、「中山間地域交流ネットワーク事業」。これこそまさに、いわゆる都市部の例えは自治会と中山間地域の自治会を姉妹自治会にして交流をするとか、学校を姉妹校にして交流をするとか、あるいはいろいろな民間団体の交流を促進するとか、ボランティアを送り込むとか、こうした都市部と中山間地域の交流ネットワークを行うという事業です。

最後は、これもいろいろなところで実施していると思いますが、「田舎暮らし推進事務局」でして、これを設置し、総合的に今、田舎暮らしの相談に乗っています。実績では、平成24年度で22件の相談がありました。

こうした取り組みを通じて、できるだけ中山間地域の活性化、定住人口の拡大を図っているというのが浜松市の状況でございます。

コーディネーター/ 豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございました。

最後の田舎暮らし事業の中で相談が22件あったということですが、その中で具体的

に移住というか、定住に結びついたような例はあるのでしょうか。どうですか。

浜松市 鈴木市長

幾つかあります。最近おもしろいのは、東京のコンサルタント業をしている若い人が来まして、家族で水窪というところに移住しました。今、東京と田舎と両方で事業をやっているのですけれども、「あなたの知り合いの企業をどんどん連れてきてください」とお伝えして、IT企業を水窪に誘致したり、人脈を活かして都市との交流を進めたりしました。意外と浜松の田舎の良さというのは、割とアクセスがいいものですから、例えば、春野からは1時間で浜松駅まで行けます。でもそこは一応過疎指定を受けているのです。普段はものすごく環境がいいところで、生活がでけて、必要があれば、東京に2時間から3時間で行けます。でも、そんなに頻繁に東京へ行く必要がないなら、「30分くらいで浜松の都市機能も十分活用できるので、田舎の良さと都市機能の両方活用できる」と、こういう良さを売り込んでいこうと私は言っています。これからそういうことで人を引っ張ってこようと考えています。

申しわけないですけれども、先生のところの島根だと大変かもしれないですけれども、浜松から新幹線だと1時間15分で東京まで行ってしまいます。そういう地の利のよさというのを活用して引っ張ってこられるかなというように思っています。その方をオピニオンリーダーみたいな位置づけにしまして、今、地域の活性化もやってもらっています。

泰阜村 松島村長

報告したのは、若者定住住宅をつくっているという話だったのですが、その前に、今日の前段で県境地域との連携という話が

ございましたが、もしかしたら鈴木市長さんのご理解かもしれません、私たち、救急患者が発生して長野県のヘリコプターがだめなときに、静岡から来てもらうというのはごく当たり前みたいになっておりまして、そういう点では、いい意味で県境のこの連携というのが非常にうまくいっているなということをここ何年間か実感しております。これも三遠南信連携のおかげかなということをつくづく思っております。

平成6年に若者定住促進条例という条例をつくりまして、例えば、Iターン者が住宅を建設したら100万円補助金を出すとか一時期は流行りました。国は、個人の財産形成に補助金を出すのはまかりなんらんと言って、週刊誌で例のいろいろ問題になったのですが、そういうようなことをやってきました。

川を挟んだ隣の下條村というところが、いわゆる行革で財政的に非常に豊かになって、住宅建設して、出生率も高くて人も増えたという話で全国的に有名ですが、私のところも今までやってきたのも、どちらかというと中心市飯田への通勤者のベッドタウン的な要素で、下條村というところもそうだったし、私のところも、今、そんな感じで一部に住宅をつくっておりました。しかし、平成6年からずっとIターン、Uターンということを取り組んできましたが、結果的に、住宅建設するだけでは人が来るわけではないということを最近感じております。

それで、私のところにJR飯田線の温田という駅があるのですが、その住宅もつくったのですが、私は、温田というところは飯田に遠いので人気があるのかなと思いましたら、そこへIターンされて子どもさん1人を連れてきた方は、温田駅まで歩いて5分、阿南病院まで歩けば七、八分で行けるところに住んでいます。温田駅には高

島君という方が店を出していく、高島屋というのですが、名古屋の駅に行っても高島屋だが、泰阜村にも高島屋がある。Iターンしてきた人が、「駅に近くて病院も近い。村長に山の中だとだまされて来たけれども、全然問題ない。駅に近くて病院が近いというのは、こんな理想的なところはない。」と言われて、私は、「あっ、そういうものなのだ。」と気付かされました。

環境整備としては、やはり暮らしていくのに安心していけるようなことが必要であることと、それから、先ほども言われましたが、19集落に分かれています、地域とのつき合いも大事なので、そういう人間関係が重荷にならない人、道路作業なんか一緒に出てやって非常に楽しかったというようなことを感じられるような人で、そういうようなところがという点で、やはり、単なるベッドタウンのことよりかは、この泰阜村という、本当に山の中で住むことが、「安心して住めますよ、住むことは魅力的ですよ。」というような発信をしていくことが大事で、そういう人が来たいと言ったときに、すぐ入れるための住宅を、今、また新たに建設しているということです。

大鹿村 柳島村長

大鹿村は人口1,130人ほどで、小渋ダムというダムの奥にある小さな村でございます。人口につきましては、昭和25年に5,000人を超えているという人が住民登録されていたのですが、昭和36年の水害、また、その後のダム建設等により、だんだん人口が減ってきて、現在は1,130人という村です。2割ぐらいに減っているということと、もう一つ、高齢化率が50%という、村全体限界集落と言われればそれまでかと思っております。

現在、Iターンの方が非常に多い村で、200人有余はいるのではないかと思います。

2割から3割近い方がIターンの方ではないか、こういうふうに思っております。この方々は、主には若い方は農業を主体に自給自足を目指してみえられる方、また陶芸のような、いわゆる芸術的なものをを目指しておられる方、それに60歳定年後の、リタイアして、あとはのんびり環境のいいところで暮らしたいというような方々がIターンをされてきております。

村が地域を維持していくには、やはり人がいないとダメという観点から、いろいろな事業をやっておりますが、その中で、平成24年度からですが、プチ移住ツアーや、大鹿に興味があって、将来定住をしてみようというような方に村に訪れてもらいまして、本当にプチで2泊3日ですが、農作業体験とかをしていただいて、大鹿村というものを感じてもらう、そういう取り組みを民間の有志の方たちが始められました。

長野県には元気づくり支援金という、かなり幅の広い補助制度がありまして、それを使ったり、村の一部補助を使ったりしまして、2年間で6回ほど実施されました。1回当たりの参加者は非常に少ないので、全体で20数名ほど今までに参加されて、現在までに2世帯、3名が空き家を利用して定住されました。

この定住の内容ですが、今、泰阜村さんは住宅を建設されるというお話をいたのですが、大鹿村の場合、人口が2割になってしまったということは空き家がいっぱいあるということで、その空き家をどう活用するかということも課題になっていた。これも平成24年度からですが、空き家を所有している方が希望すれば、賃貸または売却によって、そのうちを活用する場合には村の空き家情報というホームページに載せてもらうことを条件しています。みんなが手をつけるのに一番困っているのは今まで使わ

れてきた家財の片づけですが、特にお年寄りがずっと住まわれていて突然亡くなられると生活のそのままが空き家に残っているわけで、それをどうするかというのは、その子どもさんたちではなかなか判断がつかないというところがありまして、「それを片づける場合には、片づけ費用の8割、上限10万円を補助します。そのかわり空き家を売ったり、貸したりしてください。」ということを始めました。

ただ、古い家ですので、改築するについても、その工事費の5割、半分、上限50万円を補助しますというルール。もう一つ、空き家となっているものについて、景観上も悪くなりますし防災上もよくないという理由によって、これはあくまで所有者の意思でございますので、解体したいという意思があれば解体費用の8割、これもやはり50万円を補助するということを平成24年度から始めまして、今までに家財の片づけをした人が8軒、改築の補助が5軒、解体補助が5軒。だから、5軒の古い家はもう解体されて更地になったということでございます。

改築補助を受けた5軒については、すべて転入者、また、村内で世帯を分けて入りたいというような人たちが入りました。約10名がその中で生活しております。ただ、年齢とか職業などは全く統一性はありません。その10名のうち6名は、この2年間の間のIターンの方ということで、6名のうち3名は、先ほどのプチ移住ツアーの方という、そういう連携で、現在いろいろな人が大鹿村に興味を持ち、また、住んでみようという方向で、一応村のホームページから流れた制度に乗っかって、ある程度の方が住んでくれるようになってきたということをございます。

コーディネーター/ 豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございます。

もっといろいろな取り組みのご報告をいただきたいのですけれども、時間が限られておりますので、今、三つの市、村のご報告をいただきたいのですが、恐らくそれ以外の市町村でも様々に定住に向けた取り組みはそれぞれ独自に取り組まれていることと思います。

私自身の話になりますけれども、数年前に豊橋市と浜松市の都市部の若い、20代から40代の人にアンケートをして、「中山間地域に住みたいですか」、「もし何らかの条件が整ったら住みますか」という質問をしたら、「可能なら住みたい」という人が大体2割以上いました。だから、そういう中山間地域に定住を目指そうとする潜在的な人は相当数いるということだろうと思います。

そういう意味でも多分、山の魅力をもっと発信していくべきだろうし、受け入れる側はその環境整備をしっかりとやっていくということが必要なのかなと思います。でも、まさに今、それがそれぞれの市町村で着実に取り組みが進められていると感じます。その成果が少しづつあらわされていくような気がしてなりません。

時間がないので、藤山さん、今の三つの事例について、何か簡単に感想がありましたら。

先に松島村長からご意見があるようです。

泰阜村 松島村長

泰阜村の場合は、その住宅はI・Uターン用が50%。もう50%は、地理的条件から結婚すると親元を離れて飯田に行くというケースがほとんどです。だから、それを村の中へ、世帯分離を止めようという意味の住宅もやはりあるということですね。空き

家は、うちは住んでくれるなら200万円ぐらい改修費用を出すけれども、大鹿のようにいかない。大鹿は美しい村で、うちは美しくないから、空き家はうまくいっていないですね。

**コーディネーター／
豊橋技術科学大学 大貝教授**

私、先ほど言い忘れました。私も島根県の中山間地域は何回か訪れさせていただいてヒアリングなどさせてもらったのですが、やはり島根県とこの三遠南信地域の一番大きな違いは、豊橋、浜松という都市部がすぐ近くにあるということ。アクセスという意味では本当にいいです。だから、先ほど東京からも来やすいしという話。さらに言えば、この飯田には14年後にはリニア駅もできますし、三遠南信道も全線が開通すれば、極めてそのアクセスという面では生活をする上で利便性は高まります。そこはこの三遠南信地域の一番大きな強みだろうというふうに思いますので、そういうこと、それぞれの地域ごとの地道な取り組みをうまく結びつけていくことが重要なのかなというふうに思いました。

時間が予定より過ぎていますが、藤山さん、何か感想があれば。

**島根県中山間地域研究センター
研究統括監 藤山浩 氏**

今、やはり3・11以降、東日本大震災以降、ちょっと変わってきたなと思います。そういう若い人が本当にまじめに、これからどこで子どもを育てようかというのが入ってくる事例は、多分こちらでもありますし、島根も非常にふえていますね。そこへ応えることが非常に必要なのではないかと思う。特に女性というか、今まで男のほうがロマンを求めてくるような部分もあったのですが、今はお母さんが本当に子ど

もをこういうところで育てたいということで、今、島根県でも兼業型就農コースというのをつくっていまして、その中で当たっているのが半農半看護です。看護師さんをやりながらプチ農業をやるような。だから、いろいろなそういう真面目にやっている人を受け入れるというのがすごく重要になっているのではないかなというのは、お話を聞いても思いました。

**コーディネーター／
豊橋技術科学大学 大貝教授**

(テープ交換 録音切れあり)

・・・・・また、時間的制約が解消されつつあるということで、今、ご紹介いただいた取り組みというのが、恐らく新しい段階を迎えつつあると思います。今、藤山さんが言われましたように、若者の意識も3・11以降、少し変わりつつあるといったふうな、非常に中山間地域にとっては未来のある話が幾つも出てきたかなというように思います。

それで、続きまして、こういった取り組みを定住の促進、あるいは地域活力の維持に結びつけていくというそのために、そもそもとこの中山間地域、特にこの三遠南信地域には多くの魅力あるいは資源というものがあります。もうこれは皆様もそれぞれがしっかりと認識をされているところかと思いますが、その点について、もう一度ここで確認できればというように思います。

魅力という場合に、それは内から見た魅力というものと、あるいは外部から見た魅力というものがあるかと思います。それぞれの視点からご意見をお聞かせいただきたいと思います。

まず、この点につきまして、設楽町の横山町長からご発言をお願いいたします。

設楽町 横山町長

私の町は、ご承知のように、愛知県の西北部に位置しているところであります。西は豊田市、そして南は新城市、東は東栄町、また、北は豊根村、根羽村というところに隣接している町であるわけですが、こうした町の中で65歳以上の高齢化率というと、やはり43%というようなことで、若者が極めて少ない。そんな状況であります。限界集落、中には地域コミュニティの形成が崩壊しているというような地域もあります。そして、これを今後立て直す方法は何かというふうに問われて、すぐに解決に結びつく方法があるわけではないというのが正直なところでありますが、これは私の町だけではないと思っております。

さらに私の町は国によって大ダムの建設交渉が過去40年にわたってあります。これも現在、まだ進められているという状況にあって、これによって集落全体は全戸が移住をしていくというようなことで、集落がなくなっていく、そのような状況がある中で人口減少に拍車がかかっていると、こんな状況です。

こうした中にあって、私の町で住み続けていく住民の方々というのは、やはり将来の町の向上に期待をされているということはあります。これは当然なことであります。私はこれから地域コミュニティの存続をしていく一つの方法として、また、町の将来を見据えて、ここで生活をして、今以上によりよい形、こうしたことをつけ上げる手段としては、住みよい環境を売りにしていく町、こうしたもの強調していくたいと思っております。

特に、子育てというのは、自然環境に恵まれている中で、しかも人間性が豊か、そして、今まで私の町は教育施設、学校等を重点的に整備してきておりますので、こうした環境を強調する、子どもが育てやすい

町なのだということを広くPRしていくたい。中に、家であるじの方、若いお父さんが仕事を求める、そうしたときに、うちの町だけで職を見つけようと思うと、今の若い人たちというのは都会志向というか、どうしてもそちらのほうに目が向いていくというような状況があります。私の町は新城市へ30分、三遠南信の自動車道、今度、鳳来峡インターまでということになると40分から45分ぐらいかかる。そういうような状況の中であるわけですけれども、やはり若い人たちに魅力を感じてもらえるというのは、こうした道路整備、ライフルラインの整備。特に私の町は、今言ったように、高速道路や高規格道路まで移動するのにまだまだ時間がかかるという、そういうイメージがある町でありますので、ここを何とか積極的にこうした道路整備を重点に置いていきたいと、このように考えております。

そうした中で、今申し上げたように、地域の活力を維持していくためには、どうしてもこの若者の力が必要不可欠です。若者に定住していただくためには、今言ったように、雇用の確保、それとともに生活の利便性、今、申し上げたような環境を整備していく、こうしたものを前面に出していく必要があろうと思っています。

そして、外部から見た中では、この豊かな自然が本町の唯一の観光資源ということをPRしながら、特に森林が本当に活気づかないというような中で、これを何とか生かそうということで木質のバイオマス、これを使った発電、これに取り組もうということで考えております。

この発電というのは、単に私の町で所有している山林だけがターゲットではとても資源の量としては追いつかないということで、近隣の町村、新城市以北、我々北設楽郡、そして、さらには浜松エリア、天竜川流域、そして、この南信州、こうしたエリ

アまでを含めた材の獲得というか、確保をしなければ安定した材の供給ができない。そのようなことを思い浮かべながら、エリアとしてはそういうところまで広げる、そうしたところでも発電というものを注視して、これからこれに取り組んでいきたいと、こういうふうに思っております。

こうしたこれから時代、人が生活する上で何か重要か、今もいろいろお話を聞いていただきましたが、人が暮らしていく中での価値観がどういったところでの視点で評価がされるかという、こうしたことが考えて直される時代が来ると思っております。決して田舎が住めない所ではないというように、人の感覚が変わってくるときが来るのだろうと思っております。

そのためには、こうした住む環境に不足のない状況をつくり上げる。こうしたものを見備し、また、広く情報発信もしていくことが必要だろうということで、こうした地域があるということの存在を強調していくことがこれからも必要になっていくと思います。

根羽村 大久保村長

私どもはちょうど愛知県の豊田市との境に位置した村でありますて、川が矢作川という川で、愛知県で一番高い山の茶臼山を源流に、117キロメートルのコンパクトな川が流れているところです。

そんな中で、古くから矢作川というのは人の命を育んできたという歴史を持っておりまして、特に安城ヶ原、安城台地にある明治用水土地改良区が100年前に明治用水を開削したときに、この水は山から来て、山がだめになると水がないというような形で、100年前に水源林を根羽村に確保したというような歴史を持った形のところでして、その後、昭和時代に入っては、今度は公害があって、その公害闘争が上下流で起

きて、さらにそれが今度は上下流の連携のあった「流域は一つ、運命共同体」というような形で取り組んでいる地域です。

そんな中で、矢作川といいますと、今、川の上流では何が起こっているかということは、もう全国共通ですけれども、そこでは大変なことが起こっているよということは、上流に人が住まなくなくなったら、山が荒れて、川が荒れて、それで、中流の皆さんのが住んでいる川が荒れて、それで、特に海まで行って海が荒れてというような形で、国土が全部壊れてしまうよという減少が今起こっているということを、私どもも現実でありますし、そういった状況も下流の皆さんにいろいろな形でお話といいますか、情報を共有させていただきます。

そんな中で、私どもの村では、何とか地域に住み続けられる仕組みをつくりたいなということをやっておりまして、先ほどの講演の中でもいろいろ出てきておりますけれども、まず、地域に住み続けるためには、そこで働く場所、雇用の場所があること、そして、地域の中で小さくてもいいので経済、お金の循環があること、もう一つが、いろいろなサービスの循環がその地域でできる、その三つの仕組みを小さいなりにつくっておけば人は住めると思っております。それが、何人規模が適正というのはそれぞれの地域の考えることだと思いますが、私はそんな感じを持っておりまして、そのためには、やはり生きる術としては、昔といいますか、今までみたいに、大企業に勤めてたくさんの高収入を得るというのは、もう田舎では絶対無理なので、林業、山で勤めながら、例えば農業、少しお百姓をしながら、そして、すばらしい環境の中でインストラクターとか、何かそういったような、少し商売をしながらという、そのハイブリッド的な生き方というのもあると思うので、そういう田舎ならではのハイブリッド的な

生き方の仕組みというのも一つの方策だということで今考えております。それ以外に通常の仕事もあります。

それで、さらに、私どもは92%が山でして、その木を何としても生かさなければいけないという形ですので、今、林業、丸太に付加価値をつけて住宅用材として販売するまでのトータル林業という仕組みを進めています。さらに、今度は地域材というよりも、それをいかに使ってもらうか、いかに使うかという仕組みをつくらないことには意味がないので、今、矢作川の下流に向けて、流域の皆さんと地域材の枠を越えた矢作川の流域材とか、天竜川なら、またこちらの何とか流域材でもいいし、南信州流域材でもいいと思うし、三遠南信何とか流域材でもいいと思いますが、そういった仕組みをつくって、使ってもらえるところに資源を使ってもらおうという取り組みも始めていますので、そんなところに一つのきっかけを求めていきます。

今、間伐をしても山の中に木を放置したりとか、木を出してきても枝とか頭は捨てたりしてしまいますが、それを何とかエネルギーに活用したいということで、根羽では森林組合の乾燥機に工場で出るおがくずとかバーク、皮を使ってその熱源としたり、さらに、今度、根羽村でも高齢化率が非常に高いということで、村だけではなくてもそういった高齢者の福祉施設、いわゆる特養はできなかったわけですが、民間のお力をかりて、公設民営で小さなそういった福祉施設をつくりまして、その熱源にも木をエネルギーとして燃やそうという仕組みを今つくっております。

さらに、まきを燃やすか、チップを燃やすか、ペレットを燃やすか、さんざん議論したのですけれども、やはり根羽では、今、まきを燃やそうということになりました。ただ、まきを燃やすときには、どうしても

まきをくべる人が必要ですが、では、灯油やガソリンスタンドと同じように、まきをくべる会社というか、まきをくべるところまでつくってしまえば、そこで一つの働く場所ができますので、それまでを入れて1立米幾ら、1回のお金が幾らという、そういう仕組みもつくろうかということに今、取りかかったところであります。

あと、もう一点は、やはり未来を担う子どもたち、次世代を担う子どもたち、地元の子どもたちにいろいろな体験、「ああ、根羽に住んでよかったです」ということをしつかり体験してもらいたいという取り組みをしているのとあわせて、矢作川の流域の、今、安城市さんと私どもは深い関係といいますか、いろいろなお世話になっておりますので、お父さんは安城市で仕事をしていただいて結構ですので、根羽のすばらしい環境で、できればお母さんと子どもさんが、そんなにたくさん要りません、私ども1学年で多分1人か2人、ここへ来ていただければ、学校はちょうどコンパクトな学校で回っていきますので、ぜひそんな形で、「お母さんと子どもさん、1年で結構ですので根羽へ来てみませんか。」というのを今まで口では言っていたのですけれども、今回から正式に、もっと公に言おうということですので、公にして、そういうことを皆さんにお話ししようかなと思っております。

そのような形で、やはり流域というのはお互いに助け合いながら生きていかなければいけないと思いますが、ただ一番は、その地域がやはり持続可能であるというか、生き続ける仕組みをつくっておいて何か情報を発信していかないと、困った、困ったという発信では難しいので、私ども、本当は困っているのだけれども、ぜひそのような、今の村づくりを理解してもらって、そこに応援してもらえる人に応援してもらう、

そんな仕組みづくりをやっているところであります。



**コーディネーター／
豊橋技術科学大学 大貝教授**

ありがとうございます。

済みません。私が指名する順番を間違えてしまいました。本来なら大久保村長さんにはその後のところでご発言いただくはずであったのですけれども、済みません。今、仕組みづくりというお話をいただきました。

話をもとに戻しまして、この地域の魅力とか資源という視点から、阿智村の岡庭村長からお願いします。

阿智村 岡庭村長

阿智村も生まれる子どもが50人から60人、お亡くなりになる方が80から100人ですから、放っておけば本当に人口がどんどん減っていくわけですから、どうしてもやはりどこかから定住人口を入れてくる、その皆さんたちに集落や何かも維持していただくということが大事になってくるわけでございます。

それで、考え方としては、ただこちらへ来ていただくのではなくに、村の持っているさまざまな資源を活用する、そういう中で、起業をしていただく、仕事をしていただくということが大事ではないかと思っています。例えば、今、私どもでところでは人・農地プランという農林水産省の後継者対策を活用して、村の中には荒廃地がたく

さんあるわけですが、その荒廃地を使って農業をおやりになる方を募集しました。1人の方は、一流のジャズマンとして、農業をやりながらジャズの演奏をやるという方たち。そして、村の中でも一流のジャズマンの皆さんのが集まって、山の中でジャズコンサートが開かれるというようなことも行われています。それで、一流の画家の方も来て、農業をやりながら絵をかくというようなこともあります。そういう点で、仕事をやっていただける仕組みを村の中へつくっていくということだと思っています。

例えば、東京にご夫妻がいらっしゃいまして、今、阿智村へ来ているのですが、阿智村の中であいていた調理室を使って、非常においしいパンをつくる。今度は何かフランスでパンの修行をした方が店を開くというので、これはどうするのかなと思っております。私も買い切れないなということでございますけれども。

そういうようなことで、例えば、農業だったら、今年から私どもは農学校を始めました。新しく農業をやる方に2年間、村の産業振興公社が農業を指導する形です。村で600万円のハウスをつくりまして、そのハウスを2年間経営していただいて、自立するときには村も応援して自立していただくという、そういう仕組みをつくるという一つに、やはり通信環境が挙げられます。私どもの村では光ファイバーを全戸に引きまして、今、フレッツ光で全戸を、要するに都会と全く同じ通信環境を持っているわけでございます。リニアも入ってくるということですし、三遠南信自動車道も入ってくるということになれば、この光ファイバーの通信環境を利用して、やはりクリエイティブな仕事をやる皆さんにも来てもらえる。それから、阿智村というところは、今、200人ぐらいのカメラを持って集まってくれる皆さんもいらっしゃる。風光に感動して

帰っていただけるこんな村で、光通信がしっかりとサービスできているわけで、ここで仕事をやれる。そういう可能性をやはり生かしていきたいと、こう思っているところです。

東栄町商工会 井筒会長

それでは、時間が余りないようですので、私も端折ったような話になろうかと思います。

まず、私どもの町・東栄町はどんなところに位置しているかということですが、南は新城市、豊橋市方面です。国道151号沿いを豊橋市のほうに向かって、それから、東に向いては浜松市、西に向いては、先ほどお話をありました設楽町、北に向かっては豊根村を挟んで、この長野県という、そういう位置です。ここで私どもは今、大きな変化をしている町の一つかなというふうに思います。国道が151号と473号という2本、町の中で交わる。そして、飯田線に駅がある。東栄病院という総合病院がございます。そういう非常にいろいろなことに対する対応で恵まれた地域かなと思います。三遠南信自動車道のインターも今、着々と工事が進んでいるということで、東栄インターができるわけでございます。そういう位置です。

そこで、商工会、要するに経済のほうで、この地域で経済的にどういうふうにしたらいいかということで考えたところ、あるものを有効に使うということが原則ではないかということで、それでは東栄町に何があるのだといったときには、自然の魅力、これはあると思います。それから、高齢化した人口がやはり40何%であるということ。もう一つあるのは、あいた畑や田んぼ、そういうかつて農業で生計を立てていたようなものが、今、草に覆われているということ。そういうような状況になっています。

そういうものを、何とか活用することで魅力のある地域がつくれないかということで、まず、大きな技術が必要なものではなく、いろいろなものはなくても、年寄りが容易に、少しやる気があればできるということで、山菜に着目しました。そして、当然、地域には山菜は自然に山にあるものもたくさんあります。それ観光資源に使えるような、平地、要するに、あいた田んぼや畑に年寄りの力でつくって、それを観光材料にしようということで事業に取り組みました。おかげをもちまして順調に進んで、この間も第1回目のモニターツアーを行ったところ、浜松市から20人ほどの方に応募をいただき、いろいろな意味で体験した感想等を聞かせていただきました。今、いろいろなデータを整理している最中です。

その中で、私どもが感じたのは、やはり住んでいる私どもとは違った視点で、魅力があるということで、アンケートの中で、「今日のツアーレビューに対して、どのぐらいの満足度があるか」ということを答えていただいたのですが、大体ほぼ100%に近い、90%以上の方から「来てよかったです」という回答をいただいたということで、私どもも自分たちの今やっていることが方向性として間違っていないことを感じたわけでございます。

時間がないので細かいことまでしゃべれませんが、そのような形で今進めているということであります。

そして、一つ、最後に提案ということでお話ししさせていただきたいと思います。

今、道路についてはどんどん国を挙げて整備をされていますが、先ほどの話のように、あるものをどう生かすかということもやはり忘れてはいけないではないかということで、飯田線を何とか魅力のある鉄道にできないだろうかと思います。これから様々なところで発言ができる機会があった

らしていこうと思っています。具体的にはどういうことかといったら、飯田線というのは無人駅だとそういうのがいっぱいあるところで、乗降客も1日にあるのかないのかというところもあるうかと思うですが、その駅のあるところには、たとえ小さくても何らかの集落があるということ。その人たちがそこで生きがいを感じてもらったり喜んでもらったりすることを、この飯田線を使い、お金をかけずに出来ないかということを考える。そういう地域でとれた農産物であるとか、また、ずっと食文化の中であるもの、そういうものを、特にお年寄りの時間とお金のある方に、飯田線に乗って、この三遠南信を旅してもらうというようなことがうまく発想できないかと思う。そんなことを考えて、今日は発言させていただきました。

三遠南信アミ 水島理事

皆様、中山間地域にお住まいの方々という中で、私は浜松市内に住んでいますので、そこから見ると第三者的、外からという形になるかもしれません、三遠南信エリアが大好きで動いていまして、その視点から発言させていただきたいと思っております。

三遠南信地域というのは、今、中山間地域で住むということが問題になってお話しになっていると思うのですが、そうすると、過疎である、人口が減る、不便である、何かそういう話題にどんどんなっていくのですが、私は三遠南信の中山間地に行くと、もうこんな宝の地域はないと、はっきり言って、よだれが出てしまうぐらいに私は憧れています。私は民俗芸能とかが好きで、伝統芸能が好きで、そういうものも拝見しによく伺うのですが、日本自体のDNAというか、震災があってから海外で日本人の姿勢みたいなものがすごく注目したけれども、そういうものが培われたのというの

は、やはり、日本は昔、こんなに交通網が発達する前というのは山の文化です。山の尾根伝いに人々が行き来して、そしてでき上がった文化だと思います。ですので、もう本当にこんなに豊かな経済・・・・

・・・・・(テープ反転)

・・・・・そういうものが民俗芸能にもつながって、そこで食文化とか、住環境ももちろんですが、そういうものが全部一体になってバランスがとれているというのが、私は中山間地域の暮らしだと思っています。ですので、中山間地域がどんどん人が減ってしまうから何とかしなきや、助けてあげなきやという、その都市からの目線、視点というのは、私はずっとおかしい、おかしいと思っていました。

それよりも町中で、もう全部が整い過ぎたぐらいにライフラインが整った都会の人からすると、自ら生きる力というのでしょうか、そういうのを持った中山間地域の人々はもうすごく格好いいですね。自然が読めて、それで、そこで何もかも自分たちでつくることもできて、下手すれば自分で衣を縫ってしまう人もいますし、綿からつくりだすという方もいますし、食は自分でつくれますし、住は自分で建物も建てますわと、何でもできるんですね。高齢の方々、そういう知恵も持っているし、技術も持っているし、そこに息づく精神性みたいなもの、そこにすごく感激します。

三遠南信エリアを回らせていただいたときに、この間は阿智村のトンキラ農園さんにも伺いましたけれども、あちらはもう村づくりとか、その先駆けで起こった場所です。あちらの前の事務局長さんからもお話を聞きました。「人間というのは欲を出せばもっともっとと。まだまだもっともっと欲しくなる。でも、この分でもありがたい、そう思えるということって大事じゃないかな。」と、この間も話していらしたの

ですけれども、そういう足るを知るという、その足る満足感、幸せ度みたいなもの、そこで満足だと言える、何かその幸せ感って、なかなかないぞと思う。人よりももっともつという、その欲ではなくて、本当に今あるこの幸せ感みたいなものが温かいなと思いました。

泰阜村さんのグリーンウッドさんにも伺いましたが、グリーンウッドさんは、それこそ志を持って来いらっしゃいますよね。「生活する上ではお給料も大変だ。大変だけれども、でも、自分はここでこういう暮らしがしたい、みんなに体験してもらうことで喜びを感じている。そこに幸せを感じている。」というように、もう生き生きと話していらっしゃって、私は感激しました。

それに根羽村さんにも伺いました。根羽村さんで先日お世話になりました森林組合の方々にもお話を伺いました。いろいろと運営が大変で、合併、合併で皆さんのがくつつく中、根羽村さんでは独自でいっていると。根羽杉というオリジナルブランドを立ち上げて、それをずっと一貫して、家を建ててというところまですべてトータルにやると。そこも格好いいとか思いましたし、先ほど「三遠南信ブランドにしてもいいね。」なんておっしゃってくださいましたけれども、まさに浜松は天竜杉もそうですし、そういったもの、三遠南信各地のエリアって宝物がいっぱいですね。

先日、田峯小学校さんにも伺いました。田峯小学校は、それこそ10人以下になってしまふと小学校がつぶれてしまう、なくなってしまうからということで、地域の人たちが分譲地を自分たちで造成してつくり上げられました。そこで学校も維持していらっしゃいます。そこもそうですし、四谷の千枚田さん、こちらも来ていらっしゃいますけれども、すばらしい、昔からずっと培って、先人がつくってきた棚田を復活させ

て、それで全く人が来なかつたようなところに、今は年間2万人ぐらい見えるという地域になっています。

そういうように、その地域ごとの力強さというのは、「人が減っています」、「悲しいです」という、その話ではないと私は思います。このパワーみたいなものは、民俗芸能もそうですし、この三遠南信エリアはかなり密度が濃いです。だから、世界に絶対発信できる文化遺産としては最適な場所だと私は思っています。私はなんて力を入れてしましましたけれども、そういうお仲間がどんどんふえているので、これを生かしていきたいなと思っております。

コーディネーター／ 豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございます。

仲間が増えるということが一番大事かなというように思います。

それでは、今、地域の資源という視点でご発言をそれぞれいただいたのですが、もう時間があと15分少々になってまいりました。まだご発言いただいている方に、今、発言がありました、そういう資源を生かして、この中山間地域の活力を向上させたり、あるいはこの生活環境を向上させたりしていく、そのためには何が必要なのかということについて、ご意見をいただけたらと思います。

先ほど根羽村の村長さんからはもう既に仕組みというご発言がありましたけれども、その辺のことについて、まず、高森町長の熊谷さんのはうから、よろしくお願いします。

高森町 熊谷町長

時間が無いようですので、いま高森町が抱える悩みについて、お話しします。

高森町は人口約1万3,500人の町です。

飯田市からは10分から15分。そして、飯田市に今度できるリニア中央新幹線にも、大体5分から20分もあれば中間駅へ行けるというような、この地域の中では比較的恵まれた環境にあります。

人口に関しては、高森町の2010年と2040年の人口推計を比較すると1,100人ぐらい減少する見込みで、減少の程度は地域の中でも比較的ゆるやかです。平成17年と平成22年の国勢調査では、おかげさまで240人ほど人口が増えています。小学校も2つありますが、それぞれ、あと2人か3人えると、一つの小学校は1クラスが2クラスになり、もう一つの小学校は4クラスが5クラスになります。また、今年の3月には、32億円をかけて新しい中学校が完成しました。

そういう町ですけれども、これまで自治組織に対し、行政の仕事をかなり下請けのような形でお願いしてきました。それが住民参加だというような形でやってきたのですが、最近は結構大変になってきました。自治組織へ入っている方と未加入者の双方がいらっしゃる中で、入っている人たちから「自治組織に居てもメリットが無い」という不満が大きくなってきているのです。自分たちはお金を払って色々な作業もする・・・つまりグラウンドで汗をかいていながら腕を組んで見ているだけではないか！ということです。また、自治組織へ入っていらっしゃる方の中には、自分たちばかり大変な思いをしているのは不公平だとして、脱退してしまうという現象も出ています。

自治組織へ強制的に入れるということは当然ながら難しいです。一方で、自治組織に入っている方も入っていない方も、まちづくりへの思い或いは町の課題などを如何に共有してもらうのかが大きな課題です。

ぜひ、そういう点についても皆さんのお知恵をお借りできれば、ありがたいと思います。

壳木村　清水村長

私たちの村は、長野県で2番目に人口の少ない村です。1番目でなくて2番目というのが、やはり謙虚なところではないかと私は思っております。そんな村です。

時間がないようありますので、大分端折させていただいて、一つだけ、今、取り組んでいることについて話をさせていただきたいと思います。

今年の1月ですが、東京で行われた地域おこし協力隊の募集活動に私も参加しました。その場所に若い人たちが大勢見えまして、その人たちと話をしますと、田舎で何をしたいか目的がはっきりしており、やる気を感じました。そんな皆さんのがんばりの知識、知恵を生かして村づくりをしたいと思い、地域おこし協力隊制度を積極的に活用しております。

そんな中に一人のマラソンランナーがあります。今、NHKのドキュメンタリーで取り上げていただいて、昨夜から放送しております。毎週火曜日、6週にわたって放送しますので、10時55分という夜遅い時間でありますが、ぜひ見ていただければ幸いかなと思っております。

彼は昨年、実業団のチームをやめ、壳木村で一人で次の大会を目指して合宿をしており、私と出会いました。私は以前より、この壳木村の夏の涼しい気候と、その標高の高いのを利用して長距離ランナーの合宿地にしたいと思って取り組んでいました。そんな中で彼と出会えたのは私にとって本当に大きな出会いでした。彼に出会えたことで合宿誘致は大きく進展しました。一緒に走っていた同僚の皆さん、また、監督の皆さんと、その人脈は非常に幅広くて、こ

の夏、300人を超すランナーに売木村で合宿をしていただきました。彼はフルマラソンから、今は100キロメートルのウルトラマラソンというのに転向して、またその実力を開花しまして、今年も大きな大会で準優勝、先日は優勝と、成績を上げ、世界ランクも4位となっていました。

私も積極的に合宿に来た皆さん、そして、彼の元同僚の皆さん、監督の皆さん、実業団を回りまして売木村での合宿をお願いしています。そういう交流の中から、本当に出会いが生まれ、随分私も助かっております。お見えになった皆様は、「こんな近くにこんな良い場所があるなんて知らなかつた。」とよく言われます。名古屋からも約2時間足らず、そしてまた豊橋からも、また、浜松からも2時間足らずで来られるという、その地の利というのを今、生かしながら、私は、自然環境そのものが資源であり、似た場所はあっても同じ場所はないということで村づくりを進めているところであります。

NPO法人てほへ 大脇副理事長

いつもは、本業は和太鼓集団志多らというのが東栄町にありますが、舞台にずっと20年以上立ってきました。今、プロデューサーをしております。そういう芸能集団、私たち今、18名いますが、全員1ターンで、25年前から東栄町に暮らしております。地域おこし協力隊とか、そういう制度が動き出す前に、私たちは地域活性をしようと思って奥三河に移住したわけではなくて、芸術家目線で、たまたま出会った縁もあって、この土地が自分たちにとって一番活動していくのにふさわしい土地だと思って住みつきました。廃校の学校を今使っていますが、当時は4名の最後の卒業生がいた学校に3名のメンバーが住みついて、今はメンバー18名。子どもたちを含めると10名以上、

27世帯の村の中に、うちの代表とともに含めて、地元の人と結婚したり、子どもができたりということで、ちょっと特殊な状況でいます。

私たちの和太鼓集団のグループが発足して20年たちますが、自分たちがここまで本当に食べるものがなくて、花壇に花ではなくて野菜を植えようという、そこから始まりました。ですので、今はもう実際に経済的なことは恥ずかしくて言えない。ただ、でもプロフェッショナルとして活動てきて、今はもう世界を活動の場所にして、海外ツアーや全国ツアーや活動しています。

なぜそういう活動が奥三河の中山間地ができるかというと、一つは、私たちは自然や暮らしの中からいろいろな感情というか、そういうものを感じて創造して曲づくりをします。多分芸術家の人はそういうところを求めていて、そういう場所のほうが感性が鋭くなる、それから、創造性も生まれる。都会にいてはできない。田舎にいてもインターネットはつながります。ですので、世界と会議もいつでもできます。情報も流せます。そういう利便性もあるということが、ちょっと昔だったらなかなか難しいところが、今はそういうこともあって、私たちは25年前に拠点を奥三河に、たまたま御縁もあって移しました。

家族もできて、私も高校生と小学生の2人の息子がいますが、妻は同じ志多らのメンバーなんですけれども、そこで子育てをする中で、私たち、全国いろいろなところの学校の演奏にも行きます。いろいろなそういう状況、子どもたちの様子を見ると、こここの地で子育てできて一番幸せだと思っています。これは実際に、町場で本当に子どもの現状やいろいろなものを体感すると、本当に子どもしくないと思ってしまうことがあります。それが田舎の子ども

たちは、いい表現として言いますが、山猿のように元気に、エネルギーに満ちている。そういう子どもたちを育てるには、やはり町では育てられない。

もう一つ大事なのは、田舎であれば、自然環境が豊かなところであれば育つのかというと、そうでもない。それにプラス、そこで暮らす人たちとの人づき合いが本当に大変だと思うのですが、人づき合いをする。いいことも悪いこともお互いに認め合って暮らしていく。メリットもデメリットも共有しながら、何か新しいものをやっていくとか、そういうようなことをする人づき合い、人と人のつながりがあってこそ、そういう子どもたちが育っていくのかなと思っています。

奥三河に花祭という700年以上続く伝統芸能がありますが、私たちの集落にも花祭があって、拠点を移したころから地域住民として花祭にもかかわって、今は子どもたちも含めて、みんなで祭りを支えています。祭りにかかわってきた中で、祭りという一つのそういう文化とか祭りというキーワードが、そこで生きる人の知恵とかつながりとか、そういうものの大切さとか、何か人が生きる上でのパワーみたいなものを未来へつなげていく大事な要素。その祭りをやるという、神事的な儀式を形だけやることも大事かもしれません、その形の裏にはやはり思いがあって、そういうものを700年積み重ねてきた。ということは、今、花祭は700年から750年と言われていますが、1年に1回なので750回から700回ですね。そのお祭りをやることで、そこで生きる知恵とかパワーを代々つないでいくということがあるのかなというように思っています。そういう子どもたちを育てていくことが、また、自分たちのふるさとに愛着を持って、自分のふるさとへ帰って暮らそうとか、自分のふるさとが困っていれば何

か力になろうという子どもたちを育てられるのかなと思います。

中山間の問題として、高校が町に行かないといとか、大学は絶対外へ行くことがある。大体の子どもは絶対一回外へ離れます。その子が、「戻ってくるのだ。」と思うような、やはり地域の特性を生かした教育なり、いろいろな施策をしていくということも一つ大事かなと思います。それから、私たちみたいにIターン者。私たちのメンバーは、岡山、札幌とか、アメリカ人もいます。そういうところから魅力を感じてくるということは、これは志多らという太鼓集団に魅力があって、その仕事に生きがいがあって、多分経済を超える思いみたいなものがあるから来るんだと思うんです。ですので、その土地に不便さを超える思いとか、何かそういう愛着みたいなものがあれば、そういうものを感じる若い人们はいっぱいいると思うので、私たちNPOとしてもですし、和太鼓集団としても、どんどん自分たちの活動を発表しながら、志多らというのは志を持った者がいっぱいいるという意味で名づけた名前ですでそういう名前に沿った、第2の、第3の形をNPOとしてもやっていきたいと思って、そういう活動をしております。

コーディネーター/ 豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございました。

予定の5時半にほぼなってしまいました。本来なら少し意見交換ができればと思ったのですけれども、私の要領が悪かったのか、皆様の熱い思いでついつい時間が長くなってしまったのか、どちらかだと思います。時間になりましたが、この後の報告会が6時からございます。それに向けて、今日ご発言いただいた皆様のご意見を、まとめるというのはもうちょっと無理かと思い

ます。なかなかこれを一つにまとめることは難しいのですが、一つとしては、やはり定住促進という観点から言いますと、とにかくこの地域にはすばらしい魅力が存在していることは間違いない。それはもう皆さんのが認識されていることだと思います。それを生かした働く場、雇用の場というものをどうつくっていくか。そのことが定住にも多分結びついていくのだろうということだと思います。そのための人やものの交流、あるいは連携の仕組みづくりといいますか、人とをつなぐその仕組みづくりが恐らくこれからこの三遠南信地域全体としての取り組みとして必要になってくるのではないかと思いました。

2点目は、何人かの方にご発言いただきましたが、そういう定住促進に向けて、やはりこの地域の魅力なり、あるいは取り組みを外に向けて情報発信していくということが非常に重要だろうということ。とにかく魅力はいっぱいあるのだが、宝の山というご発言がありましたけれども、それをどう情報発信していくか。ここがやはり大きなポイントかなという、基本的にはこの2点にまとめさせていただきたいと思うのですが、よろしいでしょうか。

コーディネーター/ 豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございます。

それでは、最後になりましたけれども、今日蟹江先生にせっかくご参加いただいていますので、感想を一言お願いできればと思います。よろしくお願ひします。

足利工業大学 蟹江副学長

お話を伺っていて、この三遠南信の各市町村の熱い思いがひしひしと伝わってまいりました。本当に頭が下がります。テレビで報道された泰阜村さんとか下條村さんと

かはよく存じ上げておりましたけれども、非常に魅力がある地域だと思いました。

私、実は博士論文の研究で、地方都市圏にどうやったら人が定住するだろうかということを無謀にもやりました。皆さんご存じだと思いますが、現在の日本の人口は1億2,700万人。これをピークですよね。やがて2050年になると8,000万人ぐらいになってしまうようです。それで、その半分の6,400万人は、実は三大都市圏に住んでいるのです。東京、名古屋、大阪。ここに住んでいる人が6,400万人。これは私の博士論文のテーマですが、どうやったら地方都市圏に人が張りついてくれるかというのは、難しいです。

いろいろやったのですが、定住条件というのは、大きくは実は二つあります。社会的条件と経済的条件です。私は悲しいかな、建築の出身ですから、社会条件の中の「もの」しか私の貢献できるものはありません。いろいろ突き詰めていくと、定住といつても住民票を移して完全定住をしてくれるというのが一番良いのしようが、なかなかそれはうまくいかないということになる。そうすると、定住して転職するとか、部分定住とか、あるいは一時期はやったマルチハビテーションとか、あるいは空き家利用のニューカマーの誘致であるとか、これは国土庁の仕事で随分やりました。群馬県の日航機が落ちた上野村とか、あの辺でも空き家をオープンにして、それで借り手を探してというようなことをやってみました。なかなかうまくいきません。

それでいろいろ考えてみると、やはり定住条件の最たるものは、そこで生業を営んで、お金を稼げるということなのです。つまり経済条件です。だから、雇用機会をつくってやらないと、そう言っては失礼ですけれども、どんな環境条件が良くても張りつかない。だから、先ほど藤山先生の発言

の中でとてもおもしろいと思ったのは、世帯類型別に定住してもらうという話、これはとてもおもしろいと思いました。ただ、問題は世帯類型を想定して、そのときにどういう世帯に対して、どういう職を準備するかというのは、ものすごく私は重要だと思う。だから、市町村長さんの皆様のご発言の中にも、雇用の場を設けるという話がありましたが、ぜひそれを考えていただいて、ニューカマーのための職をつくってやる。欲を言うと、これはトピックス的ではなくて、一般行政として定着するのが一番いいのですが、そこに至るまで、とりあえずしようがないからトピックス的に、こういう成功事例があるのだということをたくさんおつくりにならいいのではないかと思いました。

**コーディネーター／
豊橋技術科学大学 大貝教授**

ありがとうございました。

5、6分時間がオーバーしてしまいましたけれども、これで「山・住」分科会を閉会いたしたいと思います。

どうもご協力ありがとうございました。

8 三遠南信地域住民セッション 要旨

San-En-Nanshin Summit 2013 in Minamishinsyu

住民セッション司会進行

の活動を盛り上げていこう。

NPO 法人三遠南信アミ理事 水島加寿代

■ 【開会あいさつ】

三遠南信住民ネットワーク協議会

代表世話人 木下利春



今年も紅葉が美しいこの時期に、住民セッションが開催できることを嬉しく思う。三遠南信サミットに多くの住民が関わるようになったのも、3 エリアの住民の思いと努力のおかげ。昨年 6 月に住民ネットワーク協議会を発足し、毎年、地区の代表が事務局を担当している。南信州が今日まで担当。今日は、住民がこれまで何をしてきて、今後何を見据えていくのか、活動の実績報告を受け、来年の浜松に向けた会にさせていただきたい。明日から事務局担当は浜松へ移る。今回 SENA の方も住民支援をしていくという形になり、予算配分された。今後の活動実績のためには、関わる人の熱意と共に、資金も必要になる。3 月までの事業年度の中で、予算についても引き続きさせていただくのでよろしく。今後も皆様の協力をいただきながらネットワーク

■ 【第 1 部 活動実績報告】

①祭り街道の拡大取組

祭り街道の会事務局長 伊東直幸



ネットワークとしての活動は今年二年目。取組みの重点目標は祭り街道の延長。少しずつ延長できるような雰囲気になりつつある。祭り街道を提倡して、昔の文化を取り戻そうと取り組んでいる。

三遠南信地域で、太平洋へのびる街道は遠州海道、秋葉海道、三州街道。三州街道は国の直轄で道が完成。秋葉海道は近く三遠南信道が開通する予定。遠州海道がなかなか進んでいない状況ということで、「祭り街道」の名称をつけ、活動を進めている。祭り街道の命名は、平成 11 年に使用許可をとり、来年で 15 周年を迎える。25 年度に協議会の重点事業として協力いただいた。

今年 7 月に新城の青年会議所の皆さんと交流、シンポジウムを開催。南信州から木下さん、豊橋から原田さんが参加して、皆さんにご理解いただいた。その後、新城の市長さんと懇談させていただいた。

(田中孝治氏より補足)

ネットワークがでて2年。「再来年3月に新城ICが開くので、拠点になる。新城から飯田まで広げていこう」と、新城市長に会い、ご賛同頂いた。「祭り街道15周年」で拡大予定。引き続き、下條や飯田へも気運を持ちかけ、祭り街道が親しまれるようと考えていただきたい。そして付随して、祭りと食文化や新しい祭りの創造、物流事業へと発展して頂けたらありがたい。

②事典シリーズの活用と食文化の融合 みらい企画 律 矢澤律子



ここが楽しい事典シリーズの中間報告。協議会の販促により、これまでに6000冊ほどが販売された。そのうち、新聞、メール報道での購入が770冊。県外に住んでいる人からも注文が入った。4巻、5巻は在庫があるので、さらに宣伝をお願いしたい。

特産事典は、生産地を知るうえで「学校の教材になる」と、先生方からの声。以前、阿南町の鈴ヶ沢ナスの生産地を訪ねた。生産者に会う大切さを実感。そんな体験企画をするのもいいと思う。地元に住んでいても知らないもの、ことが多いことに驚く。650点の文化素材が網羅されている事典は画期的な試みだった。アンケートで、魅力

的な素材も挙がっているので、今後に利用してほしい。

自分の言葉で文化を語るには、学ぶ、体験する、交流することが大切。現地学習を行う上でも利用してほしい。

また、事典をきっかけに、伝統的な祭りが、原形をとどめて息づいている素晴らしさを実感した。著名な学者や研究者が研究して発表している。祭りには、それぞれの物語、理屈、信仰がある。春は、豊年満作、夏は無病息災、秋は収穫への感謝、冬は新しい命を授かる祈り。そして祭りごとに、神仏に供える食文化があることにも着目したい。神様仏様は旬のものを召し上がる。

さらに、豊橋カレーうどん、豊川いなり寿し、どんぶり街道、奥川の戦国グルメ街道、遠州の牡蠣蒲丼など、地域をアピールする取り組みがあるように、南信州もしかけたい。そこで、着目したのが、祭りと食文化の融合。国道151号沿いの祭りと食を融合した「祭り街道弁当」を開発し、ブランドにする。堪能し、日本の味を楽しんでもらい、幸せな気持ちになっていただく、そんな価値観を発信したい。

9月には、新地域づくりフォーラムを開催。豊橋観光コンベンション協会事業推進部次長の鈴木恵子さんから取り組みを伺い、素材をさらに高めて、感動させる物語づくりをスタートさせる勉強の第一歩。三年計画で、三年目に祭り街道弁当を完成させる予定。今年は勉強、二年目に試作、三年目に販売を考えている。

③拠点づくりと物流

NPO 法人三遠南信アミ副理事 中野眞



まず、今年 5 月三遠南信アミ理事長の松田不秋先生がご逝去され、黍島先生に代表を引き継いだことをご報告させて頂く。

地域の中には魅力ある農産物、加工品、そして根底に流れる素晴らしい食文化がある。それらをインフラが整備された中で、南信州、三河、遠州の消費者の方に届ける仕組みづくりに取り組み、経済的な活性化に結びつけたい。

三遠南信交流市場は、現在、浜松駅前での軽トラ市としてスタートし、三年目に入り定着してきた。信州のここだに、ネットワークうるぎ、設楽町の方にも物産を持ち、遠州へ出向いていただいている。確実に浜松の消費者ファンがついている。

また、軽トラ市に連携して、商店の空き店舗で、遠江特選市場をつくり、アンテナショップの形で、三遠南信をテーマにした販売コーナーを設けている。今回 10 月から、信州のここだにが、飯田市内で直売所を開くことになったとのことで、これからは、浜松のもの、東三河のものを飯田の方にお届けすることができ連携できる。今後は、豊橋方面にも広げていきたい。

以上の活動の中で見えてきた課題は、物流コストに見合う商品の発掘、売り上げ・利益を確保できる仕組みづくり。アンテナショップらしい各地の商品の品質が大事。消費者は目も舌も肥えている。各地の自慢のものを伝え、取り揃える品質アップが重要。

また、作り手のこだわりの情報発信、消費者のファンづくり、コミュニティづくりも必須。ものの販売の先に、交流人口を増やす、観光交流を増やす、人が動くしくみ、売るだけでなく、文化、祭り、情報発信しながら、人が動くことまで活性化したい。

最後に特選市場の運営は、10 月から株式会社ティーケイワンに引き継がれた。社長の高橋秀樹氏は飯田市出身。

④音（太鼓）がつくる地域づくり

NPO 法人てほへ副理事長 大脇聰



NPO 法人てほへは、志多らが母体になっている。志多らは、現在「蒼の大地」の全国ツアーチで、豊橋、飯田での公演では、ネットワークの皆さんでパネルを作ってロビーで三遠南信を紹介している。ロビーを三遠南信発信場所として使ってもらっているので、ぜひ利用してほしい。

伝統的な文化には花祭りがあるが、新しいものを創造する文化をこれからもっと三

遠南信で発信していきたい。まずは、自分ができる太鼓の文化の取り組み。プロ集団である志多らを、うまく地域活用しながら文化の旗振り役にしたい。太鼓だけでなく、地域の情報を発信する「のきやま放送局」をつくり、ケーブルテレビで放映している。

遠州では映画の取組み、南信州ではスポーツ交流など、新しい活動が動きはじめている。それぞれがうまく連携して、新しい人を取り込んでいかないと、これまでの活動に興味があるひとだけでは息詰まる。今後は、伝統的な芸能文化の住民フォーラムをしたり、祭り街道と連携したりしながら、祭り文化の大切さを伝えて行く活動ができればと思う。

伝統芸能が数多いこの地域だが、祭り自体が後継者不足。どういう人を後継者にするかが課題。そういう面で、住んでいる子どもへの教育、地域外で暮らしている地元出身者や、興味のある人に、祭りの大切さを伝える企画が必要。自分たちは太鼓があるので、三遠南信地域の和太鼓をする人たちにも集まってもらい、体験を含めた想いを広く多くの人たちに聞いてもらい、次に伝えたい。

志多ら、映画の動き、情報発信、スポーツ。

志多らの舞台を創るときに思う。新しいものを発信するには、過去の経験や大切なものをベースにしないと、かけ離れたものになってしまい、観る人の心に響かない。新しい動きをする際にも、しっかりと伝統的なものを盛り込んで伝えていくことが大切。過去にこの祭りを作り上げた人たちの感性、想像力は凄まじい。それを志多らの舞台で、新しい文化の創造を深めてもらう

きっかけとなっていると思う。次は 2014 年 6 月 22 日に浜松アクトシティで「蒼の大地」が予定されている。その公演での情報発信スペースを活用し、「こんなことができないか」と、さまざま提案していただきたい。

■スポーツ文化の活用

一般社団法人南信州ここだに 大蔵豊



南信州の現状を見ると、プロスポーツチームの活動状況が寂しい。そこで、以前から繋がりのあるサッカー協会と相談し、さまざまなサッカーチームと交流する中で、スポーツ活動を底上げしたい。もちろん行政や商工団体、企業などが推進しているが、子どもたちの活動を盛り上げていかなければ、持続できないだろうという発想から活動を始動した。

「ジュビロへの道。秋葉神社とのつながり」
ここだに代表が、秋葉海道を整備する活動に携わり、地図、冊子、ビデオ制作において、秋葉詣でに関わってきた。交流の中で、秋葉神社の火祭りに訪れた際、必勝ジュビロと書かれた絵馬やジュビロの旗、ジュビロ選手のボールを見つけた。毎年繋がりがあるとのことで、紹介をお願いした。

ジュビロに伺ったところ、Jリーグはホームタウン制をとっており、エリア外へ出ることが難しいとの返事だったが、SENAの協力を頂き、無事に了承をいただき、今年8月、ジュビロ20周年のときに、前座試合に南信州のチームを参加させてもらえた。最近では、十月にエコパでの試合を経験してきた。今後も応援していきたい。遠州の方、一緒に応援して価値観を共有できたらと思う。

■質問①

Q:事典シリーズの数字確認

A:数字訂正にて了承

酒造お酒の蔵出しイベントにあわせて 28人で出かけた。

今後も年に2回ずつくらい、南信州、遠州、それぞれにおじゃましながら、交流を深めていこうと考えている。「ここに行くといいぞ」という推薦があったら教えてほしい。



全体の様子

■追加報告:

NPO 法人森づくりフォーラム

常務理事 原田敏之



東三河は、市民団体連携委員会という名前で交流事業を進めている。サミットにあわせて、東三河交流ネットに改名した。

2013年7月14日には、天龍村坂部の関さんのところへお世話になり、祇園祭に合わせて、25人でおじゃました。

また、10月27日には、天竜浜名湖鉄道で地域活動に触れたいと、宮口駅の花の舞

■分科会

分科会では、次年度の活動に向けて、3つのテーマ毎に分かれ、意見交換が行われた。

①祭り街道拡大、食文化と街道進行役／祭り街道の会

事務局長 伊東直幸



②拠点づくりと物流

進行役／NPO 法人地域づくり

サポートネット代表理事

山内秀彦



③新たな文化と資源の活用を考える

進行役／NPO 法人てほへ

理事長 伊藤静男



■分科会報告

■第1分科会 祭り街道拡大、食文化と街道

NPO 法人つみくさの里うるぎ 原光秋



【価値の高い民俗芸能の宝庫】

三遠南信エリアは、柳田國男、折口信夫、渋沢敬三など、多くの民俗学者たちが、伝統の祭りの価値に注目し、研究に訪れた地域。それは、長年の間、連綿と受け継がれ今に続いている祭りだからこそ。こんな素晴らしい宝を活かさない手はない。南信州、遠州、奥三河にも、魅力的な祭りは数多い。各祭り同士が、連携を深めていこう。高齢化が急速に進み、時間に猶予がない。皆が共通認識を持ち、それぞれの点となっていく祭りが街道の線となり、さらに地域の面になっていくと、さらに力が發揮されると思う。

【継承のために】

新野では、子どもたちに祭りを伝承するための「子ども教室」が十何年続いている。遠州では、継承の問題をなんとかしたいと、遠州の民俗芸能の連絡協議会を作り、ひとつの資料にまとめた。三遠南信地域全体でも、祭りの連絡協議会ができれば大きな力となり、日本の代表として世界にも誇れる

はず。

【祭りと食文化の深い繋がり】

南信州交流の輪では、祭りと食文化をつないで、弁当づくりをして、南信州のブランドにしたらいいという勉強会をスタートさせた。祭りには地域の風土が大きく関係する。一年中、人間の営みの中で祭りが存在してきた。そこで食べてはいけないもの、食べるものと決まりがあり、それが食文化になっている。

祭りの音、食べる匂の味わい、そうしたものが毎日の暮らしの中で自然に積み重なっていく文化の見直しが必要。年中行事、祭り、食文化(野草や薬草等も含め)は繋がっている。それらの関係を見直すことは、とても価値のあることで、三遠南信の輝く宝になる。

【理解を深める必要性】

祭りを継承する地域の人は、祭りが何のために行われているのか、使われている道具ひとつひとつの意味など、しっかり根幹の理由を理解することで、祭りの背骨ができる。それを知っていくと、より祭りに興味がわく。それが深みとなり、魅力となり、資源となる。訪ねる側は、実際に現地に出向き、現地の人と交流し、自分で感じて感動することが大事。すると人に伝えたくなる。

最近では、地域協力隊の人が地域に入ることも多く、外の意識を取り入れられてきている。変えてはならないもの、変えたほうがいいもの、その判断はいろいろあるが、全く違う感性もうまく取り入れながら、祭り文化を未来へ継承する努力を三エリア一體となって進めていこう。

■第二分科会拠点づくりと物流

NPO 法人地域づくりサポートネット

代表理事 山内秀彦



拠点とは、地域のモノを売っていくアンテナショップ的な場所。先ほど情報提供了した遠州では、既に拠点ができている。南信州では、飯田市に指定管理で、10月1日からコーナーを設け販売がスタートしている。ここでは浜松方面へも商品が提供され、週に1回だったものが、今後2回になっていくということで、だんだん定着しつつある。最初は厳しかったが、売り上げも伸びてきている。三遠南信地域の標高差で収穫時期の違いもあるため、南信州のリンゴを遠州で販売するなど、ニーズも高く、三遠南信での連携がとてもメリットがある。特に地域の野菜や果樹が中心に売れている。

ただし、そのためには、商品の品質や量が継続することが重要。すると、作る部分と、運ぶ部分と、売る部分のバランスが取れることが大事。いちばん問題なのが、売る部分。販路が確立されないと、いくら作り、運んでも何もならない。従って、拠点をまず造ることが先決だ。現在2地区に拠点があり、三河でも、まずどこか立ち上げたいということで、新城と話が進みつつある。

拠点ができれば、三遠南信自動車道や新東名等を使いながら、うまく物流して売る。生産者、例えば農業の方も、これまで農協から出していた人達が、自分たちで売る人たちも多く出てきている。そうした人々は法人化し、後継者が育成されている例もある。後継者問題解決にも繋がってくる話。そんな仕組みづくりも今後のテーマになるだろう。

また、三遠南信圏域の中で、作る、売るだけでなく、地域ごとの食文化をうちだしていく、場所にしないといけない。そのためにも、旅館や観光スポットなどとうまく連携しながら、產品を提供する形に広げる必要がある。しかし情報がなかなか伝わらないのが実情なので、しっかり発信していくしくみも考えたい。

情報が発信され、皆が食べ歩くとなれば観光にもつながる。三遠南信の魅力の発信を発信し、產品や食文化を打ち出す拠点を整備し、物流によって連携させる。まずは早急に三地区拠点を確立させたい。遠州はサービスエリアでの販売もイベント的に進めているので、他の 2 エリアも広げていくことができればいいと考えている。しかしその場合、產品の量を確保する必要がある。そのための生産者ネットワークを作ることも必要。

やればやるほど課題があるが、目の前のことから着実にやっていこうと話し合った。

■第三分科会新たな文化と資源の活用

NPO 法人てほへ理事長 伊藤静男



三遠南信エリアは旧石器時代に遡れる歴史文化も多く、資源は多大にある。

【事例発表】

文化による地域活性の事例を挙げると、

- 映画制作・上映、アニメ制作の発信では、小さな地域でも高齢者たちのコミュニケーションの場となっている。山の暮らしを街の人々に伝える活動は、里山の知恵を街の暮らしに活かしてほしいという願いで進めている。
- 古民家造り、コンポストトイレ作りのワークショップなどの実施。畑での利用のみならず災害時などにも活躍と注目された。
- 伝統の千枚田を整備し、伝統芸能の伝承と共にイベントも開催。若者の定着率もアップし、地域への誇りが高まっている。
- 太鼓ステージ講演による文化発信は地域とのつながりの上で成り立っているという搖るぎない根幹。それを継続させるために、ふるさとの地域文化の魅力を、暮らしの中で子どもたちに伝えていく。
- 潮干狩りができる海岸への復元など、自然を取り戻すための活動。
- 地域を越えたスポーツ交流など。

【今後に向けて】

どんな文化発信にも、地域のつながりという根っこがないとぶれてしまう。地域の想いとして根付かせるには、短期間には結果はでない。10年20年かけて結果ができるかどうかの長いスパンで培っていくこと。暮らし全部が文化につながっている。

長い時間軸を考えた場合、経済的な力をつけていくことも大切なので、協議会で新しい研究テーマとして取り上げてもいいかもしれません。三遠南信の事典を活用し、交流につなげることを考えてはどうか。地域間交流を進める仕組みづくりとして、県境を超えた文化交流ができるツーリズムバスも研究中。

文化にも伝統的要素、新しい要素といっぱいある。それぞれが連携できるところは連携し、地域の人の集まりにつなげていこう。そして互いに情報を発信し合うことも大切。

文化交流による地域連携は、いざという緊急時の大きな橋渡しになる。文化による強い連携が、生活の強い地盤になる。

■まとめと今後の方向

次期三遠南信住民ネットワーク協議会代表
世話人 田中孝治



住民ネットワーク協議会が発足されてから2年間、豊橋、飯田と事業を積み重ねてきた。今年3年目で、明日から遠州の方が担当させていただく。

今後のスケジュールは、住民ネットワークの総会に向けて準備をして、来年の総会のときに具体的な事業計画を立て、それをもとに事業を進めていく。特に、これまでには交流に主体をおいて活動してきたが、今後は交流の継続と同時に、そろそろ連携の実績を上げていきたいことが一番のポイント。

ひとつは、年長者の知恵と経験だけでなく、若い人の感性と行動力を実践力にしていきたい。両者がタッグを組むことが必要になる。

また資金も必要。住民ネットワーク自体が事業を行うのではなく、それぞれ活動されている事業を、電車のプラットホームのように繋げ、より大きくするのが役割と思う。いろんな話をだして、必要なら電車を連結して、より長く、よりスピードでの電車にするのが役割だと考えている。

今日は、部会を三つにわけたが、これはこれまでの二年間、テーマとして方向が見定まってきた前提で掲げている。

今後は、三遠南信「地縁店(チェーン店)」をつくりたい。三遠南信のものによる特産品(食文化)、つまり食べ物による連携をはかる。今日も、報告があったように、浜松と飯田についてはアンテナショップ的な拠点ができた。今、新城が、来年三月にインターが開設されるということで、新たな拠点ができるてくる。特にネットワークの中では、山間地部分の結束ができないと、大都市との交流もできない。是非とも圏境地域に核を作り、三つの物流拠点としたい。

二番目は祭り街道。来年祭り街道の15周年ということで、道でつながる軸にしたい。新城から飯田までの151号と遠州エリアをいれて、祭り街道をひとつのコンセプトにして、道でつなぎたい。

三番目は、創造街道と仮に名前をつけた、アートロードにスポーツもプラスして。芸術芸能と、スポーツ交流が柱。

これらの三つの柱で、来年10月頃まで進めたいと思う。中身はまだないので、次の総会までに、それぞれの世話人と相談して、具体的内容を決めて、ネットワークの総会で、実施をしていく予定。

■来期方針の承認

現在は案となっているが、この場でご賛同いただければ、その方針で進んでいきたい。よろしければ、拍手でお認めください。

〈一同拍手〉

それでは、承認いただいたということで、中心者と相談しながら具体的計画づくりに入る。まだ住民ネットワークにあまり関わりのない方も、ぜひ、ご参加・ご協力いただきたい。

■閉会あいさつ

次期三遠南信住民ネットワーク協議会
代表世話人 田中孝治

三遠南信住民ネットワーク協議会も、だんだん充実してきている。それぞれの首長さんたちのご努力に感謝。本日は大勢お集まりいただき、いよいよ人の知恵と人の輪が発揮できるようになってきた。繰り返すが、三エリアが一体となって活動していくうと思うので、よろしくお願いします。ありがとうございました。

9 報告会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2013 in Minamishinsyu

報告会では、各分科会のコーディネーターがそれぞれ議論された内容を報告し、飯田市長がサミット宣言を行った。また、浜松市長が次回開催地域を代表してあいさつをした。

■ 「道」分科会

コーディネーター 飯田市長 牧野光朗



今回の分科会は、新東名高速道路、三遠南信自動車道など、三遠南信地域連携ビジョンの重点プロジェクトに位置づけられております交通基盤の整備が着々と進みつつある中、「三遠南信自動車道 一次代を拓く交通基盤ー」というテーマのもと、整備効果や将来の期待、また、整備効果をさらに高めるために、今後、我々が取り組む課題などにつきまして検討をいたしました。

まず、国土交通省中部地方整備局飯田国道事務所の花木所長より、「三遠南信自動車道の整備効果とリニア時代の地域づくり」というテーマのもと、三遠南信自動車道整備事業の進捗状況、道路整備により期待される効果、リニア中央新幹線を生かした道路整備や産業活性化につきましてご報告をいただきました。

整備効果といたしましては、高規格幹線道路インターチェンジへのアクセス時間が60分を要する地域の解消、災害に強い地域ネットワークの構築、第三次救急医療施設

への60分以内の搬送実現による救命率の向上といった医療サービスの向上、高速サービス向上による観光振興などについてご報告をいただきました。

観光振興や産業の活性化など、リニア中央新幹線の開通効果を三遠南信地域全体に波及させるためにも、三遠南信自動車道の整備が不可欠であることを改めて確認する機会となりました。

分科会参加者による意見交換におきましては、三遠南信自動車道の一部供用や新東名高速道路御殿場インターチェンジ、三ヶ日ジャンクションの開通、国道23号名豊道路の整備などによる効果としまして、産業振興の一体的な発展や観光客の増加による交流人口の増加、地域医療や救急医療体制の充実、災害面での強化や生活環境の改善など、さまざまな分野において多くの効果があることが報告されました。

また、具体的な提案といたしまして、三遠南信経済開発協議会からは三遠南信連携による経済効果調査に関する提案、住民団体などからは三遠南信の連携をさらに強固なものとするために企業や住民同士の交流や意見交換の定期的な開催や道の活用（道使い）の視点も必要との提案をいただきました。

将来的な期待といたしましては、南北軸である三遠南信自動車道に東名高速道路、新東名高速道路、浜松三ヶ日・豊橋道路、そして、将来的に三遠南信の北の玄関口となりますリニア中央新幹線がつながること

で広域的なネットワークが形成され、さらなる交流人口の増加、産業の創造・活性化、文化的な交流などが促進されるとの期待の声が聞かれました。

安全・安心という視点からは、三遠南信自動車道の早期全線開通により、救急医療機関施設の搬送時間の短縮につながることへの期待、また、地震、津波といった大規模と災害時には避難経路の確保、円滑な救援や復旧活動・救急医療活動に必要な交通基盤、つまり、「命をつなぐ道」としての効果を發揮するということから、ミッシングリンクとして位置づけられております三遠南信自動車道の早期整備が必要なことを改めて認識しました。

以上のとおり、今回の分科会を通じまして、広域的な交通基盤整備による効果や期待を踏まえた上、改めて三遠南信自動車道の早期全線開通の必要性を強く認識しますとともに、その実現に向け、三遠南信地域連携ビジョン推進会議を中心に、行政、経済界、住民といった関係者がさらに連携・協力をしながら、国や県に対しまして継続的な要望活動に取り組みことが重要であることが確認されました。

以上をもちまして、「道」分科会の報告とさせていただきます。分科会にご参加いただきました皆様方の積極的な発言・提言に改めて感謝を申し上げます。

ありがとうございました。

■「技」分科会

コーディネーター

飯田市工業課

(公益財団法人)南信州・飯田産業センター

飯田ビジネスネットワーク支援センター

オーガナイザー 久保田優典

「技」分科会は、行政3名と経済界6名、住民団体2名で開催いたしました。

会の冒頭、飯田市産業経済部の高田部長

より「飯田市の産業と取組み」につきまして報告をいただきました。

今回のテーマを「人財育成と持続的産業発展の有機的連携をめざす」と決めさせていただき、事務局より参加者へ事前アンケートを実施いたしております。

限られた時間ですので、アンケート項目に沿いテーマと結びつく<三つのポイント>に重点を絞って報告をお願いしました。

一点目は「地域産業に活力を与える取組み」、2点目は「人財の育成と確保に関する課題と解決策」、3点目は「大学と教育研究機関との連携」について、参加者による事例報告を基に議論をしていただきました。



『まとめ』としましては

①「人・モノ・金」が集まる魅力的な新産業を積極的に生み出していく必要性がある。

これまで「技」と関係した産業分野では幾つか地域間で連携した取組みもされていますが、経済・社会環境等の状況が急速に変化している中で、新産業の創出に向けた集積化と連携した展開をもう少し具体的に進めていくべきである。

②集積産業を更に発展拡大させていくために必要な人財は大学だけに偏ることなく、行政、企業、あるいは諸団体（NPO含）間での相互連携に踏み込んで、より実務的な仕組みを構築していく必

要がある。

ご報告の中にも、大学のある地域、ない地域、それぞれの特徴がありますので、県境連携を上手く活用して行けば良いのではないかという議論でした。

③「技」の分科会で議論されました内容を関係する組織体へフィードバックし、新たな視点で「結果と結びつく具体策を検討し、実務としてどう進めていくのが良いか」という提案型の議題に上げていきたい。

地域の特徴や環境を生かして産業に結びつけるという点では、「SEN A」の円卓会議等で実際に検討されているそうなので、そこに我々の今回の議論を重ねていけたらというという強い思いがあります。

分科会の最後に、少しコーディネーターとして意見を述べさせていただきました。今回21回を数える「地域サミット」ですけれども、これだけのメンバーが地域を跨いで集まるというのは、情報の共有化を含めて相互の親交・信頼の場として非常に良いことですが、年に1回だけで終わってしまう、しかも短時間で終わるというのは非常にもったいないとい感じています。

従って、過去の「地域サミット」で重ねて来た経過と成果を一旦総括し、地域の環境変化や経済・社会状況が変わっている中で、次のステップとしてどういうことが必要なのかという共通した認識を持つことが大切ではないかと指摘致しました。特に、地域単独や地域間で取組むべき課題があり、中期、短期で何をしなければいけないかというような点を踏まえた議論を継続していくって欲しいからです。

確かに、地域間で社会的基盤の特徴や差異が大きく、産業への取組みの方向性や規模、実施する場合の方法論、更に成果は一様ではありません。そこには多くの苦労や

知恵があると思います。ですが、こうしたことの参加者と共有する前提で、総合的な<テーマ>から具体的に実施できる共通した内容を盛り込んだ議論をお願いしたかったです。

会場に詰めかけていただいた聴衆の皆さんにも、次回以降の「分科会」開催に向けた課題を示し『まとめ』とさせていただきました。

最後に、飯田市商工会議所副会頭の萩本さん、それから、今回ご参加いただきました延岡市の首藤市長さんにも別な角度からご意見をいただきまして、これをそれぞれの立場で理解・咀嚼して生かしていきたいと思います。

「技」としては、以上3点の『まとめ』で終了いたしました。ご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

以上で報告を終わります。ありがとうございました。

**■ 「風土」分科会
コーディネーター
一般財団法人阿智開発公社
理事長 羽場睦美**

「風土」分科会の状況、内容報告をさせていただきます。

一言で申し上げますと、「風土」分科会は大変熱く、そして、和やかに終わることができました。私もとられてしまったマイクを奪取するのが大変であったということで、皆様もとても地域づくりのいろいろなんちくを語ってくださいまして、大変有意義な時間が流れたと、そんなふうに感じています。

今回の枠組みですが、「ないものねだり」ではなくて、「あるもの探し」のこの三遠南信の底力を探そう、使おうということがテーマで今回の話を持つことができました。

最初に、有名ですが、天龍村柚餅子生産者組合長の関様より、柚餅子をどのようにしてつくり出し、そして、どんな苦労をして広めていったかというお話を聞きしました。

柚餅子が大変おいしいものであることは、もう申すまでもないことですが、そのお話をされるお人柄、語り口調、そして、そこにさまざまな方が協力し、また、去っていかれたり、そのご苦労をお聞きいたしまして、「まさに単なるものを売るのではなくて、その地域のご先祖様、800年とおっしゃっておりましたけれども、800年の坂部の歴史、文化、自然、そして、にじみ出る人、これをまさに6次産業どころか、六六、三十六、もっとでしょうか、そういったものを商品として、商品でしょうか、文化でしょうか、売るということをお聞きした次第でございます。

最初にそのお話の基調報告をいただきまして、皆さんとディスカッションに入りました。

ディスカッションについては、細かいことは省かせていただきたいと思いますが、ちらっと申し上げますと、各地の名物・産物を、ないものではなくてあるものをいかに発見し、あるいはあってもそれをさらに改造して、お口に合うように、あるいは人の耳に届くように魅力的な商品に仕上げていくという工夫、ご苦労を様々な方々からお聞きしました。

そして、最後にまとめということになりました。

様々な資源はある。その資源を都会の人々は都会の目で見ていると資源にならない。山に住んでいる方は山に住んでいる方の目で見ていると資源にならない。お互いに自分たちが持っていない感覚、フレッシュな感覚で資源をさらに発展させていくことが必要なのではないか。そういうものを体

系化して、地域ブランドとして、まずは小さな地域ブランド化して、そして、最後には全体として三遠南信のブランドとして確立するような、いわゆる体系化、整備が必要ではないか。すなわち戦略でいいますと、ロジック設計とかセオリー設計といった、設計をもう一度、出たものを材料にしてし直す必要があるのではないかという1点目のまとめとなりました。

2点目は、それらをただ並べるだけではなくて、時間軸で追って、いつ、どのように、だれが、どうしてやっていくか。いわゆるそのプロセスをプログラミングしていく必要があるのではないかということです。

さて、3番目に、天龍村の大平村長から「毎回毎回やってももったいないではないか。これを形にして、みんなが共有して、去年から今年、今年から来年にということを築き上げていくことが必要ではないか。」という、大変すばらしいご提言をしていただきました。

ということで、三つ目は、今までつくり上げてきたすばらしい計画をチェックして、そして、再度アクションをしていく、リアクションしていく。トライをしていく。チェック・アンド・トライをしていくということがこの次の方向として大事になってくるのではないかというようなお話が出ました。



さて、そういうことで三つのポイントにまとめることができましたけれども、最後に一つ、逸話を申し上げまして終わりにしたいと思います。

鈴木田原市長さんから大変おいしいお話が出来ました。芋を加工して喜久水でうまい焼酎をつくったとのことでした。1,000本つくったがぱっと売れ切れてしまったという、大変よだれの出るようなお話をちょうどいたのですが、さあ、これから懇親会でと会場の皆さん、みんな期待したわけです。「今回は持ってきていないが」と。次回はお持ちをいただけるということでございますので、こんな楽しみを残しながら私たちの「風土」分科会を和気あいあいと閉じることができました。

以上、簡単ではございますが、ご報告とさせていただきます。

**■ 「山・住」合同分科会
コーディネーター
豊橋技術科学大学 教授 大貝彰**



「山・住」分科会では、今年、「人口減少時代における地域社会の持続可能性を考える」というテーマで意見交換をしました。今回のテーマは極めて大きなテーマでありまして、なかなか議論の的が絞りづらいところではありましたけれども、それぞれの方から非常に熱い思いが語られて、時間がなくなったという次第であります。

全体としては、まず初めに、今日の全体

会でパネリストを務めていただきました島根県中山間地域センターの藤山様から、「新たな地域社会の持続性を考える」というテーマでご報告をいただきました。その中で、私が非常に印象に残っている言葉として、冒頭に、「規模の経済から循環の経済へ」という、この考え方の中間地域には必要である。」ということを言われた。これは非常に的を射た言葉だと思います。

もう一つが、これからの中間地域の活性化、あるいは持続可能性というものに取り組んでいくときに、やはり地域の中での個々の小さな取り組みであるとか、いろいろなもの、資源であるとか、そういったものをつないでいく人であるとか、あるいは組織であるとか仕組み、そういったものをつくっていくということが必要であるというようなご提言をいただいたかと思います。

続いて、意見交換に移ってまいりました。

最初に「定住促進」、それから、「地域活力を維持するためには」ということで、それぞれの具体的な取り組み事例。続いて、この三遠南信地域の、特に中山間地域を内から見た視点といいますか、内部から見てどういった魅力があるのか、あるいはどういう資源を持っているのか。逆に、外から見たときに、この地域はどう見えているのかという視点からそれぞれご意見をいただきました。

最後、そういった資源を生かして、この中山間地域の維持や生活環境の向上に結びつけていくためには何が必要なのかという視点からご意見をいただきました。冒頭にも申しましたけれども、皆様、非常に熱い思いが出ていました。個々の取り組みもこれまでになく、実は私、ここ4年ほど続けて、この「山・住」分科会のコーディネーターを務めてさせていただいておりますけれども、今回ほど参加者の皆様の熱い思いが伝わってきた分科会はなかったなという

ように思っております。個々のご発言については、もうここであえて言う必要はないのかなと思います。

最後のまとめについて、この場で2点ほど確認をしましたので、そこについてのみ報告させていただきます。

まず1点が、中山間地域の定住促進を推進していくためには、よく言われることではありますけれども、人やものの交流、連携を図るということだろうと思います。特に、それぞれの地域での雇用の場をどうつくっていくか。こういった取り組みは、もう既にそれぞれの地域で非常に積極的に行われていると、今日、具体的な報告がありました。ですから、これからはそういう小さな取り組みを横につないでいく、人でつなぐ、あるいは仕組みでつなぐ、そういう

取り組みが三遠南信地域のこの中で必要なのではないかということが一つ。

2点目は、これも以前から言われていることではありますけれども、結局、まとめますと、この地域の持っている資源を生かした取り組みをより活性化させて、定住促進、あるいはこの地域の活力を向上させていくという意味において、やはり情報発信、これが欠かせないだろうということ。そのためにＳＥＮＡを中心として体制の強化・整備をする必要があるのではないかということ。

この2点について、この分科会で確認させていただきました。

以上、私からの報告であります。どうもありがとうございました。



■サミット宣言 飯田市長 牧野光朗

第21回三遠南信サミット in 南信州では、「新しい連携体制の実現に向けて～三遠南信連携の発展と越境連携地域交流～」をテーマとし、各分科会において、現在の状況、課題を検証の上、今後の展開に向けた取り組みについて議論をしました。

私たち三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）は、新たな連携に向け、本日のサミットでの議論を踏まえ、次の事項に重点を置き、県境広域連携の先駆者としての自覚を持ち、事業の推進に取り組みます。

1、三遠南信自動車道の一部供用開始により、地域医療の充実、産業・観光の活発化等整備効果が見られます。また、大規模災害時には、「命をつなぐ道」として効果を発揮することから、全国ミッシングリンクに位置づけられる本道路の早期完成の重要性を再認識しました。圏域の振興・発展のため、三遠南信自動車道の早期完成全線開通、リニア中央新幹線の早期開業、さらに浜松三ヶ日・豊橋道路、三遠伊勢連絡道路の実現を目指し、三遠南信地域連携ビジョン推進会議を中心とし、地域一体となった提言活動等を進めます。

2、地域の強みである産業基盤を最大限活かし、「三遠南信地域基本計画」や「地域イノベーション戦略推進事業（国際競争力強化地域）」による広域連携や产学官連携を一層強化し、国際的視野に立ち、オープン・イノベーションによる技術革新、成長市場へのチャレンジ、人材育成を推進し、地域産業の競争力強化、新産業の創出を目指します。また、三遠南信地域内の大学連携については、産官金との連携による、人財育成等について議論の場を設けることなどを通じて、引き続き検討してまいります。

3、「塩の道エコミュージアム」の形成に向け、自然、歴史、文化、産物など地域資源を見つめ直し、それらを活かした三遠南信の魅力の発信力を高め、地域固有の商品・サービスの提供により、三遠南信地域における持続的な観光客誘致等を促進します。

4、中山間地域を活かす流域モデルの形成に向け、各地域の定住促進施策等の推進のため、人・ものの交流・連携を図るとともに、情報発信体制の整備・強化を進めます。また、地震や台風等による、広域的または局地的な災害に対応するため、県境を越える防災体制の強化について相互連携して取り組み、安全・安心な地域の形成を推進します。

5、三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）は、現在の組織の体制強化を図るために平成26年度中に新しい体制に移行します。今後は、新しい体制のSENAと平成28年度を目指とした広域連合設置を検討する各自治体との間で、将来的な協力体制構築に向けて協議を進めます。

これらの取り組みを、ここに集うすべての主体が確認し、第21回三遠南信サミット2013 in 南信州のサミット宣言といたします。

平成25年10月30日

三遠南信地域連携ビジョン推進会議
三遠南信サミット2013 in 南信州

○次回開催地域挨拶

浜松市長 鈴木康友

皆様、長時間にわたりまして大変お疲れさまでございました。それぞれ有意義な議論がされたのではないかと思います。また、今回、このサミットを開催いただきました飯田市を初め、南信州の皆様に厚く御礼を申し上げます。

今回のサミットでは、来年の新体制移行を前提とした議論が行われたということ、そして、県境を越えた連携、あるいは様々な取り組みについて、全国的なシンポジウムが開かれたということは大変意義の大きいことであったと思います。県の境を越えたこうした取り組みが認知をされ、少し脚光を浴びてきたということは、これは一つ、大きな時代の転換点だと私は思います。

今、47府県体制ですけれども、これは明治21年にでき上がって125年間、微動だにしていません。この日本の中央集権的な、ピラミッド的な自治の構造をいかに府県体制が支えてきたかということがわかると思います。

少し私、府県体制について調べているわけですけれども、でも、いきなり47になったわけではなくて、皆様ご承知のとおり、明治になり、実は最初、廢藩置県によって3府302県ができました。明治維新というのは分権型の幕藩体制から、中央集権的な歐米列強に伍する近代国家をつくるというのが明治の革命でしたので、305も地方政府があつては困るわけでして、合併に合併を重ねて38まで減ります。しかし、上からの強制的な合併に反乱を起こしまして、今度は分離運動が起こります。宮崎県が鹿児島県から分離し、奈良県が大阪府から分離しました。こうした分離運動の結果、明治21年に最終的に香川県が愛媛県から分離して、47の府県体制が完成をしたわけあります。

ですから、この歴史を見ますと、この明治のときにできた47の府県体制に必然性・合理性があったというわけではありません。これが125年間、ずっと続いてきて、そろそろこの県の境を越えた取り組みをしてもいい時期、時代が来たのではないかと私は個人的にそう思っていますし、そういうものが脚光を浴び始めたというのは、これまで三遠南信地域の連携を積み重ねてきた成果ではないかと思います。

来年はいよいよ22回目でございます。これで7周したわけです。ずっと3市で開催をしてきましたけれども、いよいよ8巡目に入ります。来年のこの開催は、新SEN Aでの開催ということになりますので、ぜひまた一つステップを上げて、この三遠南信地域連携ビジョンの実効性ある推進に向けた議論が積み重ねられることを大いに期待をしたいと思います。

そして、ちょっと浜松市の宣伝をさせていただきますと、来年、浜松市で花博が行われます。10年前に浜名湖花博という大きな花の博覧会が行われました。その10周年を記念して、来年、花博が開かれます。秋に開催できればよかったですですが、残念ながら春でございます。そういう意味では、来年は皆様にぜひ春と秋と2回、浜松市へお越しをいただきたいと思います。

来年のサミットに向かまして、多くの皆さんにご参加いただきますことを心からご期待を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

本日はまことにお疲れさまでございました。ありがとうございました。

10 交流会

San-En-Nanshin Summit 2013 in Minamishinsyu

■ 交流会の様子



■ 観光連携事業



■ 三遠南信地酒サミット



■ パフォーマンス



